

昨夜ハ城壁占領ニ引続キ城内占領ヲ終ルモノト予想シテ寝ニ就キ
ン所、本朝ニ至リ未ダ城壁上ニテ対峙シアリトノ報ニ聊カ悲観セザ
ルヲ得ザリシモ、其後逐次状況ノ判明スルニ至リ、爾後ノ戦果拡張
モ順調ニ進展シ、日没迄ニハ概ネ市内ノ掃蕩ヲ終ル。コノ間黃浦江
上ニ於ケル米國砲艦ノ爆沈事件、友軍砲兵ノ友軍相撃、敵飛行機ノ
現出等ノコトアリシモ特ニ大ナル波瀾ナシ。

日誌ノ整理

昨日千代子宛手紙ヲ認メ筆ヲ持チ得ル自信ヲ得タルヲ以テ、暇ヲ
見テ日誌ノ整理ヲ為ス。十日付ノ内容司令部ノ談片ノ八項ヨリ書
ク。右手ノ食指、中指、無名指ノ三本ノ指ニテ書く。変テコナル字
トナルモ兎ニ角読ミ得ル字トナル。仲々暇取ルモ漸ク全部ノ整理ヲ
終ル。

軍司令官来ラズ方面軍參謀長来ル

南京攻略ノ目鼻ツキタル為、軍司令官ハ秣陵関ニ来ラレズ。藤本
大佐、大坂少佐戰況視察ニ第一線ニ、吉永少佐、新藤副官ハ設営ノ
為南京ニ至ル。寺田〔雅雄29期〕中佐ハ湖州へ次期作戰ノ準備ノ為
ニ行ク。光岡少佐ハ侍從武官ヲ送り飛行場へ。結局残りシハ山田大
尉ト二名ノミ。留守中間々電話アルモ閑散ニシテ日誌ノ整理ニ好都
合ナリキ。指ノ痛ミハ全ク去リ、唯不自由ナルノミニテ気分ハ良
シ。午後四時頃中支那方面軍參謀長、公平中佐、中山少佐来リ、第
一線ノ状況ヲ確カメラル。明朝完全ニ占領ノ旨ヲ報告スルト漏ラシ
アリシヲ以テ、異存ナキ様申シ置キシモ、藤本大佐一行帰着シ、本
夕ヲ以テ掃蕩ヲ終ルト述ベシヲ以テ其旨直チニ方面軍ニ打電ス。

敵軍ニ対スル宣伝ビラ

第二課ニ於テ調製シテ敵陣地ニ撒布セル宣伝ビラ手ニ入リシヲ以

明瞭ニシテ、非常ニ美味キモノト非常ニ不味キモノトアリ、美味ノ
トキハ内地米ヲシキモ、必シモ其ノミニモアラザラシク、南京米
ニモ美味ナルモノアルガ如シ。而シテ不味ナルモノニ至ッテハ、予
ガ嘗テロニシタルコトナキ程度ニ甚シ。

南京入城

昨日出発セル設営者ノ言ニ依リ、本日ハ南京ニ移リ得ルモノト認
メ、午前九時三十分出発、自動車ニテ南京軍司令部ニ向フ。途中ハ
一昨日第六師團ニ到リシ際通りシ道路ナルヲ以テ特ニ感ズルモノナ
シ。唯先ニハ皆ガ南京へ南京へと急ギ足ニテ北進セルニ反シ、今日
ハ早クモ一部部隊ノ南進スルヲ見ル。杭州攻撃ノ為湖州方面ニ転進
ヲ命ゼラレタルモノナラン。

南京城南門（中華門）外ノ橋梁破壊セラレ修理尚成ラズ、自動車
ヲ捨テ、徒歩ニテ仮橋ヨリ入城ス。

城門附近、敵ノ死屍累累々々惨憺タリ。前ニハ我軍及壕アリ、後
ニハ城壁アリテ堅ク城門ヲ鎖シ、進退兩難ニテ殲滅セラレタルモノ
ナラン。又多クノ障礙物材料アリ。攻撃遅延ノ場合ニハ此等ノ材料
ヲ以テ堅固ナル障礙物ヲ構築シアリシナラン。南京城壁ハ高サ約二
十米、厚サ又十米、実ニ堂々タルモノニテ、真面目ニ抵抗セラルレ
ハ容易ニ抜キ得ザルベキニ、実ニ天佑ナリキ。然リト雖、114 D、6
Dヲ合シ約千七百名ノ死傷ヲ出セリト聞ク。上陸以來最大ノ損害ナ
リ。以テ其ノ堅固サヲ想像シ得ベシ。

城内ニ入レバ死屍殆んどナシ。何レモ退却又ハ收容セルモノナラ
ン。南京ノ街路ハ想像通り主要道路ハ舗装シ、店舗亦整ヒ仲々立派
ニシテ、又新シキ町ナルヲ以テ、奉天城内等ニ比シテ清潔ニシテ又
整然タリ。支那人奪略ノ跡、防空用避難壕、主要道路ヲ制スル土囊

テ記念ノ為貼付シ置ク。

△ビラ略▽

多食ノ習慣ツク

△十一行略▽

◇十二月十四日（火）晴 秣陵関ヨリ南京ニ移ル

昨夜ノ睡眠

入院以來熟睡セザル日多カリシガ、依然其ノ後モ寝付キ悪シク、
昨夜モ寝入りシハ午前五時頃ナリシガ如シ。久シク不通ナリシ洪藍
埠トノ連絡通ジ、夜中ニ電話来リ、直チニ処置ヲ要スルモノアリ、
夜半発電ヲ為ス。又本日ハ司令部ノ移動ヲ為スニ付早朝ヨリ伝令ガ
右往左往シ、結局睡眠時間ハ一、二時間カ。

南京虫ヲシキモノニササル。コノ附近住宅住民臭氣少シ

就寝間モナク左手首ガカユシ。永イ間入浴セザリシ關係カトモ思
ヒシモ左ニアラズ、確カニ虫ニササレタルヲシ。正体見エザルモ、
蚊、蚤ニアラザルコト明瞭、恐ラク南京虫ナラン。

南京虫ハ其ノ名ノ如ク当地方ノ特産物ト考ヘ警戒シアリシモ其ノ
コトナク、不思議ニ思ヒシニ到頭昨夜ハヤラレタルガ如シ。外ニモ
其ラシキモノニササレタル者アルガ如キ噂ヲ聞ケリ。又支那人、支
那家屋ノ臭氣ハ北支、滿州ニテハ鼻ニツキアルモ、当地方ニハ其ノ
臭氣ナク、何時、何処ノアバラ屋ニ入ルモ、臭氣ニ困ル様ナルコト
ナシ。食物ニ關係カ。

支那米

支那米ハ内地ニ在ルトキ、ヨク南京米ト称シ、余リ評判ノ良キモ
ノニアラズ。当地ニ来リ食膳ニ上ル飯ヲ見ルモ、美味、不味ノ懸隔

陣地等散在ス。其ノ間ヲ我入城軍隊ガ設営準備ヲナシ、暇ナ兵ガ戸
毎ニ何カ獲物ナキカト探リアリ。飲料品店ヨリ酒、飲料水、食料品
店ヨリ缶詰、漬物等ヲ持チ出シアルモノ多シ。煙草亦同ジ。店頭ニ
ハ

「同人婦里

暫停營業」

ノ如キ貼紙ヲナシアルモノ多シ。相当早クヨリ休業セル店ノ多カリ
シヲ物語ルモノトイフベシ。反日宣伝「ボスター」モ所々ニ見受
ク。支那住民ハ一人モナシ。各隊ガ荷物運搬等ノ為、地方ヨリ随
行セシメタル者ノミ。其ノ内ニハ初メテ南京ヲ見ル田舎者モアルベ
シ。其ノ感ヤ如何。

徒歩約二千米ニシテ軍司令部位置タル「上海儲備銀行」ニ到着。
時ニ午前十一時三十分。火災割合ニ少ナシ。

南京軍司令部

当銀行ハ英國系ト聞ク。近代の「ビルヂング」設備可ナルモ、設
営ノ手違ヒニテ、6 Dトノ間ニ感情問題起リ、各部ト合ニシタル為
割合狹ク宿營ス。水洗便所等アルモ水道停止シアル為使用シ得ザル
ニ至ルコト明カナリ。大都市ニ入り水道ナキハ水ニ不便ヲ来スコト
明カナリ。スチームアルモ用ヲ為サズ。電灯ハ其ノ日ヨリ「ホーム
ライト」ニ依リ点灯ス。之ヲ要スルニ、建物、施設トシテハ從來ヨ
リ随一ノ司令部ナランモ、間モナク色々ノ苦情出ヅルコト予想ニ難
カラズ。軍司令官、池谷、早坂 午後着。

入城式打合

午後二時中山門ニ集合スル約束ナリシヲ以テ、護衛兵四名ヲ率
キ、約五千米ヲ徒步行軍ニテ中山門ニ至ル。午後二時三十分公平中

佐、大坪中佐ノ一行到着。打合セヲ為ス。概ネ予定通り施行シ得ルヲ知ル。但シ慰靈祭ハ飛行場ニ變更ス。途中懐カシノ助川部隊ノ標札ヲ見、歩三八ノ已ニ入城シアルヲ知ル。兵ニ聞ケバ、本部ハ未ダ入城シアラズト。護衛兵ハ良イ所へ連レテ来テ貰ッタト言ツテ日誌ニ記録シアリ、可愛イ。

南京城東部ハ広漠タル空地ニシテ、都市計画ノ雄大サヲ認ム。土地買収ノ面倒モナク、理想通り行ヒアルニ違ヒナシ。大部日本トハ違フ様ニ思ハル。

国民政府ニ至リシモ、同じ様ナ家屋ガ重疊配置セラレ、奥ニ行ク程程度良クナル。之モ支那式ナリ。割合ニ貧弱ニシテ聊カ物足ラヌ感アリ。

徒歩行軍五料、出征以來初ノ発汗ヲ為ス。

繙帯交換

手ノ傷ニ少シク重ミヲ感ジ来リ、且繙帯以來四日ヲ経過セルヲ以テ軍医部ニ至リ、繙帯交換ヲシテ貰フ。着イタ許リニテ「ガーゼ」繙帯アル許リ。傷口ヲ潤ス「オキシフル」ナク、実ニ荒療治ナルモ仕方ナシ。痛サヲコラヘテ交換シテ貰フ。傷口ノ状況可、深谷中佐、軍医部長ノ両外科医ガ言フコトナレバ間違ヒナカラン。予自身ノ感じニテモ悪化シアルモノトハ思ハレズ。

◇十二月十五日(水) 晴 南京

軍主力南京ニ集ル

第六師団、第十八師団、第一百十四師団主力及各師団司令部ハ何レモ南京ニ入城シ、南京南部ニ位置シ、事実上ノ軍主力ノ入城ハ終了セルモノト認ム。電話連絡モ通ジ便利ナリ。各主任者モ残務ヲ整理

ヲ超越シ無我ノ境ニ達シ、唯攀登アルノミノ心境ニ達セル当時ノ彼等ノ心理ハ全ク神城ニ達セルモノト謂フベク、聞クモノヲシテ思ハズ襟ヲ正サシムルモノアリ。死生ヲ超越セル者ハ神格ヲ備ヘタルモノトイフベク、コノ神格アリテ始メテ南京城モ陥落セルモノト謂フベク洵ニ尊キ極ミナリ。

入城式及慰靈祭命令下達起案

午前十一時頃中支那方面軍公平参謀来リ命令ヲ持参ス。之ヨリ先、内示ニ基キ印刷ヲ開始シアリシヲ以テ、一部修正ヲナセシノミニテ印刷セシム。夕刻各隊ニ分配ス。大演習ノ観兵式トハ異ナリ極メテ大マカニ作ル。之ニテ十分出来得ルモノト認メ樂觀ス。

最初ニ受取リシ郵便物

南京入城スレバ早クモ郵便物ヲ分配ス。予ノ許ニ分配サレルモノハナイモノト覚悟シアリシ所、一通ノ印刷物が机上ニ置カレ、不思議ニ思ヒ手ニ取レバ西浦(和夫³⁹期)大尉ノ航空兵転科並ニ陸軍大学校卒業ノ挨拶状ナリ。表記ハ上海派遣軍柳川司令部ト認メアリ。光岡少佐ノ言ニ依レバ、誤テ上海派遣軍ト表記シアルモノノミ配達セラレアリト。噂ニ聞ケバ、当軍方面宛ノモノハ十萬個以上ノ行囊ガ上海ニ未配達ノ儘堆積シアリト。其ノ内ニハ南京城攻略ノ犠牲ト為リ、南京郊外ノ露ト消ヘシ勇士宛ノモノモ多数含マレアルベク何ト可哀相ナルモノ哉。

食事ニ対スル文句

出征以來食事、給養、宿営等ニ関スル文句ハ絶エ間ナク、随分自分勝手ノコトヲ言フモノナリ。今迄現地戦術ヲ演習等ニテ同僚或ハ上官ト同行、同宿スルコト度々ナリシモ、ソノ期間ノ短縮ナルト設備ノ良好ナルトニ依リ、概ネ人間ノ個性ヲ發揮スルコトナク終リ、

ス。

留守宅ニ手紙

正午頃恩賞課ノ某大尉連絡ニ来リ、来ル十七日頃ノ飛行機ニテ内地ニ帰ルト聞キシヲ以テ、之ニ手紙ヲ托送スレバ早く留守宅ニ到着スルモノト思ヒ、大急ギニテ一筆認メ依託ス。コノ前十二日ニ航空郵便ニ托シタルモノト何レガ早く到着スルヤ。面白キ研究問題ナリ。出征当時ノコトヲ考ヘレバ内地ニ手紙ヲ書キ得ル丈余裕モ出来、気分モ楽ニナリタルモノト謂フベシ。

今迄四回手紙ヲ出シタルモ、案外第三、第四回ノ方ガ早く到着セルニアラズヤト考フ。

溧水附近敵兵襲撃ノ報

午後三時頃通信手来リ、秣陵関ヨリノ通信手ノ報告ニ依レバ、約二千名ノ敵ガ溧水ヲ襲撃シアルガ如シト。依ッテ直チニ歩兵二中隊ヲ自動車ニ搭乗セシメテ派遣ス。兵站等後方ノコトハ大袈裟ニ伝ハルモノナリトハ言ヘ、カカル報告ニ接シタル以上放置モナラズ、直チニ処置ス。然ルニ夕刻第三課書記来リ、当時ノ情況ニ遭遇シ報告シテ曰ク

第三師団ノ軍医部長一行ガ自動車ニテ師団主力ニ追及中、百余名ノ敵ト遭遇シ、数名ノ死傷者ヲ出シタルモ敵ハ直チニ退散シ、部長等モ一応溧水ニ引返シ、新ニ溧水守備隊ヨリ護衛兵ヲ貰ヒ前進セルニ何等異状ナカリキ。

ト果タシテ予想通り話ハ大キク伝ハレリ。

第六師団城壁一番乗兵ノ軍司令官ニ対スル報告

南京南門城壁ニ梯子ヲ掛けテ一番乗ヲ為セル兵(生存セル者)及中隊長等ノ幹部、軍司令官ノ処ニ来リ、当時ノ状況ヲ報告ス。生死

無難ニ経過シ来レリ。然ルニ今次戦争ニ方リテハ仲々旨ク行カズ、殊ニ当軍ノ迅速ナル作戦ハ給養方面ノ不如意ヲ生ジ、如何ニ奮励努力スルモ限度アリ、其ノ辺ノ事情ハ十分諒承シアルニ拘ラズ神經ノ昂ブルニ從ヒ文句ガ多クナリ、食事毎、転宿毎ノ文句実ニ耳ヲ覆ハシムルモノアリ。

予ノ所感ヲ以テスレバ、食事ノ如キモ滞在数日ニ達スレバ一般家庭ノ食事ニ劣ラズ、時ニハ十分之ヲ凌駕シアル程度ノモノヲ提供シアリ、(唯冷エアルヲ遺憾トス)ト認メ満足シテ戴キアリ。又寢床ノ如キモ寒ササヘ防キ得ベ、文句ヲイフベキ筋合ノモノニアラザルニ、ヤレ日光ガ入ラナイトカ、南京虫ガ居リソウダトカ、室ガ狭イトカ実ニ五月蠅シ。

△十行略▽

附近ニ銃声アリ

夕食ヲ為シアルトキ、司令部位置ヨリ数百米ヲ離レタリト覺シキ距離ニ小銃声ニ似タル多数ノ、但シ緩徐ナル音響ヲ聞ク。最初ハ火災ニ依リ何カノ通信爆発ナランカト話シ合ヘルモ、余リニ連続スルヲ以テ、俘虜ヲ料理セルモノナラントノ判断ニ意見一致ス。早坂少佐亦俘虜数十名ヲ連行セルヲ見タリト謂フ。

火災

南京入城ノ際、火災、奪略ヲ嚴禁スル様方面軍ヨリ注意アリ、火災モ割合ニ少ナカリキ。然ルニ一度起リシ火災ハ、特ニ消火ノ処置ヲ為サズ、又方法モナキヲ以テ、緩徐々ラ延焼シ仲々消火セズ。幸ニシテ風ナキ為、甚ダシクハナラザルモ夜間ハ所々ニ火柱カ立ッテ仲々ノ壯觀ナリ何トカ消火ノ要アリトイフベシ。

自動車運転手ノ戦死

軍司令部用自動車ニ谷田(勇27期)、堂ノ脇(光雄34期)両参謀搭乗シ第四百十四師団司令部ニ至ル途中、小銃彈ヲ受ケ自動車運転ノ兵ハ頭部ニ貫銃創ヲ受ケ即死ス(十二月八日)。其ノ自動車ヲ見ルニ丁度運転台側方ノ硝子ニ小銃彈痕アリテ、當時ノ非慘事ヲ物語レリ。運転手モ軍参謀ヲ搭乗セシメテ戦死シタルナレバ思ヒ残ス所ナカルベシ。

◇十二月十六日(木) 晴 南京

入城式最後ノ偵察

午前中自動車ヲ駆テ入城式最後ノ偵察ヲ為ス。道路、橋梁何レモ健在シ、明日ノ実施ニ遺憾ナキヲ確カメテ帰ル。南京市内ノ状況一昨日ト変リナシ。市内ニ在ル日本軍ノ稍々増加シアルヲ認ムルノミ。

文化施設内ノ非文化生活

先ニ司令部ニ到着セル際、水道(支那ニ於テハ、水道ヲ自来水トイフ。妙ナリ)ノ閉塞ニ伴フ不便ヲ予感セル所、案ノ定直チ其ノ害現ハレ、其ノ極端ナルハ水洗便所ニシテ、已ムラ得ズ便所ノ横ニ甕ヲ置キ、其ノ上ニ板ヲ置キ便所ト為ス。文化施設中ノ非文化生活ノ活範ト言フヘシ、其他井戸ノ不足ニ依ル水ノ不自由等随所ニ不便ガ現レツツアリ。

感状授与式

午後二時三十分ヨリ感状授与式ヲ施行セラル。第十八師団、国崎支隊、平望鎮占領部隊ノ三隊ナリ。先ノ第六師団ヲ加ヘ部隊感状合計四個ナリ。洵ニ慶賀スベキ所ナリ。

留守宅ニ発信ト大塚(操)法務官ノ来着

ニハ気分ガ落付クニ從ヒ、寝衣携行ノ着眼ノ良好ナルヲ賞讃スルモノヲ生ズルニ至ル。然レドモ、予ハドウ考ヘテモコノ点丈ハ反対ナリ。

入城式参列ニ関スル各部隊ノ心理状態

入城式ハ陣中ニ在ル軍トシテハ洵ニ迷惑ニシテ、最小限度ニ於テ方面軍ニ協力スル態度ヲ採ルコトニ方針ヲ定メラレアリ。予亦其ニ応ジ計画アリシニ、一般軍隊ノ状態ハ必シモ然ラズ。勿論命令ニ基キ着々南京ヲ後ニ新任務ニ就キアル部隊多クアルモ、中ニハ無理ヲシテモ入城式ニ参加シ度希望ヲ申出ヅルモノ相当ニ多シ。又、入城式参加ハ別問題トシテ、何トカシテ一応南京ヲ見テ帰リ度トハ一般將兵ノ心理状態ナルガ如シ。予モ亦折角入城式ニ参画スル以上ハ、成ルベク「ニュース」映画ニ映リ、内地ニ於テ公開ノ場合ニハ、留守宅ヤ親戚ノ者ニ見セ度心理状態ニ陥リ其ノ旨郵便ニテ通知セル次第ナリ。又已ムラ得ザル所ナルベシ。

南京占領ノ内地新聞ヲ見ル

昨十五日夕上海方面ヨリ飛来セル飛行機ハ、南京飛行場ニ内地新聞ヲ投下ス。十五日付朝刊及夕刊(十四日夕ノモノ)ニシテ、南京占領ヲ報ズルト共ニ、内地ノ提灯行列ノ写真ヲ掲ゲ、感激ノ情手ニ取ルガ如シ。我々ノ南京占領ガ斯ク迄内地ニ於テ喜バレアルコトヲ見レバ、当然トハ言ヘ洵ニ有難シ。待望ノ南京占領ノ宿望ヲ達シ、敵ノ首都占領トイフ歴史的大事業ニ参画シ得タル光榮、子孫末代ニ伝フベキモノナリ。

末次大將内務大臣トナル

南京占領ノ新聞ノ一偶ニ末次大將ト馬場鉄一氏トガ内務大臣ヲ交迭セラレアル辞令アリ。予之ヲ発見シ皆ニ伝フ。皆ガ「アッケ」ニ

親類廻覧用手紙ヲ暇ヲ利用シテ記載ス。普通ノ軍事郵便ニテハ、何時到着スルヤ不明ナルヲ以テ、予メ記載シ置キ序ヲ利用セントスル積リナリキ。然ルニ書キ終ルヤ否ヤ、偶然陸軍省ヨリ大塚法務官来リ、一別以来一月、久闊ヲ叙シツツ色々快談シ、最近ノ陸軍省ノ話ヲ聞キ、最後ニ今書イタ許リノ手紙ヲ委託シ、高野サンヲ経テ留守宅ニ渡サレンコトヲ依頼ス。虫ガ知ラセルトイフカ、真ニ偶然ナリキ。昨日恩賞課員ニ依頼セル手紙ト何レガ早く到着スルカ、面白キ問題ナリ。一ニ委託者ノ内地帰還期ノ前後ニ因ルモノトイフベシ。日高、中沢書記官ニモ出ス。

中村屋ノ洋かんヲ食フ

光岡少佐ガ新宿中村屋ノ洋かんノ缶詰ヲ開ク。駿河屋洋かんニ劣ラザル美味ニシテ飛ブ様ニ売レテ大ナル缶詰ハ見ル内ニ残り少ナクナル。南京入城迄内地携行品ヲ保存セシ光岡少佐ノ心掛嘉スベク、予ハ氷砂糖ヲ少量携行セルノミ。「バット」ハ今尚残レリ。南京入城以来煙草ニ不自由ハナキモノノ如ク、已ニ「バット」ノ価値モ減少セリトイフベシ。

将来ノ配備ニ関スル中支那方面軍命令受領

南京占領ニ伴ヒ爾後ノ配置ニ関スル中支那方面軍命令到着。軍ハ南京ヲ上海派遣軍ニ譲リ、概ネ太湖中央ヲ東西ニ連スル線以南ノ地区ヲ警備スルコトナリ、之ニ伴フ命令ヲ起草ス。今迄方面軍ヨリ爾後ノ配備ニ関シ、何等ノ指示無カリシモヤット到着ス。

私服ノ携行

軍参謀中寝衣トシテ和服ヲ携行セルモノ大佐級ニ二名アリ。初メノ内ハ戦争ニ行クノニ寝衣トハ洵ニ覚悟ガ悪いト冷笑的ニ之ヲ見、其ノ後ニ於テモ決シテ感心シタ態度トモ思ハズ。然ルニ他ノ参謀中

取ラレテ色々ト噂仕合フ。結局何ノコトカ想像ガツカズ、何カ深キ事情ガアルニ相異ナカルベシトノ結論ニ達シタルノミ。戦地ニアルモノトシテハ全ク寝耳ニ水ナリキ。児玉中將ガ日露戦争前ニ内務大臣ヲ為シ、後満州軍総参謀長ニ転シタル例アルモ、軍人ヲ要スル戦時ト為リ態々軍人カラ内務大臣ヲ出ストハ、稍々反対ノ現象ナリトイフベシ。

帰還及来訪者

仙頭(俊三36期) 参謀ハ国崎支隊長ト共ニ午後一時頃帰還ス。金山ニ於テ別レテ以来二十四日目ナリ。久シク第一線部隊ト行動ヲ共にセル為、辛苦ノ様顔貌ニ現ハル。

米艦爆撃事件

又午後三時頃中支那方面軍武藤(章25期) 参謀、大本營西義章(31期) 参謀来リ、揚子江上ニ於ケル米艦爆撃事件ノ打合せヲ為ス。又、午後十一時頃海軍ヨリ有馬(高泰52期) 大尉、日高少佐来リ、米國ニ於テハ爆沈セラレタル軍艦ヨリ避難セル「ボート」ニ対シ、陸兵ガ射撃シタルトテ「センセーション」ヲ起シアル由、陸兵ガ射撃セル事実アリヤト質問ス。

當時ノ第一線ノ状況ヨリ見テ、国崎支隊ハ石仏寺ニアリ、其ノ他水上輸送中ノ兵力ナキヲ以テ、射撃セル事実ナキモノト認ムト答フ。舟艇輸送中ノ兵力アリシヤトノ質問ニ対シテハ不明。若シアリトスルモ護身用ノ武器ヲ有スル兵ガ一、二名宛乗組ミアルニ過ギザルヲ以テ戦闘力ナキモノト認ム。従ッテ之等ノモノガ自ラ戦闘ニ参加スルガ如キコトハ、万ナカルベシト答フ。

(大坂、池谷、吉永、仙頭各参謀ノ意見ヲ聞キ。瀬川少佐同席ス。) 值賀(忠治19期第三) 飛行団長午後一時頃、内山(英太郎21期)

砲兵旅団長〔野戰重砲兵第五旅団長〕亦同時刻頃來ル。

本昼食ニハ軍司令官、師団長モ会食セラル。

暖氣ト夜間及払曉執務

当地方ノ暖カキコトハ何回モ記載セルモ、大部北方ニ位置シアル南京ト雖非常ニ暖ク、何事ニモ非常ニ染ナリ。其ノ上連日ノ晴天ニテ気分モ良ク、日本人向キノ好適地ト思フ。又退院以來ノ睡眠時間ノ減少ハ自然就寢時間ヲ遅カラシメ目醒ムル時間ヲ早カラシム。而シテ気温高キヲ以テ、夜遅ク他人ニ後レテ床ニ就キ、日出前他人ニ先シテ離床スルモ、寒氣ノ為執務ヲ妨害セラルルガ如キコト毛頭ナク、不寝番ヨリ火種ヲ貰ヒ火鉢（トイフモ多クノ場合洗面器ナリ）ニ火ヲ入ルレバ十分ナリ。他人ノ就寢シアル時間ヲ利用シテ日誌ヲ認ムレバ、手ノ不自由ニ依ル時間ノ浪費モ之ヲ解消シ、却ッテ從來ヨリモ詳細ナル日誌ヲ記載シ得ル結果トナレリ。

負傷ノ經過順調

傷ノ痛ミハ全ク去リ、筆モ指ト食指トノ間ニ入レテ書キ得ル様ニナリ、能率モ上ル。又今マデ首ヨリ吊シアリシモ本日ヨリ之ヲ脱シ時々下ニ下クルモ余リ痛カラズ、輕易ナル仕事ニ右手ヲ補助ニ使用スルモ何等ノ支障ナシ。コノ調子ナラバ明日ノ入城式ノ乗馬ニハ支障ナキコト明瞭ナリ。内地ヨリ來レル大塚法務官、方面軍ヨリ來レル武藤大佐ニ對シテモ、手下ゲテサヘ居レバ質問セラレテモ適当ニ胡麻化シ而モ相手ハ深く追及シ來ラズ。左手ノミヲ使用シ而モ洗面、手洗ヲ為サザル為手洗ニ左手ノ汚レルコト実ニ驚ク許リナリ。本日ハ當番ニ湯ニテ洗ヒ貰ヒ一時ハ綺麗ニナリシモ直クズズ黒クナル。驚クニ堪ヘタリ。

孫末代迄ノ光荣ニシテ、所謂感激無量トハコノ心理状態ヲ指スモノナリト自悟セラル。

先ツ我砲撃ニヨリ半バ破壊セラレタル城門ヲクマリ、左右ニ整列セル部隊ノ中ヲ乗馬ニテ進ム。司令官ニ對スル敬礼ノ喇叭ニ迎ヘ送ラレツ、行列ハ進ム。幾多ノ戰歴ヲ物語ル軍旗、下賜セラレタル許リニテ真新キ軍旗ノ幾枚カニ敬礼シツツ、又戦友ニ捧ゲラレテ本日ノ儀式ニ参列セル幾多ノ遺骨ニ默禱ヲ捧ゲツツ、極メテ複雑ナル感情ニ支配セラレテ唯感激アルノミ。殊ニ亡キ戦友ニ本日ノ喜ビヲ頒タントシテ、遺骨ヲ奉ジテ参列セル友情ニ至ッテハ、思ハズ襟ヲ正サシムルモノアリ。行程約三軒ニシテ式場タル国民政府ニ到着ス。予メ式場ニ到着セル者ヲ加ヘ、国旗掲揚式、遙拜式、万歳三唱ヲ為シ、次イデ乾杯ヲ為ス。恐ラク数日前迄ハ青天白日旗ヲ掲ゲアリシ国民政府ニ本日ハ日章旗ヲ掲ゲ、君ヶ代ノ奏樂或ハ喇叭ニ合ハセテ遙拜、万歳ヲ行ヒ、而モ其ノ所ハ支那ノ首都南京ナリ。時ハ昭和十二年十二月十七日午後二時三十分。何人カ感激セザルベキ。文章ノ拙キ者ニハ表現ノ辞ナキモ、其ノ感激ニ至リテハ何人モ同ジコトナリシト信ズ。

中支那方面軍司令官 松井大將

上海派遣軍司令官 鳩彦王

第十軍司令官 柳川中將

中支那方面艦隊司令官 長谷川中將

午後三時乾杯ヲ終テ解散ス。

堵列軍隊中ニハ助川部隊（歩三八）アリ。一所懸命ニ誰カ顔見知りノ者ガ居ルカト捜シタルモ見付カラズ、唯聯隊長一名ノミ。物足ラヌコト甚シ。誰カ一人位ト思ヒシモ其モ無駄ナリキ。然レドモ懷

◇十二月十七日（金）晴 南京

独山、乍浦鎮占領部隊ノ戰鬪
先ニ入院中金山衛城占領部隊ガ独山、乍浦鎮占領ヲ命ゼラレ成功ノ望ナク、悲觀的言辭ヲ漏セリトノコトヲ耳ニシ大イニ憤慨セルニ、本日到着セル該隊ノ戰鬪要報ニ依レバ、何等ノ抵抗ヲ受クルコトナクシテ攻略シ、所命ノ地点ニ到着セルガ如シ。案ズルヨリモ產ムガ安シトハコノコトナラン。

入城式ノ為各部隊ノ集合

軍司令部トシテハ命令ヲ下シ置ケバ後ハ何モナスコトナク、本日ハ唯「ボカン」トナシ居レハ可ナリ。各部隊ハ午前中ヨリ軍司令部宿舍ノ前ヲ式場ニ向テ集合シアリ。軍隊ノ命令系統ノ組織ハ、流石ニヨク出来タルモノニシテ、軍ヨリ命令スレバ「チャン」ト各部隊ハ其ノ通り動イテ呉レ有難キモノナリ。最早今日トナレバ自分自身ガ時間ニ遅レザル様ニ集合スルアルノミ。

入城式

午後〇時三十分出發、集合地タル中山門ニ至ル。

中支那方面軍司令官及上海派遣軍、第十軍ノ兩軍司令官ヲ迎ヘ、次イデ其ノ後方ニ隨行シテ入城ス。隨行ノ順序左ノ如シ。

參謀長 藤本大佐 吉永少佐 大坂少佐

井上大佐 池谷少佐 清水大尉 〔參謀長先頭・以下

谷田大佐 山崎少佐 仙頭大尉 4列〕

小畑中佐 堂ノ脇少佐

中山門ヨリ入レバ、右ハ上海派遣軍、左ハ第十軍ノ諸隊ガ徒歩編成ヲ以テ整列シアリ。思フニ本日ノ盛儀ニ參列シ、而モ幕僚トシテ閱兵ニ隨行シ得タル喜ビハ実ニ何モノニモ例フルモノナク、全ク子

カシノ軍旗、予ガ十余年前ニ捧持シタル軍旗ハ、今ハ數代後ノ旗手ニ捧持セラレテ南京城頭ニ翻ヘレルニアラズヤ。コノ軍旗ハ明治三十七、八年戰役ニハ父（注・妻の父）ガ其ノ下ニ於テ忠勤ヲ励ミ、次イデ予ガ大正十二年ヨリ十三年ニ互リ旗手トシテ奉仕シ、更ニ今南京城頭ニ於テ隣接軍ノ幕僚トシテ其ノ英姿ヲ拝ス。コレ亦感激ノ極ミニシテ、目ニ触ルルモノ、耳ニ聞ユルモノ、一トシテ感激ノ種ナラザルハナク、如何ニ吞氣ナル予モ幾度カ眼頭ノ熱クナルヲ覺エタリ。モウ此以上、下手ナル筆ニハ書クコトヲ得ズ。

奇遇

本日式場ニ於テ会ヒタル珍シキ人々。

片岡一郎〔31期〕少佐（一六師兵器部）三八出身、勝屋福茂〔32期〕少佐（歩六八大長）三八出身、上妻慶賀〔29期〕少佐（歩一九旅副）三八出身。

其ノ他助川〔靜二9期〕大佐、野田〔謙吾24期〕大佐、田尻〔利雄23期〕大佐、猪木〔近太23期 6K長〕大佐、福原〔豊三20期〕少將、北野〔兵藏36期〕少佐、榎原〔主計35期〕少佐、櫛田〔正夫35期〕少佐、佐方〔繁木32期〕少佐、本郷〔忠夫32期〕少佐、小林獸医少佐、松沢〔恭平33期 9D參謀〕少佐、木佐木〔久33期〕少佐、江口〔浩平33期 方面軍參謀〕少佐、遠藤新二〔28期 3D參謀〕中佐、川久保〔鎮馬27期 9D參謀〕中佐。

大演習終了時、講評ニ集マリシ時ト同様ノ状況ナルモ、戦地トイヘバ又格別ノ感アリ。而モ皆仲々ノ元氣ノ様ニ見受ケラレ頼母シク思ハレタリ。予モ今日ハ手ノ綱帶ヲ小サクシ下ニ下ゲテ目ニツカヌ様ニ工夫セシ為、誰カラモ咎メラルルコトナカリシハ幸福ナリ。然レドモ写真ニトラルトキハ、成ルベク指ガ写ラザル様苦心セリ。

写真ハ大イニ撮ッテ呉レルモノト案シミニナセルモ余リ後方ナリ
シ為、自分等ノ所マデ写真屋カ来ラズ、行列ハ到頭撮ラズ仕舞ヒナ
リシナラン。遥拝、万歳ノ際ニハ、司令官席ノ直前ナリシヲ以テ或
ハ撮ラレシヤモ図ラレズ。ソノ時ノ整理順序ハ左ノ通りナリキ。

参謀長

藤本大佐 池谷少佐

井上大佐 山崎少佐

谷田大佐 堂ノ脇少佐

吉永少佐 仙頭大尉

南京市内見学

祝賀会解散後堂ノ脇少佐ノ案内ニテ市内見学ヲ為ス。先ヅ日本大
使館ニ至ル。日高参事官以下館員出迎ヘ下サル。去ル八月月中旬日章
旗ヲ下ロシ内地ニ引揚ゲテヨリ四月ニシテ、再ビ屋上高ク日章旗ヲ
掲グルコトヲ得、日高参事官以下大イニ感謝ノ意ヲ述ベラル。本人
等ニシテ見レバ其コソ感無量ナルベシ。次イデ中山北路ヲ北進、南
京政府機関、即チ軍政部、交通部、外交部、鉄道部、高等法院等ノ
諸建築物ヲ見テ、揚子江岸ノ中山碼頭ニ至ル。揚子江ハコノ附近河
幅割合ニ狭シ。其ノ中ニ七、八隻ノ海軍駆逐艦碇泊シアリ。又河岸
ニハ無数ノ死骸ガ放置セラレ水浸シトナリアリ。死屍累タトイフモ
程度ニ色々アリ、コノ揚子江岸ノモノコソ真ノ死屍累タニシテ之ヲ
地上ニ出セバ所謂死体ハ山ヲ為ストイフモノナラン。然シ死体ヲ見
ルコト幾度ナルヲ知ラズ、少々ノコトニハ驚カズ。コレニテモ平氣
ニテ夕食ニハ舌鼓ヲ打ツ、無神経ニナリタルモノナリ。下関ヨリノ
帰途ハ、中央党部ヲ見テ玄武門ニ至リ、城壁上ヨリ玄武湖ヲ望見
シ、紫金山、天文台山、富貴山砲台等ノ説明ヲ聞キ、南京城ノ規模

リ。本日ハ南京入城ノ式アリ、南京宿泊最後ノ日ナリ、入城式式場
ヨリ持チ婦レル恩賜ノ御酒ノ残リアリ、池谷参謀(十日付ニテ中支
那方面軍参謀ニ転任シ、明日赴任ス)ノ送別宴会アリ等ノ諸条件備
ハリ、殊ニ御賜ノ御酒(月桂冠)ハ非常ニ美味ナリト見ヘテ度々過
ゴシ、其ノ上他ノ課ニ行キテモ飲ミタルラシク、夜半頃ヨリ酔弘ヒ
出シ、大声ヲ発シ、制止セントスル憲兵ヲ撲タントシ、室内ニ小便
シ手ニ負ヘズ。ヤット午前一時頃吉永、池谷、予等ノ制止ニ依リ就
寝ス。同少佐ハ酒ノ度々過ゴスト急ニ性格ガ変ル癖アリ、今後トモ
注意セザルベカラズ。要ハ周囲ノ者ガ余リ飲マザル様注意スレバ
可ナリ。

○十二月十八日(土) 雲 南京ヨリ湖州へ

転進

軍ハ既ニ杭州付近ノ占領ヲ命ゼラレアルヲ以テ、南京入城ト共ニ
着々之ガ準備ニ着手シ、兵力移動ヲ開始シアリシガ、本日慰靈祭終
了後軍司令官ハ直チニ飛行機ニ依リ湖州ニ向ハルコトトナリ、書
記、伝令等所要ノモノハ早朝自動車ヲ以テ出発セシム。

雪降ル

昨夜遅クヨリ相当ニ強風アリ。天候悪化セルガ如キノ予感ヲ以テ
今朝起床スレバ、自動車ノ屋根、各家ノ屋根ニ薄雪トモ霜トモツカ
ヌ程度ノモノ積リアリ。先ヅ薄雪ト判断ス。地上ハ小雨ノアリシ程
度ニ濡レアリ、昨夜降雨アリシモノト判断ス。本日ハ慰靈祭ノ予定
ニ就キ天モ特ニ雨ヲ降ラセタルナラン。

参謀長、軍司令官ノ行動

参謀長ハ午前十時ヨリ中支那方面軍司令部ニ於ケル参謀長會議ニ

ノ広ナルニ驚キ、且内容ノ未ダ充実シアラザルヲ知ル。再ビ引返
シテ日本陸軍武官室ニ至リ、南京市民避難区ヲ見テ宿舎ニ帰ル。時
ニ午後四時三十分頃ナリキ。

避難区ニ於テハ、老若男女ノ支那人ガ、案外平氣ニテウウヨシ
アルヲ見テ、日本国トイフモノハ仁義ノ国ナリト深ク感謝セリ。首
都ヲ占領シ、其ノ住民ノ為一定ノ区域ヲ与ヘテ避難セシムルガ如
キ、全ク人道ノ権化トイフベシ。帰途野菜ヲ担ヘル支那人ニ会ヒ、
其ノ野菜ヲ支那人ヨリ買ハントスレハ非常ニ高値ニイフ。支那人ノ
欲ノ深キニハアキレ返ル。ボヤボヤ反抗スレバ一錢、二錢ノ騒ギニ
アラズ、何時殺サルルヤモ図ラレサルニ、執拗ニネバル所流石支那
人式ナリ。之ニ反シ日本陸軍武官室ニ避難セル支那人ハ、予ガ入り
行ケバ両手ヲ高ク挙ゲテ無抵抗ノ意味ヲ現セリ。コレ亦哀レナリト
イフベシ。世ノ中ハ様々ナリ。

入城式ノ為制式ノ服装ヲ為ス

我々ハ出征以來飾緒ヲ用ヒズ兵ト同様ノ被服ヲ用ヒ、肩章ノミヲ
以テ階級ヲ区分シアリシモ、入城式ニハ他ノ司令部トノ関係モア
リ、服装ヲ整ヘ得ル範圍ニ於テ、飾緒、懸章ヲ用フルコトトス。然
ルトコロ軍司令部ノミハ整備シ得タルモ、師団司令部ハ準備整ハザ
ルト見エテ、従来ノ儘ナリキ。

予ハ行李一個カ手ニ入ラザリシヲ、飾緒ハ金子参謀ニ借リシ所、
後ニ至リ行李ガ手ニ入り周章テテ借リル必要モナカリキ。

大坂少佐醉払フ 池谷参謀送別

大坂少佐ハ従来酒癖アリ。軍事課在職中モ予ガ彼ノ自宅迄送り届
ケタルコトアリ、其ノ他色々迷惑ヲ掛ケルコト多カリキ。出征ニ際
シテモ課員ヨリ大坂少佐ノコトハ宜敷頼ムト言ハレテ来タル次第ナ

参列、軍司令官ハ午前中方面軍司令官ヲ訪問シタル後、野戦予備病
院ヲ見舞ハル。軍司令部ノ第一回移動人員ハ午前十時ノ飛行機ニ
テ、陸行者ハ午前七時三十分発ニテ各々出発ス。

慰靈祭

午後一時二十分宿舍発、祭場タル明故宮南側飛行場ニ至ル。已ニ
堵列軍隊ハ整列シ、概ネ準備完了シアリ。午後一時四十五分ヨリ中
支那方面軍司令官ノ訓示アリ、師団長以上参列。祭典開始迄ノ時間
ヲ利用シ歩三八ノ整列位置ヲ訪問ス。神代富士夫、吉田兼雄ノ兩大
尉ニ会ヒシノミニテ其他知ラヌ者許リ、兵モ下士官モ皆若キ為折角
ノ訪問モ大ナル効果ナカリキ。

午後二時ヨリ神式ニ依リ施行、型ノ如ク(少シ簡略セラレタル
カ)諸儀ヲ経テ中支那方面軍司令官、中支那方面艦隊司令長官、川
越大使ノ弔辞、次イデ軍司令官以上ノ玉串奉奠ヲ以テ式ヲ終ル。時
ニ午後二時四十五分頃ナリ。

カク申セバ洵ニ失礼ナルモ、本日ノ儀式ハ昨日ニ比シ感激ノ程度
非常ニ低ク、何トナク物足ラヌ感アリ。一本ノ煙草ヲ分ケテ喫ミタ
ル戦友ヲ失ヒタル將兵ニ取リテハ、昨日ニ比シ尚一入ノモノアラ
ンモ、遺憾ナガラ軍司令部ニ在ル予ニハ状況ガ享ラズ、実ニ失礼ナル
次第ナルモ致シ方ナシ。

本日ハ非常ニ寒ク、祭場ニ於テブルブル震ヒ出シ、水バナガ出
ル。兵ガ休憩中ニ芝ニ火ヲ点ジテ焚火シテ火ガ段々大キクナリ、草
薙剣ノ二ノ舞ニナラントス。整列シアル軍隊ヲ前ニシテ危キ極ナ
リ。開始前漸ク消シ止ム。

湖州ニ移ル

慰靈祭終了後、直チニ自動車ヲ駆テ飛行場ニ至リ、飛行機ニテ湖

州ニ移ル。司令官、参謀長、田村副官、憲兵一名ハ「フォーカール」ニ、藤本大佐ト予ハ「ピーティール」機ニ搭乗ス。予ノ機ハ約十分遅レテ午後三時二十五分頃、軍司令官機ハ午後三時十五分頃爆音勇マシク出発ス。飛行場ノ格納庫及兵営ハ相当爆撃セラレタル形跡アリ。

午後四時十分頃長興飛行場到着。予ノ飛行機ハ速度速キ為十分ノ「ハンディキャップ」ヲ取り戻シ軍司令官機ニ引続キ着陸ス。飛行場ニハ已ニ護衛兵モ出迎ノ為ニ到着シ、直チニ自動車ヲ連ネテ湖州ニ向フ。非常ナル「スピード」ヲ出シ午後四時五十分湖州着。前ノ軍司令部宿舎ニ入ル。

途中ノ景色

飛行機ヨリノ空中観ハ従来ヨリノ飛行ノ際ト大同小異、天候不良、曇天ナル為カ飛行機ハ余リ高ク飛バズ動揺アリ。前回ニ比シ、コノ飛行ハ不愉快ナリキ。長興―湖州間ハ往路ニ通りシ馴染ノ所ナルガ、未ダニ路上ニ二、三ノ死体アリ。又討伐隊ラシキモノノ帰還スルニ出会フ。逐次駐屯状態トナルニ從ヒ、附近ノ敗残兵ノ討伐ヲナシアルガ如シ。此ノ附近ハ敗残兵ノ多キ所ナルヲ以テ、討伐ニ力ヲ入レアルモノト認メラル。

軍司令部宿舎

先ニ使用セルモノヲ其ノ儘ノ室ノ配置ヲ以テ使用ス。去ル八日出発以來丁度十日目ニ再ヒ帰還シ、宛モ機動演習カ現地戦術ノ出張ヨリ帰還セルトキノ如キ感アリテ懐カシ。住メバ都トヤラ、何カニ不自由ナル陣中ニ於テハ温キ褥ナリ。

「ラデオ」ヲ聞ク

湖州ニハ電気会社技師（注・中国人）ガ居残リアリシ為、我軍ガ

北方上海派遣軍ノ行進地域ニ前進シ来リ、ソノ誤差タルヤ実ニ数十里ノ開キニシテ、琵琶湖ノ数倍アル大ナル湖州ノ北方ト南方トニ別レタリトハ実ニ大ナル誤差ナリトイフベシ。余リニ念ガ入リアル為當分軍司令部ニ於テ使用シ、連絡ノ取レタルトキ帰還セシムルコトトス。

次ニ之ハ噂ナルモ北支方面ニ至ルベキモノガ、誤テ上海方面ニ送ラレテ来レル例アリト。之ニ至リテハ実ニ徹底シアリトイフヘシ。其ノ原因ハ部隊名ヲ秘匿スル為「何々部隊」ノ名称ヲ用ヒ、固有ノ名称ヲ教育セザリシ結果ナリ。即チ某兵ハ自分ノ所属隊ノ正シキ名称ヲ知ラズ、唯「何々部隊」ノ名称ノミヲ教育セラレアリシガ、途中ニテ主力部隊ト分レ「何々部隊」、「何々部隊」ト其ノ所在ヲ捜スモ、小部隊ナル為誰モソノ部隊ヲ知ラズ、依ッテ或ル者ガ「オ前ハ何処ノ隊ニ召集セラレタリヤ」ト質問セルニ「何処ノ何隊ニ応召セリ」ト答フ。然ラバ「其ノ隊ハ目下上海方面ニ在リ」トテ上海ニ送り届ケラレタリ。然ルニ豈計ランヤ其ノ兵ハ其ノ隊ニ編入セラレアルモノニアラズシテ、其ノ隊ニテ編成ヲ担任セル部隊ニ編入セラレタル者ナリキ。而モ其ノ隊トイフノハ上海ニ、其ノ隊ニテ編成シ其ノ兵力ヲ属スベキ隊ハ北支ニ在リシナリ。相当念ノ入りタル迷子ナリ。

藤本大佐ト語ル

夕食後皆ガ他出シ、藤本大佐ト二人ノミトナルヤ藤本大佐曰ク
今度ノ戦争ニ参加シ將校ノ精神教育ノ必要ヲ痛感セリ。身ヲ陸軍大学校ノ教官ノ職ニ奉ジタル自分トシテモ其ノ責ノ重キヲ感ズ。殊ニ下剋上トイフベキカ、中央部ノ言フコトヲ聞カズ、或ハ上級部隊ノ意圖外ニ出テ之ヲ引摺ルヲ以テ得意トスル風潮、余程

占領後半月許リニシテ電灯ガツキ、市内ガ非常ニ明ルクナル。其ノ他理髪屋、風呂屋、饅頭屋等ノ開業スルモノアリテ、十日前トハ大部活氣ヲ呈シアリ。又、予等ノ留守中器械ヲ購入シアリシカ、直チニ「ラデオ」ヲ聴取スルコトナリ、本日ハ辛ウジテ聴取シ得タリ。先ニ湖州ニ来リシ者ノ言ニ依レバ、日ニ依リ非常ニ明瞭ニ聞キ得ル日ト不明瞭ノ日トアリ、陣中ニ於テ「ラデオ」ヲ聞キ得ル等トハ予想シ得ザル所ナリキ。

被服汚レ来ル

予ハ右手負傷以來何カニツケ不自由ナル為、被服ノ汚損ガ目ニツキ外套ニ汁ノ「コボレ」跡、蠟燭ノ蠟ノ「コボレ」等ガツキ、汚レガ急ニ目ニツク様ニナル。ソノ積リニテ兵ノ被服ニ注目スルニ、炊事ヤ食事ノ世話ヲ為ス當番兵ノ被服ノ汚レ実ニ甚シ。而シテ本日湖州ニ帰還スレバ、途中ニ於テ出会フ後備隊ノ兵ノ被服ハ非常ニ美シク、我々ノ當番モ初メノ内ハコノ様ナ新シキ被服ヲ着用シアリシカト驚ク許リナリ。コンナニ早ク汚レルコトヨリ見レバ、被服ノ追送モ重要問題ナリ。殊ニ將校ニ於テ然リ。今回ハ軍ニ於テ下士官、兵用被服ヲ着用セシメアル為問題ニアラザルモ、然ラザル場合ニハ將校ハ新品ヲ着用シテ出征スルニアラザレハ直クニ追送ヲ要スルニ至ルベシ。

兵ノ迷子

戦場ニ於ケル兵ノ迷子ハ日常茶飯事ナルモ、中ニハ随分念ノ入りタルモノアリ。一例ヲ挙グレバ、洪藍埠ニ於テ軍司令部ニ来リ炊事當番ニ使ッテ呉レト申出テタル兵ノ如キハ、相当念ガ入リアリ。即チ上海上陸後車輛ノ故障ノ為少シク遅レアル間ニ、主力トノ連絡ヲ失シ、爾後太湖ノ南方ニ主力ガ行進シアルニモ拘ラズ本人ハ太湖ノ

注意ヲセザルベカラズ。予ハ「上級部隊1」意圖内ノ最大限ヲ行キ、決シテ意圖外ニハ逸脱シアラザルモノト自信アリシモ、若シコノ風潮ヲコノ儘ニ放置センカ、将来戦ニ於テ左前ノ戦況トナリシ際、収容スベカラザル状態ニ陥ルヲ恐ル。又廉恥心、名譽心等トイフモ概ネ自己本位、宣伝本位ニシテ、新聞ニ出ヅルコトヲ第一着眼ト考ヘアルガ如キ思想アルハ誠ニ嘆ハシキ次第ナリ。ト泌ミ泌ミト述懐セラル。「予モ亦」全々同意ナリ。出征以來課長トシテ参謀ノ鼻息ノ荒キ者ヲ制御スル為、並大抵ノ苦勞ニアラザリシナルベク、思ハズ迷子ナリ出テタル言ナラン。

湖州ニ娯楽機關開設

先行セル寺田中佐ハ憲兵ヲ指導シテ湖州ニ娯楽機關ヲ設置ス。最初四名ナリシモ本日ヨリ七名ニナリシト、未ダ恐怖心アリシ為集リモ悪ク「サービス」モ不良ナル由ナルモ、生命ノ安全ナルコト、金銭ヲ必ズ支払フコト、酷使セザルコトガ普及徹底スレバ、逐次希望者モ集リ来ルベク、憲兵ハ百人位集ルベシト漏セリ。而シテ其ノ繁昌振リハ相当ナルモノニシテ、別ニ告知ヲ出シタル訳デモナク、入口ニ標識ヲ為シタルニモアラザルニ、兵ハ何処カラカ伝ヘ聞キテ大繁昌ヲ呈シ、動トモスレバ酷使ニ陥リ注意シアリトノコトナリ。

先行シ来レル寺田中佐ハ素ヨリ自ラ実験済ミナルモ、本日到着セル大坂少佐、仙頭大尉コノ話ヲ聞キ耐ラナクナッタト見エテ、憲兵隊長ト共ニ早速出掛ケテ行ク。約一時間半ニシテ帰リ来ル。憲兵隊長ノ口添ヘモアリシ關係カ非常ニ「サービス」良カリシト、概ネ満足ノ体ナリ。予モ一緒ニ行ケト勸メラレシモ兎ニ角断リ置ク。予ハ娯楽ニ就テハ次ノ方針ヲ取ラントス。藤本大佐モ概ネ同意ナリ。

一度味ヲ覚エレハ内地ニ在ルトキ同様、数日ニ一回ト力週ニ一

回トカニ実施セサレバ物足ラヌ様ニナルニ違ヒナク、然ルトキハソノ湧キ出ツル力ヲ抑ヘルノニ却ッテ苦勞スルニ違ヒナカラン。寧ロカカル習慣ヲツケザルニ限ル、然レドモ若シ他人ヨリ見テ明瞭ニ神經衰弱ノ徵候ヲ現ハシ、是非トモ一度遊ブヲ可トスルトキニ至ラバ、其ノ時ニ初メテ行クコトニシ、自ラ求メテ好奇心ニ驅ラレテ行クコトハ絶対ニ之ヲ避ク。

日誌帖ノ補充ツク

二冊目ノ日誌帖モ残り少ナクナリ、先ニ大本營ノ松村少佐ニ依頼シテ上海ヨリ送ッテ貰フコトトナシアルモ未ダ来ラズ。日々余リノ紙ガ減リ氣ガ氣デナク、多ク書カントスルモ紙ガ無クナレバ、如何ニセントノ心配ガ先ニ立ツ。然ルニ本日湖州ニ到着スレバ日誌帖ガ届ケラレアリ。即チ先行セル寺田中佐ニ依頼シ、河村飛行隊(上海ニ根拠ヲ有ス)ヨリ購入セルモノナリ。ヤヤ様式ヲ異ニスルモ大同小異ノ「大学ノート」ナルヲ以テ、引續キ記載スルニ好適ナリ。之ニテ安心、暇ヲ利用シテ「ドシドシ」記載セン。

洪藍埠殘置員帰ル

洪藍埠ノ軍司令部ニ荷物監視ノ為殘置セル相川伍長、落合特務兵午後十時半頃湖州ニ歸リ来ル。先ノ溧水ノ敵兵襲撃事件(十五日ノ日誌ニ記載シアリ)ノ際ニハ二千名ノ「デマ」ニ驚カサレ、警備兵モ少ナク、悲壯ナル決心ヲ為セリト。幸ヒニシテ誤伝ナリシ為愁眉ヲ開キタルモ、小銃ヲ有セザルモノノ所へ襲撃ヲ受クレバ手ノ施シ様モナク嘸心配セルコトナラント、相川伍長ヲ慰メ置キタリ。

後備兵ノ当番ニ適スルコト

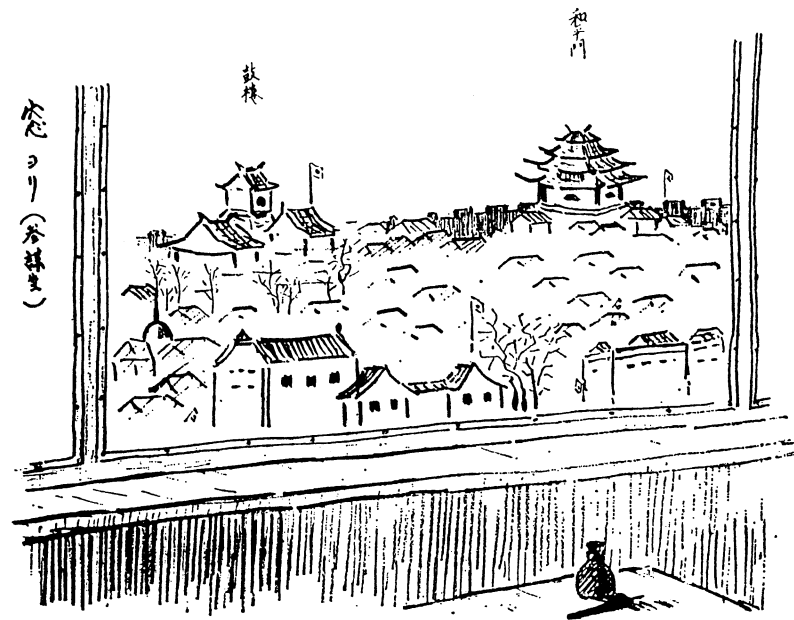
軍司令部ノ当番ハ未教育ノ補充兵ノ特務兵ニシテ使役ニ何カト物足ラヌ所アリシニ、今回湖州ニ歸レバ、当番ノ不足ヲ補フ為後備隊

ヨリ当番兵ヲ取り世話ヲ為サシメアリ。流石ハ教育ヲ受ケタル後備兵ダケアリテ良ク行届キ、口喧シノ寺田中佐迄ガ満足シアル状況ナリ。以テ如何ニヨク働クカラ察スルニ足ルヘシ。現ニ本夕食ノ飯ハ稀ニ見ル上出来ニテ、皆ガ口ヲ揃ヘテ上陸以來ノ上出来ノ飯ナリト賞讃セリ。軍隊教育ノ価値ヲ如実ニ物語ルモノトイフベシ。

山田大尉寝ル

山田大尉ハ昼間徹底的ニ寝ルコトアリ。本日モ朝カラ寝続ケ、軍司令部、參謀長、課長等ガ出発スルノヲ見送ラズ、慰靈祭ニモ出席セズ。病氣ニハアラザルガ如ク、若イ者ナリトハ言ヘ其ノ心理状態ノ判断ニ苦シム。何カ不服ノコトデモアリシカ。何レニシテモチト常識ヲ以テ判断シ得ザル態度ナリ。

木佐木 久 日記



南京城内スケッチ
(一月十七日 木佐木少佐)

◇十二月一日 於奔牛鎮

昭和十二年モ、最終ノ月トナッタ。現在ノ吾等ニハ年末モ師走モ無イ。曆日ヲ忘レル事ハ屢々アル。況ンヤ、曜日ノ如キニ至リテハ全然知ラナイ。師団ハ更ニ躍進スル。本朝午前九時頃常州ヲ出発シタ、二晩泊ッタ此ノ家ハ既往作戦間ニ於テ一番上等ノ宿舎デアッタロウ。昨夜ノ如キモ実ニ氣持チヨイ寝台デ暖カク眠レタ。部屋ハ此家庭ノ娘ノ部屋デアロウ。バラソルヤ、女靴等ガ沢山アル。箱ノ中ニハ年頃ノ娘ヲ想像サセル着物ガ一杯詰メテアル、机ノ抽出ニハ彼氏彼女等ノ恋文カ？ 別ニヤケル訳デハナイガ、静カナコウシタ立派ナ部屋デ艶メカシサヲ見ルノハ悩マシイ限リデアル。

正午侍従武官(後藤中佐)御着。

聖旨令旨ノ伝達。師団長ノ奉答アリ。師団長感激ノ余リ涕淚滂沱タリ。共ニ感、胸ヲ圧ス。

午後二時常州ヲ自動貨車ニテ立チ、行軍部隊ヲ追越シテ奔牛鎮ニ至ル。物資徴発ノ為、部落内ヲアサル。米八百俵、小麦一千俵、砂糖百俵、小蒸気二杯等々徴発ハ実ニ面白イ。師団長、参謀長、専田(盛寿^{30期})参謀ハ侍従武官ト共ニ更ニ第一線ニ、ソシテ追撃隊ノ位置ニ泊ス。夜半、火災ニテ起サル。

◇十二月二日 於丹陽東側千米

押収ノ小蒸気一杯ハ軍無線小隊ニ於テ利用シアリ。スマートナ格好デ曳航サレアリ。別ノ一杯ハ若干ノ修理ニテ動クラシ。大民船三杯ヲ牽引シアリ。三杯共砂糖、日用品等ヲ満載ス。焼ケツツアル昌城鎮ヲ通過シ西進ス。水上輜重隊ノ一団極メテ勇壮ナリ。陵口鎮ノ敵モ簡單ニ片付ケラレ追撃隊ハ急進ス。丹陽東端ニ於テ敵ノ抵抗堅

ク遂ニ丹陽ニ入ラスシテ止ル。丹陽ノ白塔ヲ僅カ一千米ノ地ニ望ミ乍ラ、無錫以後ノ戦闘ニ於テハ「クリーク」少キヲ以テ敵ノ抵抗案外堅カラズ。包圍迂回ニ依リテ多クハ敵ヲシテ退却ノ已ムナキニ至ラシム。丹陽ニ於テハ一小部隊ヲ正面ニ充テ主力ハ迂廻シ時刻ニハ丹陽ノ西端ニ進出シ各門ヲ押ヘ所謂袋ノ鼠トナル。

本夜、藥ノ中ニ寝ル。暖カキ事、普通ノ寝台ニ休ムヨリ可ナリ。

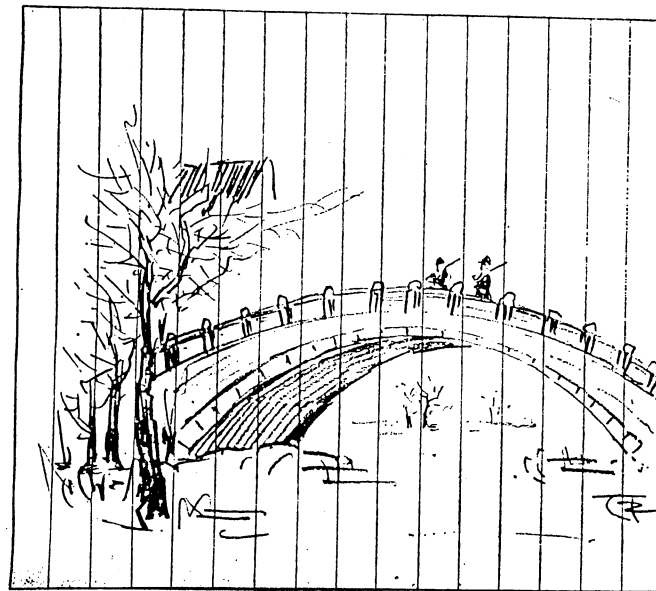
◇十二月三日 於丹陽

丹陽ニ入城ス。

丹陽附近ニ兵力ヲ集結シ、南京ニ向フ攻撃ヲ準備スルノガ、常州占領直後ノ任務デアッタガ、今亦丹陽占領ト共ニ、今度ハ南京ニ向ヒ追撃ト来タ。師団ハ上陸直後右ト左ノ交々ノ命令ヲ貰ヒ亦常熟ノ占領後ハ逐次ニ無錫、常州、丹陽ト延ビテ行ッタ。迷惑ナ話デアッタガ、幕僚會議ノ際ニ於ケル余ノ意見ハ次ノ通りデアッタ。兎ニ角彈藥ノ続ク限り、部隊ノ戦闘能力ノ続ク限り追撃シ、愈々行ケヌ所デ止マツテ、敵情ノ偵察及部隊ノ整備ヲヤル、ト云フノダ。

今日ノ装備ハ部隊ノ携行ハ三分ノ一彈藥、輜重ハ未ダ到着セス。丹陽以後ハ、水路ナク兵站自動車ハ道路ノ關係上追及セズ。後方主任トシテ、苦心慘憺ノ所トナルモ。泣キ面ニ蜂ノ軍無線小隊ノ器材破壊シ、軍ト通信利カズ。併シ師団ハ行ケ。行ケル所マデ行ケ。丹陽ニ於ケル師団司令部ハ仲々大キナ家ダ。行李モ着イタノデ一寸一服ト云フ所ダガ、ソウ云フ訳ニハ行カヌ。丹陽ノ丹陽マデ来タラ或ヒハ十日位ノ休ミニ依リ、色々ナ整備ガ出来ルカモ知レヌト云フ頼ミハ一擲サレテ、直路南京ヘ追撃ダ。

發	月	日	時	分	信	受	者
發	月	日	時	分	信	受	者
殿							
發	地						
於							
						</	



◇十二月四日 於丹陽

今日一日ハ部隊ニ対シテヘラレタル整備ノ日デアル。併シ、行李輻重ハ到着セズ。兵站ノ彈藥ハ未ダ来ラズ。唯一ノ頼ミデアッタ水上輻重隊モ、丹陽以西ハ水路ナク、活用ノ余地ナキ現況ニ於テ整備トハ実ニ名ノミニシテ、一日ノ滞在ハ、夫レ丈ケ、糧秣ノ不足ヲ訴フル役目ニシカナラナイ。

午後二時ヨリ、野戰倉庫ニ於テ經理部長、獨立工兵中隊長、兵器掛、水上輻重隊長等相会シ、尔後ノ輸送ニ関シ協議ス。

◇十二月五日 於祝家辺句容東方八軒

二晩ニシテハ名残り惜シイ丹陽デアッタ。大キナ事務室ノ隣リ自分ノ部屋ニ懷シサ覚エルト直グニ御別レデアアル。午前中野戰倉庫デ色々協議ノ上、酒井大尉ト共ニ主力ノ後ヲ追フ。北風殊ノ外寒シ。北支戰場ニ比ブレバ、有難イ事ナガラ、最早十二月、寒サモ敵シイノガ当リ前デ、近頃ハ朝ノ氷モ相当厚イ。逐次部隊ヲ追ヒ越シ乍ラ祝家辺ニ至リ泊ス。追撃隊ハ本道方面ニハ僅カニ一中隊ヲ充テ主力ハ句容北方ヨリ迂廻ス。可ナリ、正面ヨリノ戰闘ハ避ケテ包圍迂廻ヲ尚ブ。句容東方地区ニ於ケル敵ノ抵抗ハ、大ナル兵力ニハアラザルモ、トーチカニ依レル、実ニ立派ナモノダ。

祝家辺ノ宿ハ、豚小屋ノ様ナ所ダッタガ、藥ノ臥床ニ、焚火デ、其ノ上毛布アッテ暖カッタ。普通ノ家ニ入ッテ、火ナシノ寒イ目ニ会フヨリ、コンナ露営ノ様ナ方法ガ却テ良イ。

◇十二月六日 於句容

句容ト云フ名前ハ丹陽ニ来テ始メテシツカリト認識シタ程、サ様

發	月	日	時	分	信	受	者
發	月	日	時	分	信	受	者
於					殿		
					者	信	發
					地	信	發

中島師団長

針巻

毛筆、付イッテ西面復

片カラ吊ルバンド

兵隊ノ日本刀

足跡

イッテ西面復



落チタ。命拾ヒデアル。

追撃砲弾ガ身辺ニ落下スル。負傷者ガ出ル。師団長ハ左大腿部ノ

ニ問題視シテナカッタ所ダケニ、句容ノ占領ハ左迄嬉シクハナカッタ。昨夜ノ午後七時ニ占領シタト云フ。東門ノ前ノ石橋ハ大爆破ニ依リ完全ニ破壊サレテアッタ。本隊ノ前衛一大隊ハ句容西北方ニ於ケル敵ノ一部ヲ攻撃シタ。追撃隊ハ遠ク側方ニ迂廻シタノデ、止ムナキ手段デアアル。大急ギ砲兵ヲ引張り出シテモ見タガ遂ニ夜トナッタ。第九師団モ其ノ追撃隊ヲ以テ土橋鎮付近ニ進出シテ其ノ司令部ハ句容ノ南側ニ来タ。本朝、野戰砲兵廠ノ修理班ガ句容ニ来タノデ、独断自動貨車ヲ丹陽マデ彈藥補充ニ使ッタ。夜、軍ノ大坪（「馬30期」參謀、二神「力34期」參謀来ル。クスブッタ部屋ニ北畑ト寝タガ、連絡者ノ為、夜中ニ、三度起サレタ。

上海派遣軍司令官ニ

朝香宮鳩彦王殿下、親補アラセラル。感激ノ極ミデアアル。

◇十二月七日

句容西方ノ敵ハ退却シタ。司令部ハ午前九時前、句容ヲ出発シタ。野戰重砲ガ進路ヲ塞イデ妨害スル事甚シイ。歩九モ、歩二〇モ夫々戦上手ト云フカ、正面ヲ避ケテ迂回タタヤッテキル。御蔭デ本道方面ニハ、一兵モナシト云フ形ダ。昼カラノ前進ノ際ハ、師団司令部ハ歩兵ノ尖兵ト同時前進ダ。果シテ顔家村ニ来タトキ、敵ノ彈丸ヲ受ケタ。歩兵ガ散開スル砲兵ガ進出スル丸ヲ遭遇戦ノ様ダ。準備セル陣地ニ対スル戰闘法デハナイ、無計画ナ戰闘ダ。敵彈ガ猛烈ニ来テ、司令部モ何等仕事ガ出来ナイ。ドウカト思フ。

一、師団長ガ負傷シテ、軍医部長ガ馳ケテ叱ラレタ事。

一、師団長ガ後口ヘ下ッタ後、吾々モ司令部ノ位置ヘ移ッタ。其ノ立チ上ッテ一分モ経タナイ内ニ、其ノ位置ヘ追撃砲弾ガ二発

貫通銃創、ト云フノデ吃驚シタ。ヤッパリ位置ノ選定ハ考ヘネバナ
ラス。砲兵学校内ニ泊ス。此ノ付近ハ、日本デ言ヘバ、丁度四街道
ニ相当スル場所デアアル。地形ト言ヒ、砲兵学校校舍ト言ヒ、立派ナ
モノダ。支那軍ノ外形ダケハ、儘ニ揃ッテキルト思フ。今日ハ本道
方面ハ湯水鎮ノ正面ニ於テ抵抗ヲ受ケシモ、右側支隊、追撃隊ハ、
速ク敵ノ後方ニ進出シテキル。敵様トシテノ左右ノ連絡ハ、極メテ
悪イ。

◇十二月八日 於湯水鎮

支那軍ノ誇リトスル砲兵学校内ニ、我カ師団ト砲兵旅団司令部ト
ガ泊ッテキル。此ノ朝午前八時頃、俄然敵ノ迫撃砲弾ガ続ケザマニ
数発落下、炸裂シタ。十数名ノ負傷者ト、七頭ノ死馬ヲ出シタ。校
庭ニ落チタノダカラ、吾等ノ位置カラ約五十米、壯觀ノ極ミデアアル。
支那軍トシテハ、自分ノ箱庭デアリ、日常演習ノ場所ダ。命中正確
ナノモ尤モデアリ、当然デアアル。若シ弾数ガ更ニ増加サレテキタナ
ラバ、師団ノ中枢ハ全滅シタデアロウ。昨日ト謂ヒ、今日ト謂ヒ、
本作戦間ノ最モ壮烈ナ場面デアッタ。彈藥積載ノ自動車十八輛ガ、
勇マシク到着シタ。米モ百俵到着。師団司令部ノ自動車モ、到着シ
タ。総テガコンナ具合ニ運ブト、実ニ嬉シイ。北支作戰ニ於テ、追
撃ノ最後ニ輜重ガ到着シタノト、今亦追撃ノ最後ニ、自動車ヤ彈藥
ガ到着シタノトハ、僕トシテモ遅時キヤラ、愉快ノ一事デアアル。昨
日敵ノ抵抗シタルコンクリートノトーチカラ見乍ラ、湯水鎮ニ入ッ
タ。温泉ニ浸ル。敵彈雨下ノ処デ温泉ニ戰塵ヲ洗フトハ、奇怪千万
ノ感ガシテナラス、御蔭デ真黒ナ顔ヤ手足ガ綺麗ニナッタ。

第一線ガ追撃シテキル報告デアアル。首都南京ヲ去ル、東方五里ノ地
点ニアル温泉ダカラ東京ニ於ケル、熱海、伊豆ヨリモ結構ノ地点ダ
ガ、ソレニ比シテハ、文字通りノ寒村デアアル。吾等ノ泊ッタ家ハ、
曾テ專田參謀ガ、蔣介石ニ招待サレタ事ノアル家ダト云フ。世ノ中
ハ皮肉ナモノデアアル。戦闘司令部ヲ憤頭西側ニ進メル。亦敵彈下ニ
於ケル戦闘司令部所デアアル。憤頭西方約一公里ノ本道両側ニアル高地
ヲ攻撃スル歩三三ノ1、歩九ノ1ノ戦闘ヲ後方ヨリ観ル。トーチカ
ニ在ル敵ノ執拗ナル抵抗、炸裂スル野砲彈、迫撃砲彈、斜面ヲ登ル
歩兵ノ前進、顛頂ヲ占領スル勝鬃ト、日ノ丸ノ国旗、慕進スル戰車
隊、等々バノラマヲ見ル様ナ感じガシタ。左大隊ハ午後二時頃、右
大隊ハ午後三時半頃遂ニ占領サレタ。軍ノ長〔勇28期〕參謀來ル。
痛快ナル壯語ヲ聞ク。北支ノ戦闘ニ於ケル予ノ苦戦ヲ誰カラ聞イタ
カ能ク知ッテキタ。

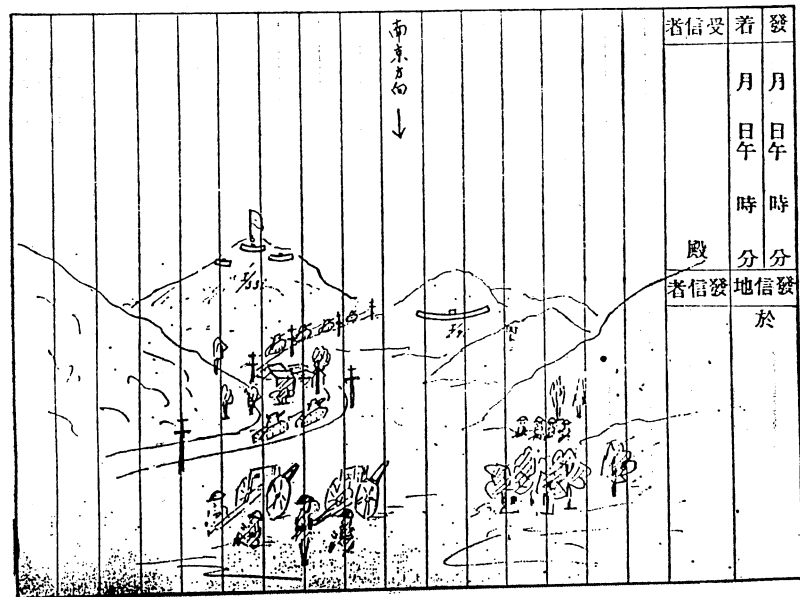
支那軍ノ歩兵学校ト云フ所ニ泊ス。人並ニ砲兵学校ダノ、歩兵学
校ダノ持ッテキル所ガ感心ダ。併モ、独裁政治ノ徹底サハ、アラユ
ル方面ノ特徴トシテ顯現サレテ、事實ダケハ見逃ス事ハ出来ナイ。

◇十二月十日 於下麒麟門

師団司令部ヲ下麒麟門ニ進ム。司令部ノ自動車躍進ハ始メテデア
ル。司令部ハ通信機關ニ依リテ一般ノ指揮ヲ為スヘキモノニシテ、
位置ト移動ハ通信ヲ基調トセサルヘカラス。今マデハ、大・中隊長
ノ様ナ直接指揮ガ多クハ無カッタカ。午後一時迄ニ軍使ガ來ルト云
フ様ナ軍ノ予期モ、ハズレタ。其ノ準備トシテ、方面軍參謀長以下
幕僚ガ見エタガ。

本日ノ戦果ハ、今マデノ様ニ進マヌ事ハ、無論デアアル。敵ノ主陣

◇十二月九日 於憤頭
温泉宿ノ朝ト謂フベキ所ダガ、朝ノ三時頃カラ電話デ起サレタ。



地ニ対スル、敵ノ首都ニ対スル、本詰メノ攻撃ダカラ、簡單ニ行カ
ヌノガ当リ前ダ。敵ノ高射砲ガ、盛ンニ我ガ飛行機及氣球ヲ射撃ス
ル。支那軍サン、ハイカラナ事ヲスル。十一月三日付ケノ、ナミエ
ノ手紙ヲ敵彈雨下ノ所デ読ム。大連以來書ケナイノダカラ、心配モ
無理ハナイ。砲兵聯隊本部迄、サイドカーデ連絡ニ行ク。途中敵ノ
小銃彈ヲバリ／＼受ケ乍ラ行ク。輕戰車一、乗用車一ガ、敵ノ砲彈
ヲ受ケテ焼ケテキル。軍馬二頭ガ死ンデキル。惨烈ナ情景デアアル。
歩九ノ七中隊ハ、昨夜行軍中、地雷ニカカリ死傷十余名ヲ出シタト
云フ。馬群付近ノ陣地前ニハ、敵ノ地雷及障礙アリテ、一寸ノ前進
ニモ骨ガ折レル。師団ニ自動車アリ、彈藥、糧秣ハ概ネ予想通り
着シツ、アリ、コンナ調子ナラ、後方モアンマリ心配イラス。

午前中ハ曇リデ天候ヲ氣ヅカッタガ、午後カラスッカリ晴レタ。
常熟ノ追撃以來ノ天氣ダカラ、恵マレ方モ相当ダ。小麒麟門ノ燒ケ
家屋ノ残り藁ノ中ニ泊ス。藁ノ中モ、先日ノ祝家辺ガ最後ダロウト
思ッテキタノニ、此ノ調子デヤマダ二、三回ハアルダロウ。寝タノ
ガ午前一時ダ。

◇十二月十一日 於五顆松

十日ノ入城ハ大体間違ヒナカロウト判断シテキタガ、一寸マダ
二、三日ハカカリ相ナ状況トナッタ。戦闘司令部ヲ午前七時三十分、
馬群西北側高地ニ置ク。敵ノ砲兵及迫撃砲ノ彈藥トナリ、顛頂ニ頭
ヲ出スヲ得ス。岩影ニ遮蔽シテ、前後左右ニ炸裂スル榴彈ノ響キト
黒煙トヲ眺メル氣持チハ、此ノ地ナラデハ味ヒ得ヌ情景デアアル。顛
頂ノ戦闘司令部ハ、遂ニ意味ヲナサズ、中腹ニ引返ス。今日ハ遂ニ
南京城ヲ見タ。高地上カラ指呼ノ間ニ敵ノ首都ヲ瞰下ス。中山陵ニ

シテモ明孝陵ニシテモ、亦中山門ノ威容ニシテモ、今ハ我カ強庄ノ下ニ命且タニ迫ッタ組上ノ魚ニモ似タ有様デアル。中腹ノ斜面ハ、ボカ／＼暖ク、終日砲声ヲ聞キ乍ラ、電話ト雜務ニ終始シタ。輜重ノ連絡者ガ到着シタ。明日ハ、戦場ニ到着スルト云フ。後方機関ガ此クノ如クシテ逐次ニ到着シ、南京攻略ニハ、何トカシテ、不充分乍ラ少シ宛間ニ合ヒツ、アル。彈藥カ十八輛、八輛、等々到着スル。南京攻略ノ南京攻略ノ一途ヘ。鎮江―南京道方面ノ進展遅々。第一線左右翼隊モ同様遅々。僅カニ數百米ヲ前進ス。

軍司令官朝香宮殿下、本日、第一線視察ノ為、句容ヨリ下麒麟門ノ高地ニ前進セラル。

◇十二月十二日

機、作、日、

一、十二日夜、20 i ヨリ聯隊ノ戦闘地域内ニ9 D ノ部隊アリ。20 i 第一線ノ戦果ヲ利用シテ、其前方ニ進出シ、敵陣地ニ遭遇スルヤ20 i ノ来ルヲ待チ其行動積極のナラサルノミナラス、聯隊ノ行動ヲ妨害スルコト大ニシテ、射撃ヲ実施スルコトサヘ困難ナリトノ報告アリ。

次デ9 D ノ連絡者来リテ、左翼隊ノ戦闘正面中約一大隊分ノ正面ヲ9 D ノ部隊ニ譲ラレ度旨、希望シ来レリ、然レトモ、今直チニ交代スルコトノ困難ナル旨回答セリ。

続イテ9 D 川久保〔鎮馬27期〕參謀ヨリ、師団ノ正面中、中山門ヨリ北方千米ニ至ル間ヲ、9 D ニ譲ラレ度旨電話アリ。

此レモ、中山門ニ対スル突撃直前ニ於テ、既ニ砲兵ニヨリ突撃路ヲ準備セル中山門ヲ含ム師団ノ重要正面ヲ譲ルコトノ困難ナル旨回

ハ、勇敢ナル歩三三ニ依リテ辛ウシテ占領セラレタルモ、敵ノ抵抗ハ依然タリ。右側支隊ハ本日午後著シク進展ス。兩翼隊モ若干前進ス。第十三師団ノ一部ガ浦口ニ近ク進出セリト謂フ。敵軍愈々退却ダ。午後ニ至リテ、第一線極メテ静穏ナリ。退却ニアラザルカノ午後五時三十分、歩三三ニ於テ紫金山ノ第一峰ヲ、占領ストノ報告アリ。万歳ノ此処ニ南京ハ其ノ死命ヲ絶タル。左翼隊ニ於テモ、又右側支隊ニ於テモ戦況進展ス。師団長ノ御意図ニ依リ、志氣振作ノ為ニ振舞ハレタル酒ハ、期セスシテ戦勝ノ祝酒トナル。今夜ノ夕飯殊ニ美味シ。電話ハ頻々トシテ敵ノ退却ヲ報シ、戦場モ昨夜ニ比シ、極メテ静肅ナリ。軍司令官殿下ヨリ、紫金山占領ノ祝トシテ、酒一樽、ウイスキー三本、リンゴ一箱ノ下賜アリ。直チニ歩三三、8 A ニ送付ス。野田〔謙吾24期〕大佐殿ト電話シテ、御祝ノ言葉ヲ申シ上グ。感激ノ胸デ一杯デアル。電話デ話シ乍ラ、遂涙ガ出タ。南京ハ奪レタノダ。占領サレタノダ。昨夜ノ騒々シイ銃砲声モ寧ロ氣味悪い静サデアル。

◇十二月十三日 於西山

勝利ノ首都占領ノ日ト云フニ、何ト夜明ケ前ヨリ喧々シイ事ヨ。仙鶴門付近ノ重砲兵及騎兵ガ、敵ノ襲撃ヲ受ケ、其ノ報告ヲ受ケタル司令部ノ騒ギ方デアル。タカ／＼知レタ敗残兵ダ。ソシテ小銃ヲ持ツ重砲ヤ騎兵ガ、周章ルモ馬鹿ゲタ話ダガ、之ヲ丸吞ミ信ジテ大騒ギスルノモ程ガアル。自信ノ無いモノ、信念ノ固クナイモノ、臆病ナ者程、物事ヲ針小棒大ニスル癖ガアル。歩二〇ガ午前三時十分、中山門ヲ占領シタ。歩三三ハ紫金山ヨリ逐次西山ノ峰々ヲ占領シタ。右側支隊タル歩三八ハ遠ク南京ノ背後、下関ヲ占領シタ。午後

答ス。

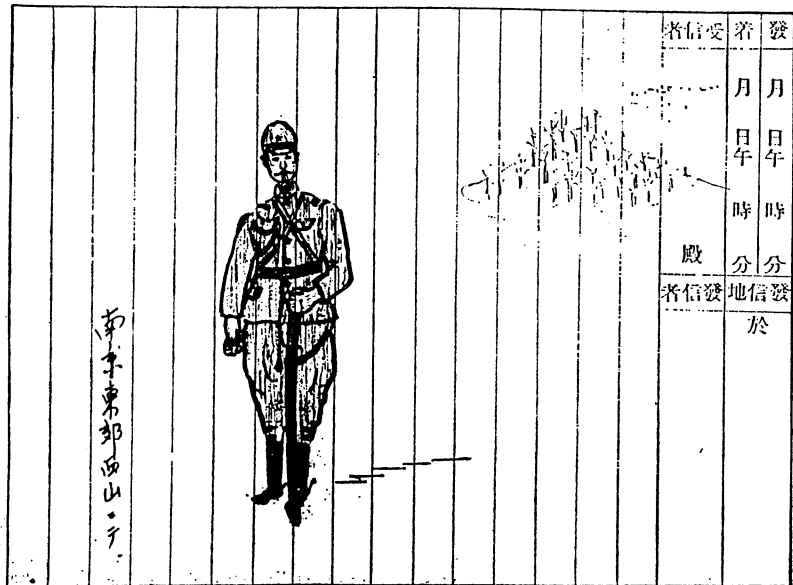
正午頃、軍ノ川上參謀ヨリ、又9 D 參謀ノ希望ト同意味ノ件ヲ述ヘラレ、少クモ中山門ヲ9 D ニ譲ラレ度、若シ師団ニ於テ承知セラレサルトキハ、軍命令ニヨルノ外ナキ旨電話アリタルモ幾多犠牲ヲ出シテ攻撃準備セル正面ヲ突撃直前ニ至リ他師団ニ譲ルコトハ、第一線部隊長ニ對シテ師団トシテ命令シ得ストテ明答ヲ避ク。

◇十二月十二日 於五顆松

十二月十二日ダ。此ノ日ハ何トカシテ、目鼻ヲ着ケタイモノダ。塘沽上陸ガ九月十二日、寧晋入城ガ十月十二日、上海着ガ十一月十二日、十二月ノ今日ハ何トカ力成リ相ナ、亦成ラナケレバナラヌ日デアル。

昨晚ハ一晚中歩兵ノ銃声デ騒々シイ一晚ダッタ。敵ガ所々逆襲シタト謂フ。彈藥ヲ心配シタガ、昨晚補充ガツイテ充分ダトノ事、安心シタ。昨日ノ戦闘司令所ノ位置ニ至ル。迫撃大隊カ句容ヲ出發シタト云フノデ、自動車デ迎ヒニヤル。輜重兵聯隊ノ歩砲彈藥中隊二ツガ到着シタ。漸ク間ニ合ツタ形デアル。軍ノ神原參謀、連絡ノ為来ル。一日二基數、後三日戦闘スルモノトシテノ彈藥準備ヲ要求シタガ、北野〔兵藏35期〕參謀モ、軍兵器部長モ好イ返事デハナカッタ。今日モ亦暖イ御天氣デ、戦闘司令所ノ昼過ぎノ閑散時……：毎日後ニナルト、歩兵銃声ハ急角度ニ緩慢トナル。今迄ノ追撃ノ觀念カラ敵ハ退却デアルマイカトサヘ思ハル。

糸ノ切レタル図囊ノ修繕ニ余念ノ無いトキ、敵砲彈數發ヲ、四、五十米ノ所ニ受ケタ。全クノ睡氣醒シデアル。風ニナビイタ薄ノ如ク、皆ガ斜面ニ、一斉ニヒレ伏シタ。敵ノ死命点タル紫金山ノ一角



ニ至ッテ、完全ニ南京ヲ占領シタ。中山門東側ニ在ル西山ニ登ッテ、歩二〇ノ四ノ戦闘シタ跡ヲ見ル。敵ノ陣地ハ野戰陣地デアッテ、掩蓋ヲ有スル機関銃座ト云フ程度ノモノダ。湯水鎮付近ノトーチカト比ベルト、薄弱ダ。唯、數線ニナッテキル事ガ、頑強ノ度ヲナシテキル訳ダ。敵ノ遺棄死体約五十ヲ算ヘタ。突撃シタ部隊ノ奮戦ヲ想像スル事ガ出来タ。南京城ノ南側ニ方ッテ、飛行機ノ爆彈投下ヲ目撃シタ。彼我ノ判断ニ迷ッテキタガ、後デ、敵機三機約四千ノ高度ヲ以テ、我ヲ爆撃シタ事ガ解ッタ。小瀬ノ奴デアル。中山門ヨリ入ッテ市内ヲ瞥見スル。一國ノ首都ダ。ヤッパリ大キイ。敵ノ地雷ガ路上ニアルノデ、戰場一帯ウカ／＼歩ケナイ。朝モ五顆松ノ司令部ノ隣地地雷ガ爆破シタ。夕方ニナルト、敵兵ノ一聯隊ダノ一ヶ師団ダノ現出シテ、援兵ヲ請フ伝令ガ、引キリナシニ来ル。デマヲ飛バスナ。アワテルナ。湯水鎮軍司令部ガ敵ノ襲撃ヲ受ケタト云フ事ガ輻重隊ノ彈藥補充ヲヤッタ事ニ依ッテ解ッタ。トラックニ依ッテ、歩兵ノ輸送ヲヤラントスルトキ、遠慮ノ電話ガアッタ。師団長、參謀長、幕僚、部長ニテ、南京攻略ノ祝杯ヲ挙ゲタ。

◇十二月十五日 於南京

師団トシテ記念スベキ日ダ。師団司令部、各隊長、隊伍堂々、中山門ヨリ入城ス。南京城頭ニ輝ク日章旗ノ、勇マシキ姿ハ、今日特別ニ亦神ミシク感ゼラレタ。破壊サレタ城壁、土囊ニ依リテ未ダ半分シカ開カナイ中山門。砲彈、煉瓦、鉄線等ノ散乱シテキル道路、敵死体ノ生々シイ惨烈サノ、入城式トシテハ申分ノナイ風景ダ。ソレニシテモ此ノ輝カシイ入城ノ裏ニ、実ニ尊キ犠牲者ノアル事ヲ想ハネハナラス。敵國ノ首都南京ニ於テ、而モ國民政府ノ庁舎ニ於

テ、今シモ入城ノ祝典ヲ挙ゲルト云フ事ハ、実ニ空前ノ盛事デアリ、古今ヲ通ジテ是レ程意義アル史実ハナイデアロウ。祝宴場ニ於テ飲メル丈ケ飲ンダ。蒲地中佐ト会フ。十數年振リナリ。宿舍中央飯店ハ、立派ナホテル、僕ノ部屋モ二部屋デ、バス付（使用出来ヌガ）ダガ、イクラ広クテモ一人デヤ仕樣ガナイ。起キテ見ツ、寢テ見ツ、カヤノ広サカナ、ノ感ガスルバカリデ、却テ悪い。

◇十二月十七日 於南京

全軍入城式。中山門ヨリ國民政府ニ至ル間、北側ニハ上海派遣軍、南側ニハ第十軍ノ各師団ガ並ブ。中支派遣軍司令官松井大將ヲ先頭ニ、上派遣軍司令官朝香宮鳩彦王殿下、第十軍司令官柳川中將、各師団長、幕僚等相次ギ、十二月トハ思ヘヌ暖カサニ、入城式ノ光景ハ、万点ノ日和ト相俟ッテ、莊麗ノ極ニ達シテキル。天空ニ舞フ飛行機ト相對シ、何トモ何トモ言ヘヌ喜ビヲ覺エル。ヤガテ國民政府内ニ於テ、国旗掲揚、遙拜式、万歳ガアッテ祝宴ニ移リ、本式ノ入場式ヲ終ル。一國ノ首都ニ於テ、此ノ盛儀ニ参加ス。嘗テ奉天ノ入場式ノ絵ヲ見タ事ガアル。大山滿洲軍總司令官ノ堂々タル馬上ノ姿ヲ。今日ノ入城式ハ相手國ノ首都デアアル。奉天ノ入場トハ亦別ノ意味ガアル。皇軍ガ力ヲ以テ征服シタ敵國ノ首都ニ、今輝シク入場シテキルノダ。孫文モ日本軍ガ彼ノ選都南京ニ入ロウトハ、夢ニモ思ハナカッタデアロウ。否現支那民衆、世界人、皆マサカ南京ニ日本ガ迫リ、コウモ早ク落チオウトハ、誰一人考ヘナカッタデアロウ。我々ト雖モ、亦半ハ其一人デアアル。紫金山頂ニ翻ル日章旗ハ、未來永久ニ我が國威ヲ示揚スルデアロウ。歩四五ノ軍旗ヲ拝シタ。嘗テ捧持シタ軍旗ヲ、今此ノ南京ニ於テ拜ス。感無量ノ宴會場ニ

於テ色々ナ人ト会フ。コンナ広い意味ノ大キナ会合ハ無イダロウ。夜ハバスノ中デ湯ヲ使ッテ襦袢ヲ着更ヘタ。清々スル。早カラ寝ニ着キ、古い雑誌ヲ読ム。コンナ呑気ナ今ヲ、数日前ニ比ベルト、嘘ジャアルマイカトサヘ、疑ッテ見タクナル。

◇十二月十八日 於南京

寒イ朝一、昨夜ハ小雪ノ上風ガアッテ眼ガ覺メテ見タラ窓ガ開イテキタ。寒イ筈ダ。中央飯店ト云フテモ、電灯、スチームガ無イカラ、サッパリ有難ミガナイ。今日ハ全軍ノ慰靈祭ガ行ハレタガ風邪氣味デ用心シテ遠慮シタ。賓客デ一週間程休ンデ閉口シタ苦シミガアルノデ、今度ハ用心ニ用心シテカ、ラネバナラス。十二月三日付ノナミエノ手紙ガ届イタ坊ヤハ台湾ニ行ツタラシイ、淋シイダロウ南京ニ来テサテ何時マデ続クカ、京都ヲ馬介ニ引越スノモ一案デハアル。戦闘中ハ忙ガシサノ為、家郷ノ事ナド考ヘ及バナイガ、一旦集結ナドシテ落付クト、無暗ト家郷ヲ思フ。京都ト馬介ニ手紙ヲ書ク。國民政府用箋ト云フ紙ニ書クノダカラ、何等ノ説明ヲ要シナイ。

◇十二月十九日 於南京

集結間ノ整備、其他ニ関シ軍命令ガ来タ。南京市付近ニ於テ当分雜事ノ氾濫ダロウ。北滿駐劄間ノ一年ハ決シテ愉快、有益ナ総テデアッタトハ思ハヌ。戦闘々々ト日ヲ追ッテキルトキハ、軍隊トシテハ此上モナイ快事ダガ、滞在ナドナルト其処ニ来ルモノハ、不快ノ連続ガ、快事ニ勝ッテ余ル。昨夜モ憲兵隊ト、特務班ト、師団ノ兵トノ間ニ、クダラス事件ガ起ッテキル。悪いノハ皆ニアルト思フ。ソシテ総テガ、着眼ガ小サク、度胸ノ無いノニ起因スル。午

後、軍ノ佐々木參謀ト共ニ南京無電台、放送局、電報電話局等ヲ、見テ廻ッタ。彼等ハ我等ノ敵ダ。総テ器械ヲ脱シ、部品ヲ毀シ、使用ニ堪ヘナイ様ニシテキル。部屋ヲ南側ノ小室ニ引越ス。花ヨリ団子ダ。一室デ結構ノ暖カデサエアレバ、問題ハナイ。ブドウ酒ガアルノデ、美味シク戴ク。米ハ追送ガ続カズニ、尚ホ、南京米ヲ食ベテキル。味ガナイ。

サラトサラ

南京占領。掃蕩。司令部設置。宿舍設備等等、色々多忙デアッタ。北畑ガ、ソコラ付近デ、モノシタモノダロウ、新聞包ヲ開キ乍ラ「參謀殿、是、皆、サラデス。マツサラデス」何ダ、コッブデヤナイカ。オオ沢山ダネ「ソーデス、皆サラデス」僕ノ怪ゲンナ顔ガ暫ク続イタ。

サラトハ、新シイ、マダ手ヲツケテイナイモノ、ト云フ意味デアアル。

◇十二月二十一日 於南京

參謀室ノ暖炉ノ御蔭デ部屋ガ暖ク満点ダ。広サト謂ヒ調度ト謂ヒ申分ナイ。色々ナ連絡者デ目ガ廻ル様ナ時ト、ボカントスル時トガアル。亦、近ク動キ相ナ噂モアル。南京ニ永ク滞在スル事ハ好マヌ。新戰場ヘノ転移ヲ希望スル。夜、御酒ガ支給サレタ。ヤッパリ日本酒ハ好イ。北畑ト会食スル。弓場モ来タ。魚ノ特別料理ガ美味シイ。

◇十二月二十三日 於南京

於南京ト云フノガ、何日マデ続クノカ。占領シテ早十日モ立ッ

タ。今日ハ雨ダ。久シ振リノ雨ダ。常熱デ慘ナ雨ニヤラレテカラ、正ニ一月目ノ雨デアッテ、此ノ追撃間御天氣統キデアッタ事ハ、実ニ幸デアッタ。午後、師団長ニ御伴シテ、下関ノ野戦倉庫及第四野戦病院ヲ見ル。下関ノ野戦倉庫位置ハ、支那ノ小麦、軍需品倉庫デアリ、製粉所デアッタ關係上、品物ガ沢山アル。

◇十二月二十四日 於南京

寒イ朝、ハッキリシナイ朝ダ。午前九時、飛行場ニ於テ、自動車隊ヲ編成シタノデ行ク。各隊ノモノハ、マダ集ラナカッタ。僕ノ考ヘハ、師団直轄トシテ後方輸送デナク、第一線戦闘ニ使用スルトノ、軽快ナル運用ト、目下ノ司令部使用ニ供シタイ為ノ直轄使用デアアル。輜重隊長ノ編成内ニ入レル、敢テ不可デナイガ、右ノ如キ理由デアアル。今日ハ、兵団長會議、參謀長會議ガアッタ。将来ノ企画ニ関シ重大ナル指示アリ。宿營ノ事ニ就キ大須賀〔応27期〕參謀モ忙ガシイ。兵民分離ノ査問ニ関シ、專田參謀モ多忙ダ。一戰終ッテ次ニ來ル準備ト、治安、亦、一戰ニ劣ラナイ。今夜風呂ニ入ル。ブドー酒ガナインノデ、晩酌ハ止メタ。自動車ノ運用ハ仲々難シイ。苦勞ガ多い。

夜遅クマデ讀書ス、昭和七年ノ中央公論ダカラ、相当ナモノダ。之ヲ貪リ読ムノダカラ、戰場ノ欲求ト云フモノガ解ル。

山ハ昆倫 流レハ長江
民ハ四億ノ五千年。

◇十二月二十六日

軍司令官殿下ノ御巡視ニ御伴ス。首都飯店ヨリ、中山碼頭ヘ、海

ハ、明日、軍司令官宮殿下御巡視ノ場所ヲ、下檢分シタ。二宮大尉ガ上海カラ、雜誌ヲ沢山持ッテ來テクレタ。專田參謀ガ上海ニ行ク。

◇十二月二十九日

ナミエノ母ヨリ、千人針ヲ送ッテ來タ。北支ニ居ルトキ、送ッタト云フ手紙ハ來テキタノダガ、廻リ廻ッテ今日届イタ。チョッキニナッテキテ、内カクシノ中ニ、成田山ノ御守リガ入レテアル。ソシテ其ノ上ニ、五錢白銅ト十錢白銅ノ二ツガ縫ヒ着ケテアル。コンナ喇叭節ヲ思ヒ出シタ。

兵隊さんとかけて何と解く

五錢白銅と解くわいな

よう解かしやんした其の心

わたしヤシセンを越えて行く。

真心ノコモッタ、ソシテ念入りノチョッキニ、苦心シテ手ニ入レラレタ成田山ノ御守リ。感激ノ他ナイ。ヤッパリ僕ハ、武運ガ強い筈ダ。早速着タ。彈丸ヨケト、防寒ト併用ダカラ、チョウ法ダ。

外国ノ大使ガ來ルラシイ。何モ惶ル事モアルマイ。戦争デヤナイカ。其処ニハ破壊モアレバ、死傷モアルノガ当然ダ。夜ハ、不相変雜誌ヲ読ム。近頃、運動不足ノ為カ、腹工合ガ悪い。当分御酒ハ中止ダ。

◇十二月三十日

紫金山上ノ白雪ガ、崇高ニ輝ク。

午前ハ第十六師団陣没者ノ慰靈祭カ行ヘレタ。北支作戰以來、九

軍ノ舟艇ニヨリ、浦口岸際ニ至ル。浦口ハ、津浦線鐵道ノ浦ノ位置ダガ、北支作戰ニ於テ、津ヲ占メ、今亦、浦ヲ押フ。愉快ナリ。揚子江上ニハ、軍艦及陸軍運送船數隻、碇泊シアリ、警備並ニ荷揚ノ狀況ヲ見ルト、頼モシイ。再ビ、碼頭ニ、ソシテ挹江門ニ來、敵ノ地下窖室ニ至ル。真黒ノ薄氣味悪い、コンナ窖室ヲ殿下御先頭ニテ、御巡視ニナルノハ、畏レ多イ極ミデアアル。次イデ、太平門付近ヲ御覽ニナル。敵ノ死体ヲ焼ク煙ト、奥ノ中デ、占領當時ノ戦況ヲ御聴取ニナッタ。富貴山砲台ノ地下窖室デモ、殿下ガ汚イ奥室ヘドンドン御進ミニナルノデ、ハラ／＼シタ。砲台デハ、參謀長、佐々木少將ガ戦況ヲ申シ上ゲタ。

留守司令部ノ成富參謀ガ、連絡ノ為來京。二十日付ノ岡本警務課長及ナミエノ手紙、成富參謀ノ便ニテ着。新聞ノ新シイノヤ、「キング」ノ正月号ヲ読ム。晩ハ幕僚ノ会食ヲ行フ。夜更ケマデ、「キング」ヲ読ム。

◇十二月二十七日

忙ガシイ雜務デ、一日ヲ過シタ。晩ハキングノ小説ヲ読ム。「犧牲ノ女」人々ハ皆、美シイ心ヲ持ッテキル。誰一人トシテ、責ムヘキ、責メラレルヘキ人ハナイ。世ノ中ト云フモノガ、コンナニ麗シイモノデアッタラ。アレカシト願ハルルモノナリ。

◇十二月二十八日

兵站自動車一中隊ノ配備ヲ得テ、師団ノ補給ハ著シク円滑トナッタ。兎ニ角店イ地域ニ、鐵道ノ無イ所ニ分散シテキル部隊ニ對スル補給ハ、仲々容易デヤナイ。昼カラ雨ガ降り出シタ。雪雨ダ。午後

百八十名デアアル。寧晋附近ノ戦闘ニ於ケル、自分ノ事ヲ想像シ、感慨無量デアッタ。アノ時、武運ガナカッタナラバ、僕モ今祭ラル身デアッタロウニ、ソレカラ常熱、無錫、南京附近ノ戦闘ト、幾度カ敵彈下ニアッタガ、コウシテ無事デアアルコトヲ感謝シナケレバナラス。

午後ハ、師団長ノ巡視ニ随行ス。各部隊兵舎ノ關係ニ依ッテ、幸不幸ハアルガ、然ル可クヤッテキル。午後六時マデカカッタ。

十一月二十六日付ノナミエノ手紙及子供ノ写真、十二月十二日付ケノ手紙ガ届イタ。恭子、孝、裕ガ皆立派ニ撮レテキル。転任ヤ、凱旋ノ事ヲ書イテ居タガ、今ノ狀況デヤ一寸アリ相モナリ。

◇十二月三十一日

昭和十二年モ、トウ／＼最後ノ日トナッタ。

昭和十一年ノ元旦ハ、齊々哈爾濱ヘ迎ヘタ。十二年ノ元旦ハ、京都ヘ迎ヘタ。參謀肩章輝カシイ、新装ノ少佐ノ礼服勇マシク、深草ノ新春ハ実ニ久シ振リノ長閑サデアリ、麗カサデアッタ。二、三月ハ、歩兵操典ノ研究デ、新戦闘法デセワシカッタ。ヤガテ、特命檢閲アルノ報來ルヤ、目ノ廻ル忙ガシサガヤッテ來タ。ソシテ、防空演習ノ僕トシテハ、実ニ、油ノ乗ッタ氣持チヨイ、總テノ仕事デアッタ。警備計画ト言ヒ、防空計画ト云ヒ、或ヒハ、其ノ実施ト云ヒ、本年ハ画期的ニ、実施シタ事ハ、愉快ノ極ミデアッタ。防空演習ノ始マル頃カラ、日支事變ハ本格的トナリ、愈々抜き差しナラヌ様ニナッタ。ソシテ、十二年八月二十四日ノ夜、動員令ハ下ッタ。其間、宇治ノ火藥庫ガ爆発スル等ノ事件ナドガアッタガ。動員下令後ハ、ソレコソ息ノ付ク間モナク、トウ／＼今日ノ大晦日ヲ送ル日トナッ

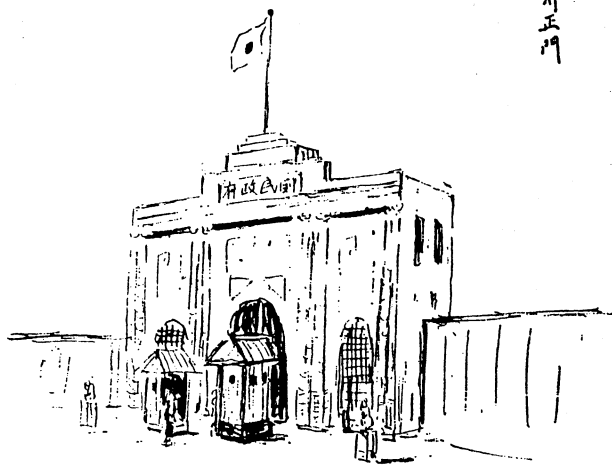
發	月	日	時	分
着	月	日	時	分
信	殿	者	信	地
受	者	信	發	於

南京
中山路



タ。戦争ト云フ大事件ニ遭遇シテ、之ニタツサハリ、ソシテ、生死ノ間ニ馳驅シテ、明日新年ヲ迎ヘルト云フ自分ヲ、実ハ、不思議ノ

国民政府正門



テ、一国ノ首都ニ恥シカラヌ施設ハ、或ヒハ中山路、漢中路、病院、学校、電気、工場等、実ニ至ラザルナク。亦中山陵ノ建立及其付近ノ将来ニ対スル都市計画ハ近代都市ノ粹ヲ構図シタモノデア。進ミタル文化ノ先驅ニ対シ遅レザラントシテ急行シツ、アルノガ、南京ノ姿ノ一ツデア。全支統一ノ手段トシテ、抗日ト謂ヒ、抗戦ト呼ビ教育ニ、宣伝ニ、行政ニ、軍事ニ、唯対日ノ一点張りヲ以テ全支民衆ヲ駆リ立テテキル。共産党ノ使喚ニ依ル総テデア

様ナ氣サヘスル。敵弾ガ当ル可クシテ当ラナイ事ヲ考ヘルト、氏神様ヤ諸々ノ御守等ノ加護ニ対シテ感謝シナケレバナラス。昭和十二年ハ、僕ノ一生中、変化ノ多カッタ年デアリ、且記念スヘキ重大な年デア。ル。

今夜ハ、電灯ガ点イタ。当事者ノ非常ナ努力デア。是レデ、南京文化ノ真ノ姿ガ出テクルダロウ。成富參謀ガ明日立ツト云フノデ、会食ヲスル。内地ノ大晦日ノ夜ノ気分ヲ想像シテ見ル。台所ノ忙シサ。御座敷ノ準備。除夜ノ鐘。等々。懐カシイ感じガスル。

昭和十二年ヨ、サラバノ。唯々総テニ対シテ感激ノ誠ヲ捧ゲテ此ノ歳ヲ送ル。

◇昭和十三年一月一日

戦争中敵国ノ首都ニ於テ、新年ヲ迎フルト云フ、コンナ名譽ナ、亦詩的ナ事ガアロウカ。建設一千年ノ旧キ歴史ヲ有スル南京ハ、周圍十里ノ城壁ニ依ツテ固メラレ、壁ニツイテイル苔ガ如何ニモ時代ノ変遷ヲ物語ツテキル様デア。城内ノ南半部ハ市街地ナルモ、北半部、及西部ニハ尚畑地アリテ、建設當時者ノ氣宇ノ壮サヲ覘フ事ガ出来ル。富貴山ト云ヒ、北極閣ト云ヒ、城内ヲ展望スル好適ノ所ナルモ、視線ハ尚ホ南門ニ達セザル広サナリ。西ニ清凉山アリ。南京城ト下関ト揚子江トヲ一把捕捉スル事ガ出来ル。西北ニ屹立スル紫金山ト洋々トシテ迫ラザル揚子江ノ流レトハ壮美ソノモノデア。天下ノ大勢ガドウアロウトモ悠久無縁、唯々自然ヲ持ツ、是レガ南京ノ姿ノ一ツデア。國民政府ガ南京ヲ首都ト定メテヨリ正二十年、革命當時ノ宣言精神ニ則リテ、凡有文化ノ施設ヲ行ヒ、新生運動ヲ強制シテ、市区ノ改正、道路ノ設定、各種ノ建設ヲ進メ

ル事ハ勿論デア。見ヨ、路傍ニ貼リ出サレアル宣伝ノ文句ヲ。見ヨ、排日毎日ノ新聞雑誌ヲ。教育書類ヲ、國民ノ精神ヲ動カシ、國民ノ行動ヲ律シタル其ノ原動力ガ南京ノ姿ノ一ツデア。南京ノ防備ニ就イテハ、彼蔣介石ハ如何ナル時機ヨリ之ヲ開始シタルカハ詳ナラサルモ、對陸地防備、對空中防備、對江上防備ハ近代防備ノ特色ヲ蒐メテ、完備ヲ期シテキタ事ハ湯水鎮付近ノ陣地、麒麟門付近ノ陣地、西山付近ノ陣地、並南京ヲ中心トスル各種對空陣地ヲ見テモ明カナリ。軍事上ノ諸教育訓練ノ施設ハ恰モ我カ東京及其近郊ト同様デア。特ニ防空ノ施設ニ至リテハ、永久の施設ト、爆急の施設トノ錯雜ガ如クニ現ハレテキル。守ルモノ、腕ギヲ以ッテ作ラレタ要塞、是レガ南京ノ姿ノ一ツデア。翻トシテ翻ツテキル日章旗ノ下、黎明ノ支那、麗カナル此ノ日、將來ニ約束スル真ノ平和ト、大キナ期待トヲ一杯ニ孕ンデキルカノ如キモノ、是ガ今南京ノ姿デア。師團司令部ニ於テ新年ノ儀式ガ挙ゲラレタ正門内ニ於テ、国旗掲揚、遙拜、万歳三唱、次イデ型ノ如ク三階ニ於テ祝宴ガ開カレタ。南京ノ天候ハ概ネ好イ御天氣ダガ、今日ハ亦格別好ダ。午後軍司令部ニ至リ宮殿下ニ賀詞ヲ言上ス。色々ナ話ノ途中、

「木佐木ノ。君ハ此ノ夏參謀本部ニ取ル管ダッタンダヨ。併シ師團參謀デ出征シタト云フ事ハ、君ノ為非常ナ幸福ダ」

僕ノ名前ヲ御存ジデアッタ事、ソシテ僕ノ一身上ニ関シテ御心ヲ掛ケサセ給ヒアリシ事、感激ノ極ミデア。師團長宿舎ニ行キ、次イデ牛島少將ノ所ニ行キ、山口ト大イニ飲ム。飲マヌツモリノ予定ガ却テ大イニ飲ンデ仕舞ッタ。

空襲アリ、コン蓄生ノ。

◇一月二日

中部防衛司令部ノ宮本參謀外、府県ノ防空課長ガ十二名程、研究ノ為来ル。南京防衛司令部其他防空上ノ各種施設ヲ案内ス。其指導者ハ誰ナルヤ知ラズ。兎ニ角現代戦ニ於ケル實際空襲下ノ経験ヲ如実ニ持ッテキルノハ此ノ南京デアロウ。無論日本ノ家屋ト南京ノソレトハ大イニ異ル所アリ。亦要塞ノ防禦ノミニ専守サレアル南京ト、第二線ノ意義ノミニ有スル日本内地ノ設備トハ亦異ナル可キダ。海軍ノ爆撃ノ新聞紙上ニ於ケルノ余リニ小ナル事ニハ一同モ奇異ノ感ヲ持ッテキタ。夜宮本參謀ト二人デ会食ス。南浦園、中村家ニ寄セ書キス。亦空襲アリ。

◇一月三日

夜明ケ前腹痛アリ。鈴木軍医ノ診察ヲ受ク。大シタ事ハ無イ様ダガ冷エタ為ダロウ。自重シテ一日臥床ス。台湾ノ父ヨリ、ウイスキー、煙草ノ慰問品アリ。神戸ノ緒方氏ヨリ、ウイスキー、カステラノ慰問品アリ。ナミエノ手紙二通到着。

◇一月四日

勅諭御下賜記念日。司令部正門内ニ於テ、勅諭奉読式アリ、転進ニ関シ内命アリ。ウルサイ南京ノ様ナ所ニソレコソ沈滞シテ居ルヨリモ、常ニ動ク事ダ。機動師団ニ間違ヒナイ名実ソノモノトナッタ。短い期間ニ大兵团ヲ、縦横ニ機動セシメ得ル日本ノ訓練ノ精到ト、戦略ト、輸送ノ進歩ヲ誇リトスル。難民区ノ査問状況ヲ視察ス。戦敗国ノ民、亡国ノ民タル勿レ。二十万ノ避難民、嗚呼ノ憐

レムヘシ。兵站自動車第四十中隊ノ渡辺軍曹ガ、家鴨十羽ヲ持ッテ来タ。感謝。大本營ノ諫山〔春樹27期〕大佐等ト、スキヤキノ会食ヲナス。

◇一月五日

次期作戦躍進ノ為メ、後方整理ヲ着々進ム。澁浦鎮ノ荷物ハ昨夜到着シタ。常熟ノ荷物ハ瀬戸大尉之ニ任シ、丹陽ハ兵站自動車中隊之ヲ実施ス。彈薬ノ補給ハ完了ス。衛生関係事項デ研究ヲ進ム。貴重ナ材料デアリ、研究デアル。

◇一月六日

兵隊仲間デ盛ンニ転進説ヲナスモノアリ。秘密ノ保持ナドト云フモノハ、上級者ニ於テ却テ出来ヌカラ難シイ。午後一時カラ、押収兵器ノ試験射撃ヲ実施サレタ。ドノ兵器モ本邦ノモノヨリ優秀ナモノバカリダ。一体是レデ良カッタノカ。輕機、歩兵砲、山砲、高射機関砲等、皆精巧デアリ、且日本ノモノヨリ優レテキル。先般、追撃中十榴ノ彈丸ガ上海ニモ無イト云フ事デ、一発ノ補充モ受ケナカッタ事ナドト思ヒ合セルト、日本ノ戦争準備ト云フモノハ、最モ直接的ナ兵器ニ於テ不完全、不充分デハナイカ。明日ノ戦争準備デ一番怠ケテアッタノハ、兵器資材ノ整備ト彈薬ノ準備ニ於テ、特ニ大デアッタ事ハ、重大ナ責任問題デアル。夜西村案天氏ノ漫談アリ。平林少将閣下ニ手紙ス。

◇一月七日

司令部ニ安置シテアッタ遺骨ガ、本朝出發シタ。先ヅ上海ニ、ソ

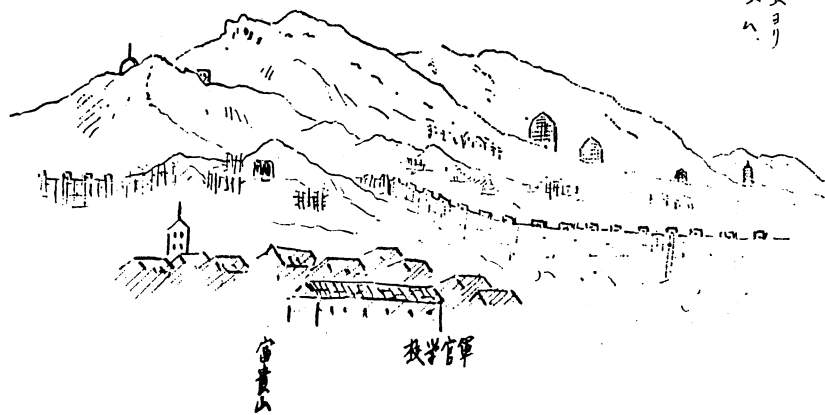
國民政府後上ヨリ
紫金山ヲ望ム

中山陵

紫金山

第三峰

天竺山



シテ内地ヘ、無言ノ凱旋ノ。噫。此ノ凱旋ヲ迎ヘル親、兄弟、妻子ノ姿ヲ思ヘバ、胸ガツマル様ダ。日本トシテハ此ノ尊キ犠牲ヲ無ニ、決シテ無ニスル様ナ事ガアッテハナラヌ。堯化門ニ於ケル、三八ノIIノ宿营地ノ巡視ニ随行ス。帰途中山陵及、陣没記念碑ヲ見ル。中華民國革命ノ祖、孫逸仙ノ陵墓。サスガハ壮大ナモノダ。陵墓ダケニ日本軍ハ、チットモ手ヲ付ケズ彈丸一ツ當ッテキナイ。浜崎氏カラ慰問袋ガ送ッテ来タ。「チヨッキ、沢ノ鶴、栗おこし、ゆであづき、煉羊羹、宝来煮、バット五ツ、まわした足袋下、タオル、靴下、楊子、煉齒磨、メンソレタム、万能小刀。」師団長ヨリ戴イタ雉ヲ、參謀長、參謀ニテスキヤキシテ会食ス。美味シ。国分ノ姉、清水産業組合、台湾ノ父、朝鮮澄子、淑子、ナミエ、佐藤大尉ヨリ来信。

皇軍に 手向ふ敵もなかりけり

もろくも落ちし 南京の城

澄子(十三歳)

めでたしや

南京かん落 旗の波

淑子(九歳)

◇一月八日

陸軍始メモ別ニ儀式ハ実施セラレズ。午前中ハ押収兵器ノ利用ニ就イテ研究ス。輕機、重機ハ利用価値大、小銃ハ自衛用トシテ利用、其他ハ利用シ得ス。転進ニ伴フ輸送ニ関シ、軍、第二碇泊場司

令部、南京停車場司令部ニ連絡ス。行先キ皆目不明ニテ、輸送実施ト言フノダカラ、骨ガ折レル。

来信、慰問状。

奈良県立桜井高女三年島山和子
福岡県八女郡福島町稲当 平義勝
広島市尾長 尋常高等小学校尋一 原田博
山口市白石小学校尋三 河野ヒサ

◇一月九日 上海

正午、故宮飛行場出発ノ飛行機ニテ、上海ニ至ル。快晴、戦跡ヲ上空ヨリ見ナガラ、杭州ヲ経テ午後三時三十分、上海ニ着ク。直チニ方面軍司令部ニ至リ、所要ノ連絡ヲ行フ。兵站宿舎、東館ニ泊ス。四階ノ屋根裏、物置キノ様ナ所ニ、安達少佐ト同宿ス。

◇一月十日 上海

屋根裏ノ朝ハ寒イ。上海ノソレガ縦令、戦争中デアッタトシテモ、上海ト云ウ通念ハモット華カデ、感じノ好イ所ナ管デアアルノニ。午前中ハ中支淀泊場監部ニ行ク。午後、方面軍司令部ニ於テ、輸送関係者ノ会合ヲ行フ。池谷(半二郎33期)参謀、渡辺参謀、江口参謀、守下少佐、杉本少佐、日高海軍参謀等、会ス。大体ノ方針ヲ決定ス。方面軍司令部ノ位置、偏位シ交通不便ナリ。夜東語ニ於テ、安達少佐ト会食ス。サシミト云フモノガ実ニ美味シカッタ。

ル。

◇一月十四日 南京

輸送ノ計画デ多忙ダッタ。師団連絡將校ノ会議ヲ行フ。各隊ノ輸送請求表ヲ見テ、荷物ハ先般北支カラノ転進ニ比較シテ、二倍ニナッテキル。押収自動車ガ約百台ト云フ数ダ。夕方島村少佐ガ魚ヲ一尾持ッテ来テクレタ。早速サシミニシテ三人デ会食ス。九月二十一日付浜崎満枝嬢ヨリノ手紙ガ、今日届イタ。岡田中佐、広田少佐及、余宛ノモノ。活潑ナモダン嬢ガ、大阪ノ印象トシテ残ッテキル。清水小学校及中村氏ヨリ来信。学校宛返ス。

◇一月十五日 南京

曇リ、暖イ。輸送請求表ヲ夫々発ス。輸送要領ヲ配布ス。師団査問委員ト、憲兵分隊トノ間ノ事件ヲ聞ク。憲兵分隊ノ処置ハ、糧当デナイト思フ。統帥侵害デアルト共ニ、総テ違法デアアル。亦不敬事件デモアル。正々堂々ト黑白ヲ明カニスヘキデアアル。蒲地中佐、僕ニ別レヲ告ゲン来ラル。橋通訳ガ女ノ兄二人ヲ連レテ来タ。憲兵トノ問題ニ就キ、其ノ生命ヲ保護スル為ダト云フ。僕ハ憲兵ト云フモノニ対シ、未ダ嘗テ悪イ感シヲ持ッタ事ハナイガ、今度ノ事件ニ関スル限り、極度ノ憎悪ヲ感ズル。国軍ノ名誉ヲ、南京ノ軍紀ヲ、失墜シタルモノハ誰レカ。此ノ可憐ナル女兄ノ生命マデ奪ハントスル。強イ義憤ヲ覚エサルヲ得ナイ。頭ノ髪ヲ馬鹿ニ手入レスル。貰ッテ来タボマードモ使フ。部屋ニアッタ櫛モ用ヒ、オールバックニ大童ノ態。

国分山内兄ヨリノ葉書

◇一月十一日 上海

淀泊場監部ニ、ソシテ方面軍司令部ニ、大体ノ計画、及連絡、終了ス。日本人町ヲ歩イテ見ル。淋シイ。ソシテ戦ノ跡トシテノ、北停車場付近ハ、実ニ美事ニ破壊サレテキル。寧ロ尊イ感シサヘ出ル、綺麗ナ破壊デアアル。此ノ次ニ来ルモノ、即チ建設ノ困難サガ想像サレル。

◇一月十二日 上海ヨリ南京へ

月ノ十二日ト云フ日ハ、師団ノ為ニ何事カ、アル日デアアル。僕ガ帰ッテ来テ、大体ノ方針、要領ノ定ッタ事ヲ、皆知ッタ事ガソレナノカ知ラ。午前九時三十分、上海発飛行機ニ依リ、亦杭州廻リニテ帰ル。今日ノ飛行機ハ少シ風ガアッタノデ前回ヨリ楽デアッタ。追送品、台湾ヨリ煙草十二缶、国分ノ姉ヨリ兵六給二十個、ナミエヨリ、襦袢、靴下、羊カン、氷砂糖、煙草等、到着ス。近頃酒モアマリ嗜マス。煙草モロニシナイノダガ、ソシテ糖分モ戦闘中程欲シクナイノダガ、方ミカラ能ク戴ク。若干ハオスソ分ケンテ後ハ次ノ戦闘ノ為ニ。夜ハ大須賀参謀、専田参謀、三人シテ東語ヨリ戴イテ来タオスシヲ、美味シク食ベタ。

◇一月十三日 南京

曇、南京ノ曇ハ曇リデモ風ノ無イノガ好イ。国民政府内参謀室モ実ニ立派ナ部屋ダガ、旬日ナラズシテ別レネバナラヌトナレバ、名残リ惜シイ。午後ハ各隊副官会議。輸送ニ関スル指示ヲ行フ。京都府知事ノ陣中慰問ト云フ言葉ト、山口朝太郎氏(春秋映画社)ノ賀詞、岩井知海氏ノ御手富貴ヲ頂戴ス。夜工兵聯隊長、連絡ノ為来ラ

南京陥落乃祝賀会にて

金玉をふらりと振りし南京乃

城攻め落す今日の目度さ

◇一月十六日 南京

慰問袋が届イタ。
送り主ハ

京都府立京都第二高等女学校
三年 西村 京子
大島 久子

松本貴美子

キング、新聞、グラフ、京舞妓プロマイド、ドロップス、タバコ、コーヒー、サンメイド、煉羊カン、氷砂糖、バインアップル、焼松茸、タオル、

袋ハ府立二女卓球部ノ賞ノ日本手拭他、

すでに聖戦 幾度

凱歌は常に我とあり

貫く赤誠 たゞ一つ

知れ万世の 大日本

ト書イテアル。

三嬢ニ対シテ、夫々スケッチシタ礼状ヲ、出シタ。

◇一月十七日 南京

細雨。雨ヲ見ルト上陸當時ノ戦闘ヲ想像シ慄然タルモノガアル。正午、団隊長トノ会食アリ。



鏡ヲ見テ画イテ送ル、僕ノ顔

◇一月十八日 南京

慰問袋

愛国婦人会三重県支部

新田重五郎

ドロップス、鉛筆、塵紙、三尺、封筒、軍手、便箋、女優絵葉書、みゝかき。

三井合名会社

挨拶状、清心丹、女優プロマイド、塵紙、鉛筆、三尺、軍手、タオル、オゾ、みかん缶詰、花嫁煮、詰合ウニ豆、昆布飴、冰糖、靴下、アサヒグラフ。

ナミエヨリ三通、吉川、木本、平松氏ヨリ及朝鮮兄ヨリ来信。

◇一月十九日 南京

昨夜カラ本降りニナツタ雨ハ、夜ニナツテ強クナリ、今日ハ終日降り続ケタ。輸送ガ更ニ一日早クナリ、且第一船団ハ、秦皇島上陸ト決定シタ。一日、三日付ケノナミエノ手紙ガ着イタ。軍刀ノ錆ヲ取ッテ貰ッタ。寧晋デ軍刀ヲ抜イタ後、常熟デ雨ニ濡レタ儘ニシテ

◇一月二十日 南京

雪。昨夜ノ雨ハ本朝ニナツテ雪トナリ、昼頃ハ可成リ積ッタ。今日ハ乗車ノ為、移動シテキル部隊モアルノダガ、氣ノ毒デアル。揚子江ヲ遡ッテ来ル輸送船モ、結局遅レルラシイ。夜、中央飯店デ陸軍々楽隊ノ演奏ガアッタ。戦地ニアッテ軍楽隊ヲ聞クノハ、実ニ感激的ナモノデアル。志氣ノ鼓舞ニハ、適當ナモノダト云フ事ヲ痛切ニ感スル。

◇一月二十一日 南京

南京四十日。日支事變ノ始マッタ頃、京都デ支那ノ地図ヲ拡ゲテ、占領スヘキ地線ヲ色々案ジ描イタモノデアル。黄河ノ線、瀧海鐵路ノ線、蘇州南北ノ線、南京杭州ノ線、開封―南京ノ線、等々々。半バ真剣味アリ、半バ壮語ニ類スル模索ノ耽リデモアッタ。現実ノ今ハ、明瞭ニ杭州ヨリ西北方ニ画シタル一線ニ依リテ、支那ノ主要部、支那人人口ノ半部以上ヲ占有スル地域ヲ、手中ニ収メタ。寧晋ヲ出ルトキ、山口ガ南京デ会ウト残シテ行ッタ言葉ノ通りニ、城内ニ於テ、二人ハ会フタ。南京正面攻撃ニ当リ、ソシテ南京ヲ攻略スルノ光榮ニ浴シタ。敵国ノ首都占領、国民政府ニ陣取ル、ト云フ事が、事実トシテハ余リニモ、ドラマチックデアリ、亦詩的デモアル。未来永久ニ残ル、尊クモ、輝カシイ史実デナクテ何デアロウ。南京ノ四十日ハ、部隊ノ集結整頓、敗残兵ノ掃蕩、治安宣撫、警

何カシラ印象ノ思出ガ強ク往来スル。

◇一月二十二日 南京ヨリ上海ヘ

サラバ南京ノ 午前七時四十分ト云フ、薄明ルイ時刻ニ南京駅ヲ発車スル。師団長、大須賀参謀、岡田副官、宮本副官、及僕ノ五人デアル。南京駅ニハ畏シコクモ、軍司令官官殿下ノ御送リヲ忝ノフシタ。感激ノ極ミナリ。車ハ満鉄ヨリ持ッテ来タ車掌車ダ。日本赤十字副社長、徳川氏モ同乗。車中ハストープガアルノデ暖カイ。唯発車ノ際ニ於ケル動揺ガ大変ダ。発車毎ニストープノ転倒ヲ防グ為ニ押ヘネバナラヌ滑稽ガアル。丹陽、常州付近、サテハ無錫ノ駅等ハ、吾等ノ戦ノ跡トシテ殊ニ一種言ヒ得ヌ感ジニ捉ハレタ。午後八時、真暗クナツテカラ、上海ニ着イタ。東和洋行ニ泊ス。

◇一月二十三日 上海

中支監部、第六碇泊場司令部、方面軍司令部等ニ連絡ス。順調ニ輸送ハ実施サレツツアリ、本朝、蕪湖ヲ敵ガ空襲セリト云フ。仕様ノナイ奴。専田参謀ヨリ電報アリ。大体ノ見当判明ス。

◇一月二十四日

大須賀参謀ハ本朝吉野丸ニ乗船ス。参謀長、一寸下船、連絡ス。口ヒゲ、山羊ヒゲ、アゴヒゲヲ落ス。

黄昏の戦線

一、戦線暗く 黄昏れて

砲声遠く 絶えし頃



備、事務ノ整理等、実ニ目ノ廻ル様ナ忙ガシサデアッタ。今新タナル任務ニ向ヒ、将ニ南京ヲ去ラントス。南京ニ毫モ未練ハナイガ、

あ、吾が友よ 君もまだ

生きてゐたかと 目に涙

二、国に捧げし このからだ

相見える時が 別れぞと

互に交わす 袂別の

固き握手も 闇の中

三、思へば今日の激戦に

敵弾あまた身に受けて

斃れし軍馬よ 我が黒馬よ

許せ み国のためなれば

四、高原寒く 夜は更けて

露営の夢に 目醒むとき

中天高く 冴え冴えと

あゝ 戦場の月青し。」

(上海ニテ覚ス)

◇一月二十五日 上海ヨリ大連へ 船中

中支那方面、上海、愈々是レデ御別レダ。午前十一時、奉天丸ニテ、碼頭ヲ去ル。出発前、方面軍参謀長ヨリ、荷物ノ件ニ関シ、内密ノ御話アリ。上海ノ 上海ノ 戦争中デナカッタナラバ、幾多ノ珍奇ヲ拾ヒ、強キ印象ヲモ残シテ去ルデアロウニ、今ハ唯、通過セル一都市ノ感懷シカ持タヌ上海デアル。何レノ日ニカ訪レル事ヲ案シミニシテ、迷ノ上海ヲ迷ノ儘、惜別スル。

◇一月二十六日 船中

波アリ。起キルノハ危険ナノデ、食堂ニモ出ス。終日寝テ雑誌ヲ読ム。夕刻、青島港外ニ寄港ス。

軍事首脳者

蔣介石、馮玉祥、陳誠、白崇禧、季宗仁、熊式輝、楊杰、程潜、顧祝同、何成、張治中、胡宗南、何応鈞、黃紹雄、張發、劉峙、賀国光、

政治主脳者

汪精衛、係科、孔祥熙、宗子文、張群、蔣作賓、張公権、吳鼎昌、王寵惠、

党主脳者

于右任、陳果夫、陳立夫、張繼、居正、戴天仇、

◇一月二十七日 大連

丁度八十日目ニ再ビ大連ニ来ル。前回、大連ヲ立ツトキハ、上陸戦闘ト云フ、非常ナ真剣味ト、多忙トラ以テ通過シタガ、今度ハソレ程デモナイ。碇泊場司令部、要塞司令部、停車場司令部、大連市等ノ煩雜ナル援助、協力ハ実ニ感謝ノ言葉ヲ知ラナイ。懷シイ遼東ホテルノ朗カナ気分ノ中ニ浸ル。韓復榘ノ死刑執行ガ報セラル。憐レト云フベシ。

◇一月二十八日 大連

参謀長、大須賀参謀、秦皇島ヨリ船ニテ来ラル。軍命令ニ基キ、全体判明ス。平漢線上ニ於ケル第二線師団ナリ。船ノ輸送ガ予定ヨリ早ク、為メニ大連市ノ宿営ガ永クナルノハ苦シイ。市民ニ対スル

迷惑ヲ思ヘバ。参謀長、参謀ニテ星ノ家ニ飲ム。大連市ハ、一昨年師団ガ滿洲カラ帰還ノトキ、ソシテ今亦、北支ヨリ中支ヘ転進ノ中、ソシテ今回亦、再三ノ厄介ニナッテキル。大連市民ノ不動ノ後援、配慮、感激ニ堪ヘナイ。

◇一月二十九日 大連

宿営輸送関係者ヲ参謀長招待ス。碇泊場司令官、要塞参謀、鉄道部参謀、倉庫長、特務機関(欠席)第七十三議會再開ノ記事ヲ毎日新聞ニ見ル。挙国一致ノ実ハ美シイ。殊ニ聖戦ニ直接従フ吾等ノ限リナキ大キナ力ガ、国民ノ声ニアル事ハ、否ム事ノ出来ナイ事実デアル。

◇一月三十日 大連

師団長、参謀長、専田参謀、宮本副官、本朝大連駅發北京へ、歩三三ノ新聯隊長、山田大佐着任。

伊^い佐^さ一男日記

△▽内は『北陸戦友』第三号「私の従軍メモ日記・伊佐一男」(昭和五十二年十一月発行)により補足

歩兵第七聯隊長・歩兵大佐
23期

「歩兵第七聯隊史」より

表 (自昭和一二、
至〃二七
一九、二七
一一上海戦間)

[illegible]

步兵第七聯隊幹部死傷狀況一覽表

(自 昭和一二一年九月二七日 上海戦間)
(至 昭和一二一年十一月一二日)

昭和十二年

◇ 十一月二十九日

第二大隊ヲシテ午前四時出發セシメ主力ハ七時出發、午後七時東鎮ニ到着セシカ宿營力ナキ爲Ⅲ、i Aト共ニ張家村ニ午後八時半過投宿ス。敵ハ既ニ常州ヲ棄テテ退却セシ後ナリ。但シ□□ハ燃エツツアリキ。

◇ 十一月三十日

常州ニ集結ヲ命セラレ午後二時宿營地ヲ発シ午後六時常州西部城外ニ宿營ス。

十二月一日

常州滞在、第三回目ノ入浴ヲナス。18 B (一19) ハ金壇城ニ向ヒ前進ス。

◇ 十二月二日

師団主力ハト□橋ニ前進ス。

第三回補充員トシテハ荒木勝三少尉以下十八名到着ス。依テ訓示ヲ与ヘ配属ヲ命課ス。

十二月三日

午前八時常州出發、午後四時半黃塘鎮ニ達シ宿營ス。

十二月四日

午前八時宿營地出發、金壇城ヲ經テ楊村ニ午後五時到着宿營ス。寒村ナルモ久シ振リニ芋アリ。

十二月五日

午前八時半楊村南端出發 途中薛埠鎮ニテ糧秣ヲ補充
シ、午後五時天寺著宿營ス。

十二月六日

午前九時出發日秋山支隊ニ属スル部隊ヲ引率シテ師團ニ
追及中橋梁修理ノ為メ重砲旅団ノ行軍ヲ止メラレ遂ニ二
聖橋附近ニ宿營ス。

十二月七日

午前七時出發午後二時頃索野鎮到着。旅団命令ヲ受ケ牛王□及其東方高地一帯ノ敵陣地ヲ攻撃ノ為Ⅰ、Ⅱヲ第一線トシテ展開、8ヲ予備隊トシ聯隊本部ハ衛村ニ位置ス。

◇ 十二月八日

払曉ヨリ攻撃開始、本道方面36 i 八午前十一時頃、35 i
 八午後二時頃此敵陣地突破、聯隊モⅡ、Ⅰ共ニ午後五時乃
 至同三十分ノ間ニ敵陣チ突入占領。直ニ夜間追撃ヲ実行シ
 山間ヲ鯉魚山ニ向ヒ追撃ス。

◇ 十二月九日

午前七時青龍山頂ニ達シ八時旭光ヲ拝シテ下山、
 □ニ小憩午前十一時所命ノ地へ鯉魚山北側付近、
 □ニ到着ス。△高橋門付近にて大休止、じ後進路を東方に変更、旅
 団トノ連絡トレス困難ス。昨夜ハ一睡モセス本夜ハ止ムナ
 ク宿舎ニ入りシハ午前二時ナリ。所命ノ攻撃準備線ニ就キ
 得サリシハ遺憾ナリ。

◇ 十二月十日

午前七時宿营地ヲ出テ途中Ⅱノ露營シアルニ会シ、且二万五千分一図ヲ本ニシテ漸ク地形モ判リ、且ⅠB Aト会シ又Ⅲカ第一線ニアリトノ旅団副官ノ言ヲ過信シ聯隊本部ハ8 t i Aヲ率ヒ海子ニ入り敵彈ヲ受テ第一線ニ進出セルヲ知ル。次後Ⅱヲ□□□□同地附近ニ展開、次テⅠヲ工兵学校附近ヘ展開、攻撃準備、☆☆本部ハ楊家底ニ下リ宿シ夜Ⅲ復帰ス。

◇ 十二月十一日

Ⅱハ払曉ヨリ攻撃、Ⅰハ午後二時□□□□□□工兵学校附近ノ敵陣地ヲ奪取セシカ城壁ノ占領ハ容易ナラス。本夜ハ工兵学校南側孫子里ニ宿ス。

◇ 十二月十二日

朝工兵学校西側高地ニ到リⅡ長ト共ニ城壁破壊ノ状況ヲ展望ス。遺憾乍ラ聯隊正面ニハ破壊口ヲ作り得スシテ終ル。秋山旅団長モ視察セラル。

第一線大隊長ヲ督励ス。

◇ 十二月十三日

午前六時36 i、同時過35 i城壁ニ日章旗ヲ挙ケタリトノ報アリ、悲觀セシカ次テ第一中隊午前七時二十分、35 iニ先シテ城壁ヲ占領セリトノ報アリ、又一方Ⅱ、Ⅲ之ト相前後シテ極メテ不完全ナル破壊口ヨリ一部城壁ニ上レルヲ知リ急キ工兵学校南側高地ニ上ル城壁上ニ旗ノ林立スルヲ見

ト同様聯隊ヨリ代表一コ大隊参列ス。

初雪アリ気温俄ニ下ル。

負傷將校見舞狀ヲ書ク。

◇ 十二月十九日

終日為ス所ナシ、休養ス。

◇ 十二月二十日

午前十時ヨリ光華門外防空学校内師団司令部ニ於テ團隊長會議アリ。師団長ノ訓示指示、参謀長、各部長ノ口演アリ。会食後光華門ニ至リ36 i長以下軍司令官殿下ニ対スル講演ヲ聴キ、次ニ2 F Lニ西野大尉外將校ヲ慰問ス。

入浴ス。

◇ 十二月二十一日

午前十一時ヨリ大、砲隊長ヲ集メ師団長ノ訓示其他ヲ伝達シ懇談ス。昼食ヲ共ニシテ解散ス。

旅団長閣下ノ招キニテ35 i長、S長ト共ニ其宿舍何處歟邸ニテ御馳走ニナル。

◇ 十二月二十二日

午前九時出發中山陵ヲ見物ス。擬裝半ハニシテ占領セラレアリ、若干砲彈ニ見舞レアルハ致シ方ナキモ心ナキ兵ノ為ニ内部ヲ若干焼カレアルハ遺憾也。昼食ハS長ヲ招キテ会食ス。同行・北村聯隊旗手、橋爪軍医見習士官▽

◇ 十二月二十三日

將校命課意見、考科表□修訂正ニテ一日ヲ送ル。

ル。本部ハ午前十時半頃城壁上ニ至リ、出征以来初メテ軍旗ノ覆ヲ脱ス。

城壁上ヨリ遙カニ敵ノ首都ヲ望ミ快哉言ハン方ナシ。東廠街ニ宿營、市内ノ掃蕩ヲ行フ。

◇ 十二月十四日

朝来掃蕩ヲ行フ。地区内ニ難民区アリ。避難民約十萬ト算セラル。

◇ 十二月十五日

朝来担任地域内ノ掃蕩ヲ行フ。午前九時半ヨリ旅団長閣下ト共ニ地区内ヲ巡視ス。

午後三時頃大谷光照伯ノ筆者一高配屬將校時の生徒▽慰問ニ來訪セラル。

入浴ス。

◇ 十二月十六日

赤壁路ノ民家ニ宿舍ヲ転ス。

三日間ニ互ル掃蕩ニテ約六五〇〇ヲ嚴重処分ス。

◇ 十二月十七日

午後二時ヨリ入城式アリ。部隊ハ中山門ヨリ国民政府間ニ堵列、中支那方面軍司令官松井大將、上海派遣軍司令官鳩彦王、第十軍司令官柳川中將、中支派遣艦隊司令官長谷川中將ノ閱兵アリ。終ツテ国民政府ニテ酒盃ヲ挙ク。

◇ 十二月十八日

午後二時ヨリ飛行場ニ於テ陸海聯合大慰靈祭アリ。昨日

入浴ス。

久シ振リニ雨。

◇ 十二月二十四日

終日無為ニシテ終ル。

今日モ雨天ナリ。

◇ 十二月二十五日

午前旅団長閣下ニ明日ヨリノ行軍出發ニ付挨拶ス。

夫ヨリ一旦婦隊兩副官ト下関附近及獅子山砲台ヲ見物ス。

◇ 十二月二十六日

午前七時赤壁路ノ宿舍ヲ出テ午前九時中山門ヲ出發ⅡB A、I F Lヲ区処シ午後五時顔家村ニ到着宿營ス。同村ニハ砲兵学校アリ、但沿道ノ部落ハ16 D部隊焼却シアル為宿營ニ困難ス。

午後十一時第八中隊火災ヲ起ス。

◇ 十二月二十七日

午前八時出發、午後三時石家辺ニ到着宿營ス。案外広キ家ニ宿ス。酒ノ加給品ヲ受領ス。

◇ 十二月二十八日

午前八時半出發、午後四時屯田西方無名部落ニ到着宿營ス。寒村ノ貧弱ナル一室ニ宿ス。

◇ 十二月二十九日

朝来降雨アリ地面ハ泥濘トナル。午前八時半出發、午後四時丹陽東方後庄村ニ到着、宿營ス。

◇ 十二月三十日
滞在。

◇ 十二月三十一日
朝来降雨霽レス。午前八時半出發、泥濘ノ路ヲ午後四時
九里舗ニ到着宿營ス。

おりこの
折小野 末太郎 日記

歩兵第二十三聯隊第三中隊長（第一大隊長代理） 歩兵大尉

◇ 十二月九日 晴

午前七時出發南京南方一五四高地ニ対スル攻撃第三中隊白石曹長
戦死、左第一線鉄道線路ニ攻撃前進。午後六時。

◇ 十二月十一日

払曉頃ヨリ俄ニ射撃ヲ受ク、終夜敵野砲迫撃砲ノ射撃ヲ受ク。敵ハ
益々頑強ニ抵抗シ砲撃ヲ受クルモ損害ナシ、午後二時二十分所命ノ
地点ニ到達。

駒沢少佐ハ昨十日午後負傷、金田大尉大隊長代理。金田大隊長代
理負傷、午後三時小官大隊長代理トナル。
鉄門西北二軒屋ニ露營（大隊長駒沢少佐ト共ニ）。

◇ 十二月十二日 晴

午前加給品アリ手紙來ル、家内及ヒ良一ヨリ、正午城壁前ニ到
着、昼食、日本酒ヲ呑ム、手紙ヲ読ミツツ城壁ノ落チルヲ見ル。午
後四時三十分第三大隊突入、万歳。午後六時城壁外三〇〇米ニ露

營、敵砲彈ヲ受ク、大隊長代理トシテR本部ニ於イテ祝杯。

◇ 十二月十三日 晴

午前九時中隊ハ軍旗ヲ護衛シ破壊口ヲ登リ城壁上ニ登ル、宮崎新
聞社写真ヲ取ル、軍旗ト共ニ。
城壁上ニ休止、午後二時水西門ニ至ル、午後清涼山砲台ニ登リ夕
宿營ニ就ク久シ振リニ蒲団モアリ熟睡ス、夜間犬ノ遠吠エモナク、
南京城内誠ニ静カナリ。

◇ 十二月十四日 晴

久シ振リニ理髮ス。午前中功績上申ニ着手ス、午後ハ手紙ヲ書イ
タリ、十月十八日頃ノ手紙ヲ落手ス。歩13ト6A〔野砲6聯〕ノ一
大隊及工兵小隊衛生隊1ノ3ハ蕪湖警備ノ為十六日出発ノ予定、他
ニ転宿ノ準備セシモ軍旗中隊ハソノ儘。

◇ 十二月十五日 晴

午前十時ヨリ聯隊本部ト共ニ城内ニ移転、役所跡ニテ相当大家屋ナリ。風呂アリ室モ多数アリ入浴シ更衣ス氣持良シ、行李来リ異常ナシ久シ振リニ寛容ナル。

本日第二回補充員引率田添少佐及川越准尉到着、家庭ヨリカステーラ及手紙持参（明治節記事）。本日木田、布施ノ英靈第二野戦病院ヨリ受領。

◇十二月十六日 晴

終日戦後ノ整理、手紙ヲ認ム、白浜准尉来訪洋酒二本寄贈。

◇十二月十七日 晴 暖

午前十一時出發中山路上ニ整列入城式アリ。中山門カラ第十八師、第百十四師、第六師団ノ順序、午後一時半ヨリ飛行機六十台分列ス。海軍陸戦隊来リ盛大ナリ。

酒、煙草支給セラル、恩賜ノ酒モ共ニ下賜。付近ニ火災アリ夜梱包シ準備シ置ク、聯隊本部前火災ニ赴援隊ヲ出ス。

本日手紙ヲ差出スモ部隊本部ニテ未ダ取扱ヒ不明ナリト、中山通リヲ往復ス、銀行、飯店等大建築アルモ一般ニ旧式ナリ。

戦死者遺族ニ対スル手紙ヲ書ク。

◇十二月十八日 曇

昨夜聯隊本部付近ニ火災アリ風強ク雪降り寒サ甚シク、午前十一時五十分ヨリ飛行場ニ於テ慰靈祭アリ、家庭ニ手紙ヲ出ス、本日野戦郵便局開設、補充員二名到着、甲斐伍長来ル、遺族ニ対スル手紙ヲ書ク。

加給品多数アリ家内及永徳、政徳ニ手紙ヲ出ス。入浴ス。

◇十二月二十五日 晴

午前八時三十分發紫金山行軍、途中天文台ニ対シ各分隊ノ競争ヲ実施十一時着、途中鹿ヲ視ル。頂上ニテ聯隊ノ万歳ヲ唱ヘ聯隊歌ヲ合唱ス、天文台ニテ中食、孫総理ノ陵ヲ見、我日本国ノ有難サト戦勝ノ必要ニツキ訓示シ帰舎、途中キシニ羽アリ南京市繁華街ヲ通ル。彩石鎮ヘノ先發設営帰ル。

中山陵ノ規模壮大ニシテ付近環境ノ雄大ナル天下一品ナリ、然シ神々シキ感ナシ、不良兵ノ為ニ荒ラサレアルハ遺憾ナリ。偽装モ実施尚其途中ニアリ奇篤ト言フベシ。

◇十二月二十六日 晴

午前警備区域内ノ巡察警戒ヲ為ス。又午後戦場掃除。午後ハ行動概要ノ序文緒言ノ認メ方。

宇良宗栄病死ノ為遺骨病院ヨリ受領ス。

千人針ノ裏ヲ取替ヘ洗濯ス。

◇十二月二十七日 晴

部隊行動概要ノ記述。午後一時三十分ヨリ聯隊慰靈祭アリ、部隊長代理、大槻少佐、郡司少佐モ参列。夕方下士官以上ノ会食、盛ンニ飲ム。

◇十二月二十八日 小雨後雪

手紙来ル。本日日高少尉以下七十五名中山陵行軍。島田正則ノ遺

◇十二月十九日 曇

寒氣強シ、遺族ニ対スル手紙及家庭子供ニ対シ手紙ヲ書ク、酒ナト支給アリ。

初年兵上等兵及二年兵上等兵進級上申。

◇十二月二十日 曇

午前九時ヨリ部隊本部ニ於テ戦闘經過ノ話し合イアリ、第四中隊尾形大尉ノ処ニテ昼食ノ御馳走。

午後二時英靈ヲ聯隊本部ニ送付ス、告別式ヲ行フ。彩石鎮ニ向ヒ先發立ツ。

◇十二月二十一日 曇

午前七時三十分遺骨護送出發、上村、小牟礼以下五名。午前九時病院ニ見舞ニ行ク。金丸、長浜、金田大尉等。

午後補充員一名到着、内地ヘ手紙ヲ書ク。

◇十二月二十二日 曇

出發準備ニ忙殺サル。妻町本部、辰大尉来訪。午後六時頃移動中止、第一部隊城内移転、第三中隊部隊復帰ノ予定ニテ準備中。

◇十二月二十三日 小雨

午後設営、第八中隊ト交代。

◇十二月二十四日 後晴

行動概要編纂委員長ヲ命セラレ之ガ準備。

骨ヲ迎フ、午後七時三十分字良及島田ノ二柱ヲ聯隊本部ニ送致ス。

又、田中三郎氏ヨリ小包来ル。手袋、靴下、手拭、煙草、パイナップル、牛肉、福神、ノリ缶詰、塩サケ、味付イカ、コンブ、貝柱、ウニ漬、明治バターナッツ、真綿。

◇十二月二十九日 曇

行動概要編纂。夕、部隊准士官以上ノ会食アリ。

◇十二月三十日 曇後晴

午前ニ編纂終ル。午後遺族ニ手紙ヲ出ス。金丸軍曹来ル。家内及田中三郎氏ヘ返事ヲ出ス。

◇十二月三十一日 曇

午前九時出發中山路ヲ經下関碇泊場行軍休憩ナシ約二里半、途中軍政部八十八師鉄道部司法等ヲ視ル、規模大ナリ、午後三時帰着。城下軍曹以下五名入院患者帰隊。

皇后陛下ヨリ氷砂糖一般ニ下賜セラル。指揮班ノ会食ヲ行フ。

昭和十三年

◇一月一日 晴

午前七時起床入浴指揮班祝賀万歳。午前十時ヨリ聯隊本部西方広場ニ於テ祝賀式次テ本部ニ軍旗ヲ拝シ祝賀会アリ。午後ハ家ニアリテ手紙ヲ認メ休養。

◇一月二日 晴

午前七時三十分先発一小隊出發、日高少尉聯隊設営。
午後支那軍飛行機飛来爆撃投下ス。高射砲射撃スルモ命中セズ。
我戦闘機追撃ス。

◇一月三日 曇、寒氣強シ

午前八時南門出發、安德門、一五四等古戦場ヲ弔イツツ前進、午後三時三十分江寧鎮着宿営。図ト著シク相違ス。

△以下要旨▽

◇一月四日 晴

彩石鎮着。6 A 及 45 i (歩45聯)ノ一ヶ部隊宿営シアリ。

◇一月五日 晴

午後七時蕪湖ニ到着。

折田 護 日記

歩兵第二十三聯隊第二大隊砲小隊長・歩兵少尉

48期

◇十二月十三日 晴

七時出發準備を完了して待ちしが城壁前のクリークに架したる橋梁不良のため渡河進捗せず。大きな舟一隻を探し来たりて舟と橋にて渡りし結果一〇・三〇頃漸く小隊全部の入城を終れり。担し馬匹は通ぜざる為馬四頭と兵三名を残し、これに清水上等兵の骨を拾はしむ。大隊は一・一〇頃市内を掃蕩しつつ清涼山攻撃のため前進す。上海の如き市街戦を惹起すべしと思ひたるも至極平穩にて東門方向に当たり僅かに追撃射撃の如き銃砲音を聞くのみ。

繁華街に入りて暫く休憩昼食の後更に前進を起す。途中二、三の敗残兵を見たるのみ。然るに途中13 i、47 i等の部隊も同一方向に前進するを以て、その目標を聞くにいずれも清涼山より獅子山に向かう由、Dの目標の示し方の不統制なるを非難しつつ前進す。

一五・〇〇頃逐に清涼山に到着す。該地にてR長も来られ、攻撃をやめて現在地付近に宿営するに決す。

市内の徴発は厳禁せられあるも小隊の示されたる宿舎には米三〇俵程もあり、且つ敵兵の飯盒等ありしを以て之等を徴発せり。宿舎

は寺なるも本堂の脇には立派な部屋ありてこれを片付けしに当分駐屯するも別に苦痛を感じざる程の居心地よきところとなれり。

大隊に於ては途中自動車四台を徴発せる為これにB i A 及びM Gの弾薬を積載せるを以て前進は楽なり。

◇十二月十四日 晴

6 Dは南京守備に就くとの情報がある。蓋し一番乗りは47 iにして23 iにして6 Dに間違いなきを以て一応背ける情報なるも城内の掃蕩も未だ充分ならざるに斯かる事の決定する筈なし。而も午前中は明日入城式を行うとの報も伝えられしが午後になりて取り止めとの命令来る。

一二・〇〇頃一、〇〇〇m、二、〇〇〇m南方に移動との事にて設営者を出したるも移動するにいたらず。夜の命令にて明日午前中設営者の指示に従い移動することとなる。

夜は北方並に東北方に当り銃砲声及び盛んなる犬の鳴声を聞き、一時は敵襲か又は戦闘開始かと心配せしが別条なかりき。

正午頃、入院中の押川上等兵帰隊す。なお車両部隊も夕刻西門より入城す。

◇十二月十五日 晴

午前八時設営のため田中伍長以下三名を出す。D命令により全員城内に居ること能はず。依て大隊ではMG、BiA、6は城内とのこと。設営者の準備完了の報告を待って移動すべく考えおろしところ、一一・〇〇頃田中帰り来り、車両のみ即ちMG弾薬小隊、BiA弾薬分隊大隊大行李及び6を城外に出さるる筈なりと告ぐ。命令の不得要領なるを怪しみつつ移動す。約一、五〇〇m程南方なり。家は小さきも整然として心地よし。配宿終らんとする時MGは弾薬小隊も中隊と同一場所に置くと聞き、予も弾薬分隊を小隊と同じ場所に置き橋口大尉と連絡せしに橋口大尉も命令に疑いを抱き大隊副官にこれを質せる結果、城外に出すべき筈の部隊も城内に置いて可なりとの事なり。蓋し城外には火災のため適当な宿营地なきが副官の独断によるものとのことなり。

◇十二月十六日 晴

滞在ともなれば又々諸報告に忙殺せらるべきを思い事務室を設けて早くも陣中日誌の整理に移る。

安否を気づかいし吉野一等兵はついに死亡せる冒病院より通知ありたり、よって高田伍長遺骨受取に行く、然るに第二野戦病院にては収容せる覚えなしとの事にて空しく帰り来るを以て再び大隊本部に問い合わせ、中川衛生隊なることを知り田中伍長之が受領に行き一七・〇〇ころ受領し来れり。

行為のなきよう注意せられたし」と。

◇十二月十八日 曇

夜の寒さ格別なりしが起床してみるに諸所に降雪の吹き溜まりを見る。

一一・〇〇宿舎を出て慰霊祭の行われる飛行場に向う。途中R本部近くにて聯隊全部集合し、軍旗を先頭として前進す。一二・三〇頃飛行場到着、流石に広き飛行場なり。南京攻撃に関係せる諸部隊集合せる為その数夥しきものなり。海軍陸戦隊も参加せり。将校は部隊の最前列なりしも慰霊祭の様子は殆ど視る由なし。一時間程にて式は終了、夫々帰舎す。

夜は一七・〇〇より大隊本部にて将校以上の会食、大隊長必死に探し出した料理人の料理だけに豪勢且美味なり。二二・三〇辞去す。

(以上)

一五・〇〇頃RiAにて各砲隊長集り初年兵の上等兵進級につき協議す。その結果小隊にては花畑、甲斐、黒木(寿)、河野、塩畑を申請することとせり。但し塩畑は5より、その他はRiAより呈出す。

夕食後RiAに遊びに行き二三・三〇小隊に帰る。小隊にて吉野の通夜を行う。衛生隊よりの通報によれば負傷の翌日十三日〇七・三〇死去せる由にて、恐らく手当も受けざりしならんと思へば腸を断たる思いなり。

聞くところによれば本日約一、〇〇〇名の俘虜を得、これをカンチュウ門外にて全部銃殺又は斬殺せる由にて之等は全部地下室にかくれ居たるものなりと、正に驚くのはかなし。(折田注 小生本件知らざるも正式に俘虜として投降したものではない様であり多分隙を見て逃亡する企図をして居た一団と思われる)

◇十二月十七日 晴

南京入城式挙行せらる。

南京攻撃に当りたる各隊夫々所命の人員を以て中山路上に堵列し軍司令官松井石根大将の閲兵を受く。

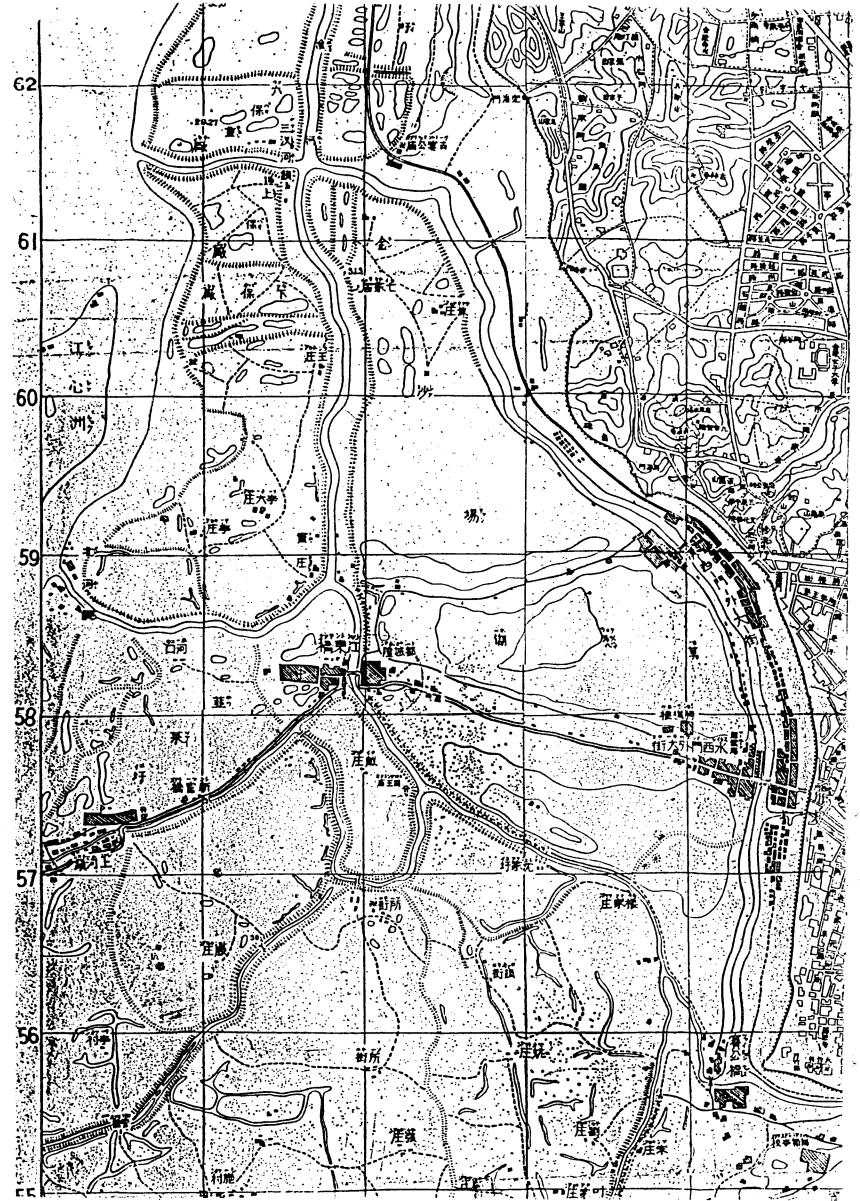
一三・〇〇稍過約六〇機の空軍南京上空を南北に飛翔すれば漸く軍司令官入場、一三・四〇頃予等の正面に鶴の如き瘦軀を馬上に揺られ、幕僚多数を随えて通過せられたり。感激の一時なりき。

夕刻入城祝を小隊にて催せしが、一八・〇〇大隊本部に各中小隊長集合を命ぜらる。席上大隊長より次の注意あり。

「昨日II MGの兵二名市内にて支那婦人二名を強姦せるを柚木中尉発見しR本部にて問題となり目下取調べ中の由、蔽にかかる

前田吉彦少尉日記
〈抜粹〉

歩兵第四十五聯隊第七中隊小隊長・歩兵少尉_{49期}



◇十二月十日

朝来銃砲声の喧々轟々たるを聞く。揚子江近きを思わせる濃霧の中を愈々南京の城壁を指呼の間に望まんと期して前進す。

地上にも屋根にも銀霜植わるを見る。一峠を越えたと坦々として五十米幅位の舗装道路が見えてくる。路上に一兵の影を見ず。低い弾道がビッシブスッと身辺をかすめるは蓋し敵の狙撃弾ならんか。直ちに道の両側に散り一直線に街路樹依いに進む。この付近から先行の十三聯隊の兵等盛に前方約一杆の線で射撃しあるを望むのみ。時々伝令の馳駆する間に漸くそここの家屋の背後に予備隊や衛生隊らしい担架を持った兵隊達の待機するのを見る。我々は特に停止命令を聞いた訳でもないで相変らず進まんとするが自然此の状況下の為もあり歩度遅々となつて到ミストップするに至る。街路樹の梢を散らしてチェッコの掃射が相変らず劇しい音を立てる。

十時頃後方より命令が来た。

聯隊は只今より鉄心橋を経て西善橋に転進し牛島旅団の隷下に復帰する。尚第一大隊は師団予備隊となる筈だ。

行程二里。我等四十五聯隊の他野砲第二大隊野戦重砲兵隊それに独立第七軽装甲車中隊、そう云った兵種が混交してワンサワンサと道路一杯になって移動する。

西善橋と云うのはハッキリした部落がある訳じゃない。雨花台の丘陵より若干家屋の密集しある他は自動車道路に沿って泥壁の農家が点在し左の沼沢地帯にはアッチコッチとそれこそ数へる程の屋根しか見えない、一面の蘆荻そして湿田だった。

丘陵の向うで二十三が銃火を交えているらしくこっちはかすか

にその音が聞える。

道路の中央には繋駕した儘の砲兵がずっと続き斜堤には歩四五が一杯に腰を下ろしている。と突然前方三〇〇米の第三大隊の先頭位置付近に夥しい爆裂煙が立ち上り爆裂音が三十四発と聞える。敵の急襲射撃だ、敵歩兵は城内清涼山付近にありと聞いていた。忽ち騒然となる、慌てて土堤を駆け下り左手の蘆荻の中に飛びこむ。兵等バニックとは此の如きを云うならん。

二〇秒も経たぬ間に第二回目の砲撃が来る。精密な観測が出来ていると見え間髪を入れず正確極り無い第三弾が来る。然も逐次五〇米一〇〇米と射程を伸ばして来る様子だ。

軽装甲車は狭い道路上をアッチへ行ったりコッチに来たりして辛うじて退避している。

その頃最初の落達地点付近の道路傍に僅かの余地を発見したらしい、面を上げられない様な劇しい落達の中を一散に曳き出した砲車、アツと云う間に斜堤を駆け下り土砂を蹴散らして脱駕するや忽ち据砲。射向を調整する分隊長の号令。身軽に砲架にとり付く照準手。忽ちエイヤエイヤと駐鋤を打込む砲手。弾薬車も危げなく定位に据る。忽ち装填する弾薬手。さながら内地の営庭の分隊教練を見る様な素早い動作だった。この間駁兵は脱駕した三駟率いて疾駆して退避するが、続いて第二砲第三砲第四砲迄僅々二〇米の地積に中隊四門共天晴れ陣地を占領する。

その中に右手の丘陵上から中隊長のカン高い号令が掛り、通伝され

「第一照準ヨシ」

「第一撃テッ」

「次ッ」

間もなく諸元を掴んだか目くらむ様な敵砲の乱射の中を沈着機敏四発斉射の効力射が相次いで開始される。

本当に胸のすくような鮮さだ。パニックに陥った我等歩兵もこの砲兵の勇敢沈着な砲撃を目撃しさすがに恥かしさがこみあげて来たと見えどうやら落着きを取り戻す。

どうやら急襲射撃の災厄もすんだ。あの大騒ぎの中で、戦死は直撃による一―二名のみで後若干の弾片傷が出た程度。傍観者の立場にあった我等歩兵はあの咄嗟の間に示した砲兵の沈着な応戦振りにホトホト感心した始末だった。

午後四時頃

「四十五聯隊（第一大隊欠、独立山砲兵配属）は西善橋を経て上河鎮（南京西側水西門西方一里）―下関道を前進し敵の右側背退路を遮断すべし 左翼隊長 牛島少将」の要旨命令が下る。

此の命令に基き再び引返し第三大隊―第二大隊―直轄部隊の順に南京西道揚子江堤防の沼沢地帯に踏みこむ。

上河鎮と云うのは此処から直距離三里位の北方である。南京城西南側から斜の後方に引いた線上に位置する。

守城軍の兵力約六万（総指揮官唐生智大将）。夜になるも南京城戦面悉く近く遠く砲爆声の轟々絶間なきを聞きつつ我等長蛇の列は黙々として長江堤を進むのだった。

◇十二月十一日

夜来幾度も急進停止しつつ上下鎮南方の堤防に達し堤下に休止す。北方からの盛んな流弾（第三大隊と交戦中の敵弾約二、〇〇〇

つたままで外套を縫い通され、「ヤッ何か中ったね」と云い乍ら触って見てヌルヌル血が出ているのに我ながら驚く兵もある。

「流弾が落ちるぞ。ボヤボヤしていて眠ったまま戦死したら申し訳ないぞ」と注意するが何しろ遮蔽物なんかありません。仕方がない。中る奴は運が悪いんだと暢気な事を云う。

十七、八歳のやせた少年兵を引き立てて来る。宮内軍曹が立上って

「どれおいが引導してくるらい。わいだー敵愾心が眠っちゃっておいが斬つみすつで良く目を見開いて居れ」△「どれ俺が引導を渡してやろう。貴様等は敵愾心が眠っているの俺が斬って見せるから良く目を見開いておれ▽と云いながら腰に挟んでいる脇差の鞘を払う。

「宮内 むいねこっすんな」△「宮内 むいこいことをするな▽見かねて思わず注意する。

「ハッ一寸脅かしてやるんです」構わん振をして「ヤッ」と振り冠って細首の後を叩く。可愛想にこの敵兵観念していたらしく打ち当てられた途端グナッとなって失心するのを引起してニヤッと笑って、「さアこれでお前の命は生き返ったぞ」と大威張り。こう云うのを見るとムシクシヤするもんだ。「宮内 もう良い加減に助けやれ。そう云うのは小隊長はすかんぞ」と思い切つて云う。

「もう止めます」不満気を持った綱をはずしてやる。

午後付近に居た旅団無線からニュースが来た。旅団無線三号機はどうした加減かで内地のラジオが入って来るらしい。それによると一、昨十日夜 脇坂部隊が南京光華門を占領南京城の一角に日章旗を打ち立てた。

米）の下で朝食炊事す。銀霜地に植え遙か東方に中り銃砲声盛んなり。堤防の向う側に駆け下り脱走せんとすれば折から揚子江上（此処より約三杆）を黒煙を吐きつつ汽船約十隻の通航しつつあるを発見す。尻を捲った儘で双眼鏡を覗く。どの船上も灰色の軍服を満載しているその船上には何れもアメリカ、英国、仏蘭西等諸外国の旗が翻っている。即ち外国船を借用せるか或は中国側のものが偽装したるものか。おそらく窮地に陥った敵が脱出を図るものの様である。守城指揮官も脱出を図るのか或は第三国家族と共に国民政府の残留幹部家族らを搭載したものか。蓋し必死の脱出行たることには相違ない。

今此の敵を無難作に取り逃す心算りなのかこの機会を放棄するものなのか等と左顧右盼するが、肝腎の我等が退路遮断の任を持つに不拘これを妨害すべき砲兵を有せざるが遺憾千万なり。（山砲はあるが携行弾薬思うに任せざるを如何せん）。遙かに東方に霞む紫金山（この山頂を攻めるは第十六師団である）は砲煙に包まれあり。とこの上空に水上機一機が旋回しているのを見付けた。即ち機上観測中なのかこの付近の空中に相次いで炸裂する夥しい白煙は敵の高射砲弾帯ならんか。この弾幕を縫って船団を監視すると見えた。間もなく紫金山麓付近から射ち出したるか遠距離（約二〇杆）の長射程砲（恐らく十五加）、遠雷の様な砲声が虚空をかすめて丁度船団間近の河岸に第一発を落達せしめた。惜哉届かない。辛じて堤上の樹林からバツと飛び散る鳥鴉の群を驚ろかせるのみ。

そんな風景を野糞しながら見物の後堤防を越える。この辺に枕藉する兵の間にさかんに流弾が落達するもの陰呑。もっとも弾速が落ちてゐるせいか飯盒にでも中ったのかボクッと異様な音を出す。眠

二、南京陥落の捷報に内地の至る処で祝賀の万歳が湧き起り、松山市では昨夜提灯行列が行なわれた由。

と云うニュースなんて之には驚いた。

このニュースを聞いたこの時現時点で南京の守備軍は依然頑強に抵抗を続け上空中には高射砲弾幕が絶え間なく、城壁付近亦砲煙に蔽われ銃砲声の間断なきを聞くと云うのは一体どうした訳なのか？ 一体陥落なんて誰れが云い出したデマなんだろう。脇坂部隊と云うのは何処の部隊だろう。光華門なら九師団だろうな。それにしても光華門のどの一角を占ったか知らないが城内に進入したような形跡はどこにも見えない。

夜に入って第三大隊は今夜九時を期して上河鎮を夜襲するとの事でこりや手強いぞと半ば危ぶみながらその成功を期待したが一しきり夥しい銃声と爆音をきいたのみ。間もなく夜襲頓挫の報を聞く。既述したように上河鎮の突入には唯一本の土堤道があるばかりで周囲は沼沢地帯。上河鎮部落そのものは堅固な囲壁で囲まれているのだ。

この一本道を突進すれば屍の山を積んだだけで挫折する以外方向はなかる。二人の小隊長（益田少尉、今林少尉）は率先陣頭に立って障碍物（屋根型鉄条網）の線で壮烈な戦死を遂げたのだと云う。無謀と云へばそれまで。この究極の立場に立たされた決行であったらう。二人の小隊長を死なせた中隊長の苦衷、斯うなった以上は自らも死地に投ずる気迫、中隊全部を投しても抜くの決意は果してどうであつたらう。

◇十二月十二日

昭和十二年十二月十二日、十二の重なった此の日は誰云うとなく「南京陥落」の日だと文句なしに予測されていたものだ。この十二日の日が明けたが依然戦況の進展は見えない。予期した通り前田少尉の頭上に大隊長から命令が来た。

命令

- 一、聯隊は昨夜上河鎮に対し夜襲を行なったが敵の抵抗は依然頑強である為まだ之を奪取するに至っていない。
- 二、二十三聯隊は南京城西面角攻撃の為準備中であり一部は南京城壁に沿って水西門（この東方一里）に前進しつつあり。
- 三、よって聯隊は本日上海鎮東方の地区より下関方向に対して攻撃し戦果拡張を企図しあり。
- 四、前田少尉は部下小隊を以て上河鎮東側に通ずる敵情地形を搜索し為し得れば二十三聯隊肥後中隊と連絡すべし。

尚貴官の進路開拓に伴い大隊は逐次後方を追尾躍進する予定。

十二月十二日十時 大隊長 成友少佐

上河鎮の強攻は止むを得ないとすれば甚大な損害を覚悟せにやなるまい。それよりはどうしても上河鎮東側水西門との間隙に突入して下関へ突入の道を拓くに如かず。

将士の決意面上に溢るるを見る。

徳永上等兵の第二分隊を路上斥候として堤防を下り楊柳の部落から畦道伝いに東に向う。一面の水田、クリクの間点々と如何にも南京近郊の情趣溢るる農家が続く。不安気な土民の姿がチロロと隠顯する。

慎重に要領しつつ一本縦隊で約二軒、相当な部落に出る。これは

上河鎮と相對する位置だ。この部落は南京へ通ずるクリクの堤防より低い所にある。そのクリク（運河）の堤防にとりついた。上河鎮を眼鏡で觀察する、田壁の向うに敵の気配がするがシーンと静まり反っている。暫く休憩する。やがて十二時になる。そこへ中隊長から伝令が来た。

命令

旅団無線が受信した旅団命令の写しだ。

旅団は十六時を期し歩兵第二十三聯隊を以て南京城西南角を奪取せんとす

古来勇武を以て誇る薩隅日三州健児の意気を示すは正に此の時にあり

各員勇戦奮闘先頭第一に南京城頭に日章旗を翻すべし
チェスト 行け「決意断行の掛け声」

十二月十二日十時 旅団長 牛島少将

烈々たる戦意昂揚の訓示を含めた異例の攻撃命令である。

再び堤防にかくれて東進する。一進一止三〇分、小隊の先頭で時々双眼鏡をかざし乍ら堤防一帯北方の水田を風潰しに見て行く。と突然前方から低く腰をかがめた伝令が声を出さず右手を上げて「停止」の記号をする。

早速駆けよる。

「すぐこの先に敵が居ます 堤防の向う側で休憩しています 勿論まだ此方とは気がついていません」息をはずましながら小語す。緊張で真蒼になっている。

「どの辺だ」「三〇米位のところですよ」 そーッと眼鏡をかざ

警戒の為第五分隊をのこして行進を起す。それから五〇〇米行く。

「小隊長殿この道路の向う端に敵がいます」路上斥候から通伝が伝わって来る。立ち上って双眼鏡を覗く。五〇〇一六〇〇米あるか、三名位の敵がこちらを向いて伏せている。

一本の堤防、堤防の向うにどうもまた堤防が重なっているらしい、右手は一面の水田（湿田）だ。手前三〇〇米位のところに一軒家がある他は遮るものもない。

こりやアまずい。この一本道は敵の掃射地帯だ。エーイ思い切って射ってみるか。

第二分隊の軽機を堤防上に据えて、「目標前方の敵五〇〇射てッ。軽快な射撃音、敵兵の姿は消えた。来るぞと思う間もなくババババと疾風のようなブシューーンビシャーン、ビビーンと路上に跳ね飛ぶ跳弾、中々の照準だ。

「前方の一軒家に遮蔽する、直ぐ右に飛び込めーッ」と怒鳴り道路の右の一間幅の小流を跳び越え畦道伝いに走る。五〇名の部下が一斉に右に飛び散って後に続く。絶間なく迸る様な弾道をかいくぐってやっと一五〇米程の百姓家に辿りつく。全員無事だ。

三名の監視哨を出して後は皆遮蔽させる。敵は此の一軒家目掛けて例の突角から軽機数挺で無闇矢鱈と集中射を反覆している様だ。

「小隊長殿、擲弾筒を打ちこみましよう」

第四分隊長久木野上等兵が申し出る

「ヨシッ、そんなやれ」

久木野分隊長は第一筒手の後に膝姿で号令をかけている。小隊長は久木野の後方数歩の所で立ったまま見ている。小隊全員が二名の

射手の動作に注目している。

筒手が引鉄の第一弾を引いた。「ぐわーん」と轟音、ピッカーと光った閃光。そして物凄く黒煙が目の前を遮った。筒口から二米もない所に張ってあった針金に弾筒の瞬発信管がふれたんだ、針金は45度の射角の上にある安全を確認していたが擲弾筒は発射の間筒道が昂起する癖がある。

射手はのけぞっている。弾薬手は打伏している。久木野上等兵は右肩を押えて後にゆっくりと倒れようとしている。胸から真赤な血が噴き出している。突嗟に後からかかえて、「おい、いっしょにせう。バラバラッ」と周囲に兵隊達が駆けつける。一軒家の後に三人の負傷者をひきつりこんで治療にかかる。

「衛生兵」と呼ぶが衛生兵はついて来ない。

「伝令、住吉と宇部一緒に行け」

更に振返って、「第二銃いて撃てッ」と叱咤する。弾着は不良だ、騒然となったが慌てちゃいかん。その中一軒家内の宮内分隊が壁にかけた銃眼が完成して漸く気持が落付く。

敵弾の合間を料って入口から飛び込む。うす暗い室内に何物かがうずくまっている。近寄って見ると何と半盲の老婆が念仏でも誦しているのかブツブツと小声で何かつぶやいている。「オー老太太」いやー婆さんか、敵サン真逆かこの同胞を撃ち殺す心算じゃないだろうからもう暫くそこで我慢しとてくれと冗談を云い乍ら工事を見る。

名射手の永留上等兵が一尺位の銃眼から沈着な射撃姿勢で三発発射を反覆しているのに安心する。

その後方の部落をぬって二―三名の人影が走ってくるのが見える。

がようやく実を結ぶことになった。

所定の時刻射撃開始、直ぐ後方二〇〇米位の所から速射砲が轟然として撃ち出した。

機関銃の曳光弾が白熱の尾をひいて不気味に敵の突角にすいこまれる。

第一回の集中射撃が終る直前敵陣の上空に赤い三発の流星（信号弾）が上った。

我射撃が止むと敵陣は急に静かになった、沈黙したか？ 退却か？

其処へ泥だらけの中隊長が伝令を連れて右からやって来た。

「小隊長、敵情は如何だ？」

「中隊長殿どうされましたか？」

「何しろ猛烈に弾を冠ったね。畦道に伏した儘釘づけになっていんだ」と息をはずませている。

「あそこに落ちる弾なら上河鎮方向からの首撃でしよう。正面の敵は退りましたよ。信号弾が上りましたよ」。

「そうか、信号弾には気がつかなかった」。

「あれはたしかに退却の信号です。もう一度射ちこませ」。

「ヨシッそれじゃ念の為もう一度撃つてくれ、最後は擲弾筒を射ちこんでくれ給え」

「承知しました」。

その通りに射撃を終える。どうやら中隊長は突角に進出した模様だ。

午後九時頃、大隊が前列側面縦隊でやってくる。小隊の負傷者は六名之の運搬のため小隊長以下大童になっている処にまたもや中隊長

る。

屋准尉と衛生兵（福留、海老原）、田圃の中を走って来たので泥だらけだ。

済南、満洲事変歴戦の老練な准尉が来てくれたので有難い。二人の衛生兵がテキパキと消毒しガーゼをあてがいカンフルを打つ。やがてこれまた泥だらけの黒木軍医が二人の伝令と共に緊張した面持ちで息をはずませ乍ら駆けつけた。

「やア、前田サン御苦労様でござん」と挨拶もそこそこに負傷者を見にくる。

午後三時から四時と時が移る。敵の射撃は相変わらず猛烈で、北方堤防の向うの上河鎮方向から首射ちの流弾がビュンビュンと落ちて来る。南京城西南角に対する砲声も亦すさまじい。薄暗くなりかかった五時頃中隊長と両小隊長が一緒にやって来た。

「中隊長は夜に入ったら突撃する。速射砲であの堤防から射たせる、如何だ」

「ハイ、それ以外に術はない様です」

「おいが見つこいじやその時刻になるときと退がるよつでよ。君は中隊長の軽機六銃全部を指揮して八時から五分宛五分間おいて二回掩護射撃だ。もうすぐ薄暮だからそれ迄に射撃位置を決めておけ」

第三機関銃中隊の有村小隊（上陸以来第二大隊に配属された唯一の機関銃小隊、第二機関銃中隊主力はまだ到着していない）の重機二挺が来て右の一軒家から射ち始めた。

間もなく中隊主力が到着する。もう薄暮だ。速射砲（昨日ようやく到着）の観測手が砲隊鏡を土堤の上に据える。四時間の隠忍持久

命令。

「前田少尉は直ちに部下半部を指揮して中隊長の許に来れ」

宮内軍曹の指揮で兩分隊の軽機狙撃兵で一コ分隊を作る、もう一コ分隊は井上伍長の第五分隊、計25名を率いて駆けつける。残部は植木伍長に依頼して負傷者前送を命ずる。途中あの憎ったらしい敵の銃座に立寄る。

この銃座の周囲一面は散乱している莠莠の山に呆れる。敵の位置は堤防の突端、退るにも退れなかった筈だ。

このクリークを渡ったところに中隊長は集結していた。

「すぐ大隊長殿のところへ行け」また大隊本部を探す。黒々と人影が集まっている堤防の上、白い標旗が立っている。

大隊長の声が闇の中で聞える。「前田少尉、御苦労だが君は江東門の無電台を占領して呉れ給え。二十三はどうやら西南角から城内に入ったらしい、斯うなったら敵は総崩れだから戦意はあるまい、あの無電台は師団の占領目標として聯隊に割り当てられてあるんだそうだ。要領して行けよ」時に午後十時である。

江東門無電台と云うのは江東門の部落の西はすれ約一杆のところにある。正式の名称は南京中央広播電台と云うので日本式に云うならば南京中央放送局江東門放送所と云うところだろう。

距離は一杆そこそこだが先程迄頑強に抵抗していた上河鎮や江東門の敵がこの辺に尚ひそんでいる懸念は多分にある。それよりも城内に充満していた守兵六万が逃げ場を失なって南方に逸脱を図っているかも知れない。

「さあやるぞ」ぐっと腹に力をこめる。

「つけ剣、よいか、分隊長先頭、一分隊は右、五分隊は左、俺の

両側からついて来い、目標は南京無電台、距離は一軒、すぐそこだ、離れないように」。

江東門の街は死の街だ。両側の家はひっそりと戸締りして灯火一つもない。

舗道をふむ足音がコツコツと反響して気味が悪い、道幅は二〇米位ある。路上至る処両側の電柱が、伐り倒されて電線が蜘蛛の糸の様にまつわりつく、暫く行くと町並が途絶えた。闇空をすかして見るがアンテナは見えない、周囲暗黒、全く静寂そのものだ。銃声一つないんだから反って無気味だ。どうせぶつかる迄の事だ、ぐんぐん歩度を伸ばす、右手に大きな塀が見えて来た。相当な広さだ、兵営かも知れぬ。要領しながら暫く行くと門がある、たしかに兵営らしいと懐中電灯でしらべると「中央工兵学校」の看板がかかっている。一人が緊張した声で「無電台が見えます、そこです」と云う。成程闇空に巨大な無電柱が見える、よしこの隣りの一廓が無電台だ。

この工兵学校の構内から塀を破って入ろう。敵はおらんぞ、広い構内に空屋敷が並んでいる。左の土堤に鉄条網が張ってある。さあ入るぞ、広い構内だ、中央に庁舎らしいものがある。

暗い庭から呼ぶ声がある、中隊からの伝令植田上等兵二名が師団から樹てろと渡された大日章旗を持って来たのだと云う。

中隊長命令

一、聯隊は明朝主力を以って江東門―下関の一部をもって揚子江左岸の堤防を下関に向けて追撃する。

二、前田小隊は江東門無電台を占領確保せよ。明朝以後の行動に就いては別に指示は無いから戦況に応じて臨機の独立行動をとれ。

十二月十二日二三時 於 江東門 中隊長

のが初めて耳に入ってきたヒューン、パン、パン、ブスッ。成程さつきから他人事のように聞いているんだが今や周囲一胚騒然たる銃声だ。

「オイ監視兵、敵は何処に居るんだッ」と怒鳴るが聞えるどころか二人の監視兵が窓から銃口を出して血眼になって撃っている最中だ。階段を駆け上る。この兵舎は無電台の西北隅にある。窓から見ると直ぐ土塀の外は道路が西へ走っている。その向うは蘆荻の湿地だ。

江東門の北端と思われる（一、〇〇〇米）付近に夥しい銃声がしている。敵のチェッコの乱射乱撃の合間に友軍の重機らしい連続点射や雄射が物凄く響く、こりや大変な劇戦だ。

「オイ敵は何処に居るんだッ」と夢中になっている監視兵の肩を叩く。

「アッ、小隊長どん、それぞれこの田圃をどんどん逃げます」と指差す。成程灰色の軍服が一人二人とチョロチョロ走るのが見える。こりや兎狩り見たいだから夢中になる筈だ。

「宮内は何方へ行ったんだ」

「ハッ、この道路をいつき先ずい出ッでち 云うセッ（一寸先迄出るからと云って）軽機を連れて行かれましたとじやんが（です）が」

「オイお前等はもう撃つの止め」。

「ハッ、判りました」と残念そうに銃を卸す。

ポンポンしながら駆け下りて裏門迄出る。

裏門の三〇米の農家から第五分隊の兵二人が顔を出してニコッリ笑って「小隊長どん、豚を見つけたと……」と呑気そうな声で

第五分隊の兵が無電柱に日章旗を樹てた。食うものはない。セメントの床で火を焚いてゴロ寝する。南京陥落は明日に持ち越しになるだろうと思いつながら何時しか眠る。

江東門無電台

昭和十二年十二月十三日

ぐっすり寝たらしい。あまりの寒さに思わず眼が覚めた。日は上っているらしいが硝子の外は一面の真白い霧だ誰れも居ない。ハーッと手を呵しながら（息を吹きかける）室外に出て立ち小便をするゾクッと寒い、真白な霜だ。

「おい誰れか居るか？ 皆何処に行ったんだ」と見廻す、太沽補充の第五分隊の兵が唯一人外套にくるまって飯を焚いているだけだ。

「ハッ、宮内軍曹どんが皆連れて出て行きましたッ」

「エー、どけー（何処へ）行ったか」

「ハッ、敵が沢山居るんで射撃すると云って出られましたが」

「なーんちよ（何だって）誰が連れ（出ろと）云うたか？」と思わず大きな声を出す。相手はボカンとした顔で慌てて立ち上る。

「何人残っているんだ」

「此処には私だけあります」不満気にボツンと答える。

「何だッ、監視兵はおらんかッ」

「監視兵はあそこの二階の上から射っています」

「アーン？」 二の句がつけないと云うのはこの事だ、ビックリの連続だ。

慌てて、軍刀をさげて飛び出す。さかんな銃声や爆音がしている

得々然。

この辺を中国兵が死物狂いで逃げ廻っていると云うのに豚掴めもへチマもあるもんかと怒鳴りつけたいのを我慢して、オイ一人は銃を持ってついて来い、もう一人のお前はこの門の前で警戒しとれ、敵がこけな（此々には）日本軍がちっとしか居らんちことが判ればひとたま（ひとたま）も無かぞッ」と叱言を云う。昨夜無電柱に上ったのは此の兵隊だなど此の時初めて気がついた。

振り返って空を見上げると無電柱の真中より上のとこに翻転とひるがえっているのは師団長の受賜の日の丸だ。

「オイ判ったお前の上げた日の丸のおかげよ。あの日の丸が上っているもんで敵が寄りつかんとよ」と相恰を崩す前田少尉。

「ハッ、そうでありますか」と気の無さそうな返事をして「ハラ

あしけな（あすこに）中国兵が」と姿勢を低くするでもなく銃をかまえるから「ホラ、もうそげなことはうっちゃよけ（放つとけ）」と云い捨てて一人を連れて宮内の行った方向に走る。

時計を見るのと九時過ぎだ。江東門の銃声は段々と北方に移って行く様子。西の江岸の銃声も下火になった様だ。やれやれどうやら兎狩りも終るらしいぞ。それにしても此の銃声の中で太平楽を極めこんで眠りつけていた我身の不覚が口惜しい。

道路上を西行すること五〇〇米、田圃の向うに曲りくねった駐道の先一、〇〇〇米位のところに並木が続いて今し十四―十五名が三々伍々と走り帰ってくるのが見える。

一番先頭は宮内軍曹らしい、真赤な顔でフーフー走っている。張本人はこの男だと思いつつわざと顔をしかめて待っている振りをする。

「小隊長殿ッ申し訳ありません」どうせ叱られると云う覚悟の面だ。先ずことわって仕舞う算段らしい。

「ハイッすみません、小隊長殿」と拳手しながら「松木を負傷させました」、「悪う御座いました」と目をつぶる。

「何じゃ、松木が？」と思わず大きな声になる。以下宮内軍曹の消気ながらの報告によると次のようだ。

八時前銃声で目を覚ました。小隊長殿は良く眠っていられるのでその儘にして外に出ると物凄く銃声なので驚いた。段々霧がはれて来てその中に北方の田圃の中を中国が走るのが判ってとりあえず撃たろと思つて門を出た。余り逃げる人勢が多いのでその儘皆を連れて追い駆けた。途中は一発も撃たず堤防迄走り続け（約二、〇〇〇米、西側を敵も走って行きました）て堤防にとりついて見ると目の前の、五〇米位の揚子江の支流の上（夾江）を筏を浮べて来るのに驚いた。一つの筏には、さう百名でしかない位一杯のついでいます。これが次から次へと流れてくるのでこの敵をみすみす逃す訳には行かないと思つて全員で射ちました。何しろ目の下をゆるゆる流れてるんですから一発必中、軽機の連続点射は勿体ないので三発点射をくりかえす。

五隻位でとうとう弾がなくなつて仕舞う。

まだ後から後から来るんですが処置なしです。その中こっちの岸に上つて応戦し出したもんで仕方なく引き揚げを命じました、松木はその時右の股をやられたんです。

「松木はどうした」、「井上伍長が二人で両側から肩を組んで抱えて来ます」。

この頃揚子江岸の銃声が止んで江東門の北方に思い出した様な重

機の連続音が聞えるだけになった。

◇十二月十四日

今晩早く遙か下関方向に一時銃声を聞いただけでもう戦争は終わらした様子である。

霧がはれたので屋上に上つてツァイスを覗くと下関の屋根の向うに長江が見えその江上に軍艦旗を翻した第三艦隊の旗艦「出雲」以下の堂々たる雄姿が望まれる。

「南京陥落」ああ何時の日にと夢見たこの四文字は遂に成つたのである。然しそう云つた現実は何か夢見たいでピンとこない。聯隊は昨日から夜半にかけてどんなことだったのか、我方の損害は？。

午後第三大隊が下関から帰つて来て江東門一帯に宿営することとなり無電台もその大隊本部に明け渡すこととなった。

第二大隊は上河鎮だそう。十一日來十二日にかけて第三大隊が血をもつて占つた上河鎮はクリーク沿いの田舎町だった（江東門は之に比べると立派な街だ）。

間もなく中隊が帰つて来た。早速中隊長に申告し昨日の状況を伺う。

「十三日の朝まだ闇かった中に出発、ところが後の方でドンドンパチパチ始まったね。前川大尉負傷岩間少尉戦死。ホラ陸海空軍監獄ちゆうことがあったろうが、あん辺で水西門の方から横腹を突かれたせ（突かれて）肉弾戦じゃつたらしい。おいどんないけんもなかったよ（俺は何ともなかったよ。午後は下関の手前のクリークで撃ち合いじゃった。ウーザンばいやったよ（とても多かったよ）。クリークが敵の死体で一杯になった位よ、さあ何百人じゃろかい数

へがないもんかい（数えることが出来るもんか）。今朝六中隊が先頭

で愈々下関だとハリキッて行つたら敵の奴呆気なく白旗をかかげて降参さ。何しろ此方は三日も四日も顔は洗らっちゃ居らんし鬚ボーボー汚れて見になるもんや（見られたもんじゃやないよ）。大隊長を先頭で山男の行列が行つたところが道の両側は中国兵がいや居るの何のつてまるで黒山のように集つてるもんで、通訳に山本大尉が『銃を捨てろ』と云わせると忽ち銃や剣の山が出来有様さ、馬に乗っているうちの大隊長が余程偉く見えたんだろやね中国兵が一斉に拍手したよ。あの心理はどう云うだろうね、どうやら戦いが済んだ、これで殺される心配はないと云うところじゃろかい。パチパチと拍手するんでまるで狐に化かされたみたいさ。あれにやひつたまがつた（吃驚りした）。さア、どしこ（どれだけ）居つたろかい、何千じゃろかい何万じゃろかい。

山本大尉が演説したとよ（したんだって）。

『君達は良く戦つた然しもう戦は終つたんだ御互い仲良くせにやいかん。蔣介石總統は膺懲せにやいかんが君達忠勇な将兵には怨念はないのだ。宜敷く武器を捨て鋤をとり新中国新平和の建設に働き給え。懐しい肉親や同胞郷里の人達の待つ故郷に帰り平和をとりもどすようにしまえ。サラバ』と云う訳さ。

誠に寛大極らない温情だらな、ソーヨ揚子江を渡つて帰れち云うたとよ（帰れと云つたさうだ）。そしたら隊長がね、わたる舟をいけんしてくるつとかち（どうしてくれるのか）云うからよ、これには困つたね、大笑いさ。さあんな大変な捕虜を一体どうする心算りじやろかい。彼等にしてみれば捕虜になった方が一番よ。生命は保証されるし飯は食わせつくるつし（食わせてもらえろし）こげ

な良か話があるもんか。

城内の片付け使役位にはもつて来いだろうが保安隊に改編させても良いだろうがこいは何時の事じゃろかい。実際のところ食わす丈で大変なこつじゃね。まそんなことでこの膨大な捕虜をそっくりそのままとから来た九師団（十六師団？）に渡してさつさと帰つて来た。とこうさ」。

その夜は久し振りに中隊長を囲んで松本、野元少尉へ屋准尉と焼酎の盃をあげて南京陥落の祝盃をあげた。

◇十二年十二月十五日

南京は十四日を以て完全に陥落した。

依つて今日は歩兵第三十六旅団より一コ大隊を師団司令部の護衛を兼ねて城内に入らしむるとの事で我第二大隊がその使命を受けることとなった。朝十時頃江東門出発、出発前野戦病院に至り十二日來の負傷者を見舞つた。

野戦病院と云うけれど特別な施設を利用した訳ではない。江東門路傍の商家の土間に辛うじてアンペラを敷き毛布若干を与えられて枕藉するに過ぎない。

（注）江東門に包帯所を開設していたのは第六師団衛生隊の三分の一で、野戦病院は水西門にあった。

多数の入院患者を引受けた野戦病院だ。やむを得ないけれども戦友の手によつて何とかして看護の手当を尽し得ないのは残念であった。「早く癒つて混つてこいよ」と慰め、前田少尉は煙草と小遣い銭の若干をおくつたに過ぎなかった。

江東門の中央に「南京陸海空軍監獄」と云う敵しい建物がある。十

三日の朝濃霧の中で突如混戦乱闘を惹起した処である。殊に第三步兵砲小隊長の岩間少尉はこの渦中に突入し壮烈な戦死を遂げたと言いた。同氏は少候十五期前田少尉より一年ばかり前の温厚沈着な人だった、追慕せざるを得ない。

江東門から水西門（城門）に向い約二軒石畳の上を踏んで行く途中この舗石の各所に凄惨な碧血の溜りが散見された。

不思議に思いつつ歩いたのだが後日聞いたところによると十四日午後第三大隊の捕虜一〇〇名を護送して水西門に辿りついた折内地から到着した第二回補充兵（副島准尉瀧澤准尉等が引率し、大体大正十一年から昭和四年前佐道の後備兵即ち三十七八歳から二十八九歳の兵）が偶々居合せ好都合と許り護送の任を彼等に委ねたのだと云う。やっぱりこの辺がまづかったのだね、何しろ内地から来たばかりでいきなりこの様な戦場の苛烈にさらされたため些ならず逆上気味の補充兵にこの様な任務をあてがった訳だ。

原因はほんの僅かなことだったに違いない、道が狭いので両側を剣付鉄砲で同行していた日本兵が押されて水溜りに落ちるか滑るかしたらしい。腹立ちまぎれに怒鳴るか叩くかした事に決まっていた、恐れた捕虜がドッと片っ方に寄る。またもやそこに居た警戒兵を跳ね飛ばす。兵は兇器なりと云う訳だ、ビクビクしている上に何しろ剣付鉄砲持っているんで「こん畜生」と叩くかこれ又突くかしたのだね。パニック（恐慌）が起って捕虜は逃げ出す。「こりゃいかん」発砲する「捕虜は逃すな」「逃ぐるのは殺せ」と云う事になったに違いない。僅かの誤解で大惨事を惹起したのだと云う。

第三大隊長小原少佐は激怒したがもはや後のまつり、折角投降した丸腰の捕虜の頭上加えた暴行は何とも弁解出来ない、ことだっ

隊、野戦病院馬廐兵器部等が陣取りまるで「旗本で御座る」と云った格好で吾々汚れ武者を見下ろしている。第一線の歩兵達が奮闘したお蔭なのに彼等後方司令部の面々がまるでその戦功を代表している見たいに威張っているのは笑止である。

やっと師団の背後の露路に配宿される。やっと宿舎に入った。平家建ながら堂々とした大邸宅である。室数も幾十と数え切れない位なのでゆっくりと余裕のある様に各分隊に配分し早速寝具家具を徴発して寝床を作る。如何やらこの附近には在留邦人の留守宅でもあったらしい畳の部屋があった。

西当番が「小隊長どん、お風呂に這入って下さい」と云って来る。大瓶に熱いお湯をくんで之に勝る御馳走はないと思った。

◇十二月十六日

今日は久しぶりの休養日だ、新戦場敵都南京の内外を見物し序に上海派遣軍や十六師団の宿舎に同期生の一人でも良いから会って積る話に興じようか等と思っていたら何と又大隊本部から呼び出しがあった。

「前田少尉は師団の使役兵（但し城内にあるのは我が第二大隊丈なので各中隊より25名）一〇〇名の長として十時迄に国民政府に出頭し軍副官の区署を受けろ」と云う師団司令部からの高飛車の命令だ。

「少尉殿は第六師団の使役長です、他の師団九師団十六師団三師団等よりも夫々一〇〇名来るそうですから宜敷く御願います」。

若いくせにえらそうに立っている口髭の下士官の口授にむしゃくしゃする。「何云ってやがんだ……」といきまいたとこでどうにも

た。

かかること即ち皇軍の面目を失墜する失態と云わざるを得ない。

この惨状を隠蔽する為彼等補充兵は終夜使役されて今朝になって漸く埋葬を終ったる由。非常と云うか、かかる極限的狀態においてもすれば人間の常識では考えられない様な非道が行われると云う実例である。

水西門は驚くべき堅固なもので城壁の厚さは下底20米位、高さは二〇米に達する壮大なものだった。

その門外礮堡のあたり灰色軍服の遺屍数える邊はない位、墨々山をなすと云う形容は正に斯くの如きを云うのであろうか。

この惨状は二十三聯隊（城壁を西南角から突進した）の手によってなされたに違いない。「負けるんじゃない」とは兵等相顧みて私語するを聞くによっても知ることが出来よう。愈々城内をくぐって南京に入る。

舗道の幅20米位、両側は二層三層の洋風店舗櫛比して宏壮極りない。

この舗道の側に防空壕が堀られ掩体が築かれ敵の遺屍、兵器車輛（新式の速射砲もあった）等が取片付けもしてないで散乱している。断たれた電線が垂れ下ってその上にまといつく。尚、爆撃による大きな破口も何カ処か目撃した。我等はまるで文化果つる荒原の砂漠からこの華麗の大都に立返ったアラビアの漂泊人（お上りさん）みたいなものだ。鬚ぼうぼう垢に汚れた衣袴を繕うことも出来ない山男達の傍を爆音をあげてサイドカーが走る。

師団司令部は市内中央の南のロータリーに陣取る。銀行か銀樓（装飾店）かホテル飯店 そう云った宏壮美麗の宿舎の夫々に通信

ならない。時計を見れば早九時を廻っているじゃないか。大隊本部に伝言して各中隊の使役兵は直ちに追及するよう依頼しとりあえず中隊の兵隊達（各小隊八名）を引率して大急ぎで出発する。城内じやあるが地図上で見ると国民政府は南京中央の中山門寄り、我等の居場所からは大体六軒もある。「オーイ、歩度六軒、遅れたら師団の名誉にかかわるぞ急げよ」と大股で歩き出す。

中山路は幅五〇米位の大きな舗装路で一路坦々真東に向って約一里半位は悠にある大通りである。国民政府は中山路の北官庁街の真只中にある。汗びっしょりになって十時過ぎやつの事で正門に到着する。人員を点検すると「コ中隊（25名）分がまだ来ていない。仕方がないがこの儘報告する。」

「第六師団の使役兵只今到着しました。但し25名まだ遅れて居ます」。髭の濃い中支方面軍の副官松村中佐なる仁に報告する。

「何だ六師団、遅いじゃないか」。この野郎權威を笠にきて傲慢だなどと思ったが抗弁したところで仕方がない。

「何名ですか」「眼鏡をかけた無髭の主計大尉が聞く。「命令を受けたのが九時過ぎでそれから集合を命じましたので25名がまだ参着しておりませんがその分を含めて一〇〇名であります」。

「他師団はお前ところみたいで城内に居るのと違って遠いところから皆来ていてもう仕事を始めているぞ。六師団の割当は其の大礼堂とあの行政委員長（孔祥熙）公館、これは明日の入城式の四軍司令官会同の晴れの場所だ、これ等の一帯を片付けてくれ、六師団に掃除させる心算りで待っていたんだからな」とこれが如何にも光榮な仕事を割当てであるぞといった勿体ぶった口振りだ。

「畜生、そんなことは師団長なら喜ぶだろうが俺達には無関係だ

ぞ」と云いたいのを抑えて「わかりましたッ」と一気に打切つて廻れ右をする。掃除せよと云われても道具は何もありやしない。「大礼堂」と云うのは一、〇〇〇人位はゆっくり入れる建物だった。前田少尉は兵隊達を監督しながらその辺を見物しているところに松村中佐がやって来た、また威張るだろうなと覚悟していたら、

「貴官は何聯隊か？」

「ハッ、四十五であります」

「うんカゴンマか、そんなら梅北がいるだろう」

「ハッ、梅北大尉殿は第一中隊長であります」

「どうしたヤッちるか」

「さうか、元氣なら良いね……」。

あまり冗舌じゃないが好意のある話し振りなので安心した。

その中お昼になる、大急ぎで来たんだから勿論昼食の準備もしては来とらぬ、よし今度は松村副官に世話させてやろうと思っていると先刻の主計大尉が通りかかった。

「主計殿、我等は昼食を持って来ておりませんから宜敷くお願いします」

「エーッ、何だい、そりゃいかな昼食携行と指示された筈だが」。

「そんなことは聞いていませんよ」いきなり使役だと云つて来たんだから用意する筈ないんだ、と今度は強い。

「フーム、そりゃ困ったな、然しさう云つても何とかせにゃきや

……一〇〇名分ですな」と独り言の後「私は軍司令部の車大尉です。私も鹿児島です」と最後は碎けた調子でニコリ答礼して去った。

かそれとも勝手にやっているのかその辺の窓や扉を勝手にやぶつて食糧や衣服、こんなものを両手に抱えている兵隊が多かった。まさか南京突入の殊勲部隊二十三聯隊の兵隊じゃあるまい。こんな悪いことをするのは決して第一線の歩兵達ではなく後方部隊（輜重電信その他兵站部隊）の非戦闘員に相違ない。憲兵は何をしているのだ。速に彼等を取締つて軍紀を確立せにやなるまい。

入城式

◇十二月十七日

今日中山路上で入城式（参加部隊増列）が行われる。

八時宿舎の前の街路に整列、服装点検

服装は第十軍（杭州湾上陸軍）は外套を左肩から右脇に斜にかけ雑糞水筒と云う略式の軽武装。一方上海派遣軍は背囊を負うと云う完全重武装だ、対称的なのが面白い。

中山路は東西南北の各路から集つて来る代表部隊で大変な混雑だった3、6、9、11、16の現役師団に10、13、18、114の特設師団、国崎支隊、台湾軍と云う約十コ師団の大部隊だからどれがどれやら判りっこない。

道路の北側が上海派遣軍、その反対側は第十軍に区別してある。所定の位置に増列している我等の前を軍旗が何旒とはなく通りかかる。

十一時頃中山門を出発して愈々松井大將以下の入城行進が始まる……如何にも戦勝將軍の閥兵に相応しい、然し考えて見ると入場式と云うものは結局形式なんだろうが、結局一種の自己陶醉それも高級指揮官のよがりに過ぎないのかも知れない。空には海の荒鷲数

松村副官と云い車主計と云い根は良いんだと吻とする。

其処へ又渡り廊下を伝つていかめしい金色の飾緒をつけた少将閣下が随員を連れて現われた。ハハーコリヤブル聯隊長（少年俱樂部ノラクロ一等兵）田川水泡だ、本科の生徒隊長飯沼大佐だ何時進級されたんだろうかと思いつつ拳手注目する。少将閣下、悠容迫らず軽く答礼しながら平気で通り過ぎて行く。生徒隊長だからと云つて嘗つての教え子その一人一人に見覚えがあらう筈はない。少将の参謀なら軍の参謀副長（新設の中支方面軍）だろうか。

車主計の手配で間もなく乾麵包の一函が渡された。

午後は半部で行政委員長の公館を掃除する。明日の入場式には四軍司令官（松井石根大將）中支方面軍最高指揮官、朝香宮中將（上海派遣軍軍司令官、柳川平助中將）第十軍軍司令官、長谷川清海軍大將（第三艦隊司令長官）対面の場所になるのだそう。

応接室の調度重々しいカーペットの色調豪華な絨緞など驚くべきものがあつた。また高価な骨董品大理石の彫刻など……軍司令部の随員や新聞記者見たいな連中がいかに感に堪えない風で取沙汰している。

他の半部は国民政府の正門の塔上に日章旗を樹ており前庭に散乱している葉莢や支那軍の装具などを集積して火をつけたので午後三時頃に殆ど済んだ。其の間同盟通信や朝日などの新聞社のカメラマンから依頼されてモデルになり塔上の日の丸を背景にポーズをしたりした。これが内地のニュースになるのかと思うと何だか味気ない気がした。

四時頃漸く掃除終了。松村中佐に報告して帰舎の途につく。

朝に比べて帰りは街上また大変な人出で無統制に懲発を許した為

十機の編隊が紫金山の山頂をかすめて式場の上空に飛来し地上には剣光燦然喇叭囀整然の隊伍。午後終了又隊伍を組んで帰舎する。

◇十二月十八日

今日は城内の故宮飛行場において軍の慰霊祭が行なわれる。中隊からは昨日留守した第三小隊が参列する。曇天で寒い、今日は専ら休養することにする。

その中、明後日（二十日）師団は愈々南京を後に新駐屯地蕪湖地区に向い前進すると云う御布令が出た。それでは明日は南京見物でしょう、希望者を募つて孫文の中山陵迄行軍しようか。

各小隊に提言したら案外「行こう」と云うのでそれじゃと前田少尉が引率して約五十名で行くことになった。

◇十二月十九日

今日はお上りさん達の南京見物だ。

前田少尉は中隊長自慢の名馬を借り兵隊達は執銃だけの軽装だ。市街は相変らず徴発隊達でゴッタ返していた。先ず国民政府に連れて行く、入城式で一躍世界ニュースの舞台となった現場だから一見の価値はあろう、大部分の兵隊は初めてだから珍らしそうに目を皿にしている。中山路に出る。この辺に軍官学校や帝國大使館などもある筈だがまァ国民政府だけで良いだろう。中山門迄約一里、両側はいよいよ加減くたびれたらしい。

中山門に着いたらもう午後だ。「小隊長どん、もうへばりました」と徳永分隊長が顎を出した様な口調で申出る。

「夫じゃ俺は馬を飛ばして中山陵迄行って来る、ここから二里以

「上あるから往復ギリギリでも二時間はかかる、夫れ迄待つてろ」と紫金山目掛けて馳せる。

振り返ると中山門は平野の真只中に障壁を立てたような南京城壁の中央にある、弾痕無数、城壁の幾カ所に大きく破壊口が口をあけ土囊や敵屍の取片付けもすんでいない。これを突破した第十六師団の苦心を偲ばせるものがあつた。

走り続けて約四〇分、中山陵の登り口に辿りついた。ここからは大理石の参道だ、はるか中央に白亜の大陵墓が望まれる、正に壮麗の二字に尽きる。蹄音を鳴らしながら数百段の階段を駆け上る。

馬を牽いて、円形の陵墓の正面に出て脱帽敬礼、再びひき返す。

陵墓の壁（これも大理石）に二カ所程砲弾が破裂した跡がある。やっぱりこの神聖な陵壁に拠つた敵が居たと見える、勿体ない事をするとと思う。

午後三時頃やつとの事で帰りついた。名馬、「南京号」もさすがに疲れたらしい。城内のそばに待ちくたびれていた兵隊達もやおら腰をあげる。帰路は二里ある、やれやれと思う、夕日の影が長く地にひいてうすら寒い。

帰途ロータリーを南下して秦淮へかかる頃不図道畔の三階建の洋館から突如黒煙が湧き上りその下にチロチロと火焔が出はじめたのに気付く、今朝来るときは火の気など一ツもなかったのだが此は掠奪組の放火と首肯された。

皇軍意識なんてものは一かけらもない彼等の行動だ。日本兵一、〇〇〇名の中に一人の不心得者の仕業があることによって皇軍の面目は只今泥濘に委するのか。何とも云えない悲痛の裡に午後五時頃帰りついた。

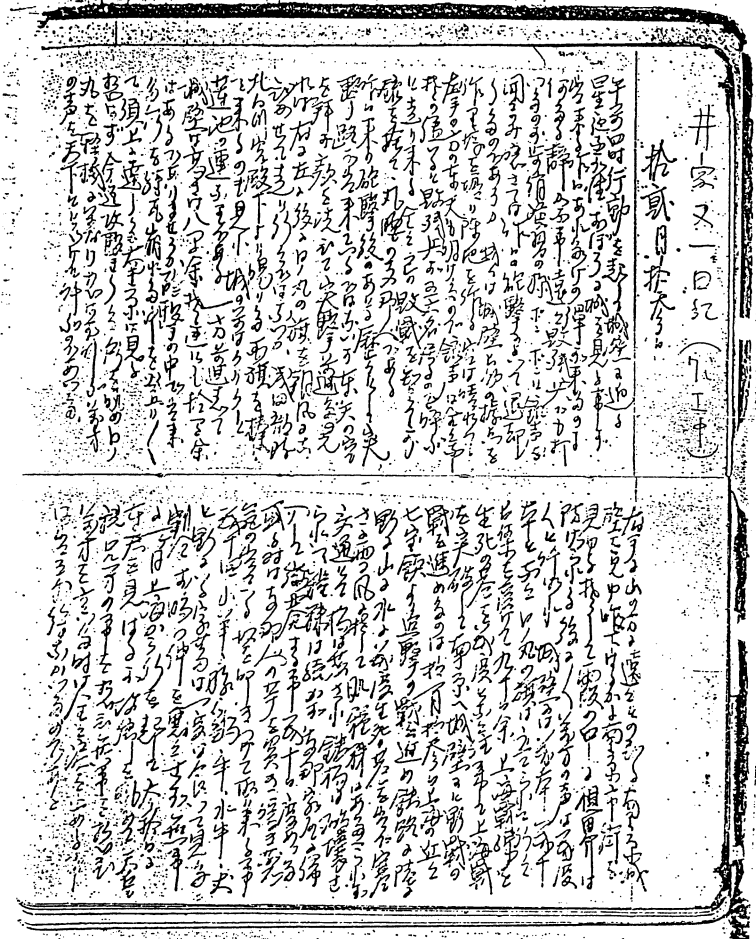
◇十二月二十日

大隊は去る十二月十二日正午過ぎ四十七聯隊（大分）が一旦決死斥候によって日章旗を掲げた南京南壁の直ぐ近くの中華門を潜り蕪湖へ向つて南下する。思い出の西善橋を過ぎ夕刻銅井鎮に到着宿営す。

途中南京の避難民達を見る。その中に妙齡の女性あり、何と云う名の大学か知らないがその学生で我大隊の通訳某君の間に応じて色々応待する。その中如何なる風の吹き廻しだったのか知らぬ我聯隊の目的地太平府（当塗県）迄同行する事になった由。

井家の又一日記

歩兵第七聯隊第二中隊・上等兵



井家日記原文（原本は手帳である）

◇拾貳月九日

不眠不休の追撃戦は続けられた。井西村から高橋鎮、柏橋を経て追撃だ。

道路処々に鉄条網を半造にしてある。皇軍の追撃が急な為陣地半造の形である。死屍累々として爆撃のあとも見事なものである。道路の左右両方の線も友軍が追撃しているのか、銃声砲の響を聞く。空は晴れ爆撃日和とでも言はんか盛んに爆撃している。烏が我々の殺す支那兵の死体でもはしいのか何百千の数なく、木々から空に、空から木々にとび歩き、首の所に白線の鳥も見ることが出来る。不眠前進の為全くつかれ筆を動かすのもつらい具合である。四日近寝不足であるからな。柏橋村、敵の砲弾を避ける為一寸休む、その折に書く、時に午前拾時過である。南京をさる一里半の地迄追撃は進んできたのであるのに、命によりて聯隊集合の為引揚げる道路は、五、六寸角の石の敷設せられた道路であるが処々石を掘り起して地雷が埋められて通行困難である。皇軍の追撃に至る所に軍馬、自動車一杯である。連日の疲れで横になり爆撃を眺めそして皇軍の進出を見ているのも面白いものである。食なく芋を嚙りて前進をして来たが全く疲れはててしまった。

飛行機が南京城近くに来ると高砲一射の射撃を見る事が出来た。本日第九師師団部隊が全軍の一番乗りをしたのである。朝日新聞記者何処かで一番乗りをあらそっているが、九師団一番乗りが二、三日前に判っていたが、遂に九師一番の決心した故朝日の記者全部来たのである。報道機関をあらそうのに流石に我々のついたわけである。桐橋村を出て聯隊集決する。午後の日を受けて一大二大隊が山岳の麓を前進する。夜に入りて師団左翼として夜の道をあちこちと

動かされる、全く我々は何をしているのか判り得べくもなく一夜歩き通した。二〇聯隊福知山の兵と会ふ。我々右翼として九師と連絡するのである。四日五日月を受けて割合に明るい中を前進す。一方一線に二〇〇米迄近くに寄り歩き下り、石の道は軍靴の音が多いとて道路下を歩む。連日の行軍全く嫌だ。敵の銃声の音が盛んに近く遠く砲声と連鎖して我々の迄の耳を神経昂奮をさす。南京を距る事一里半の地から仲々入る術もなし。高い道から低地におこるげ落ちると全く追撃戦、そして歩むつらさを一入此の身に味はさせられた。

◇拾貳月拾日

南京城そのものが天塞の要地を想はせる。山有川有低地に高地、全く守るによく出来た町であると想はる。至る所の鉄道、道路に鉄条網を巡り道を破壊前進してその付近に死体をよく見る。何友軍兵追撃なのである。昨夜からいよいよ師団の左翼第一線として前進す。我方式中隊は予備隊となり中山陵を遠く山の中腹に白く青い中にはっきりと見る。夙に彼我の銃声はとどろき、いつ南京入城を見る事が出来るのか、高地に鉄条網、低地に鉄条網、掩蓋銃座、トチカから打出す最後の敵のあがき様がある。

毎日の晴天、何時か落ちる南京なのに。昼から二中隊は鉄道で沿線より南京攻撃する為、聯隊進出を容易ならしむる為、鉄路及クリクの線千五、六百米の間に交通壕、及鉄道横断の見えざる様に夜の二時近く迄かかって此の築城せり。敵は妨害して打出銃声又一入だ。夜六日頃の月が横の仕事を冷めたく照す、鉄レールは青く光り、軍靴のシャクシャクとの音は一入にて物凄さを想わしめる。敵

前数百米の地点でやる工事だから。三十六聯隊の一部城門に達したとの報を聞く。

◇拾貳月拾一日

深夜の仕事終りて村落宿営しているが、全く寒くてねる事も出来ず、朝空の星を眺めてそして見事に降った霜の日だ。戦野の連りを見て、味なき食物を食って、一日一日を過している我々は、暖いあの福々した白餅一個、饅頭一コ喰って見たくなって来た。支那米と支那人の喰う漬物、白菜を漬けたのを毎日毎日喰って食事をしているのだ。一寸で好い美味しい副食物で食事がしてみたい、そして本朝から配属の野戦重砲が百米後方で打出す地震撼さす砲声の中で想を故郷に走らせて噫食ってみたい、炊いてみたい、呑んでみたいなり横になりながら、自分が動員を受けて九十日間の生活を走馬灯の様に想を走らす。全く生死の巷を往来する事幾度、そして何もかも忘れて働いた事もあるのに、南京を間近にひかえて一寸した欲が出たのか、食ふのと、生の執着を感じる様になった。砲兵陣地に近く居る我々は敵の砲火をさける為、南京近くの兵營に難を避ける。馬廐に入るが中々の立派な建物である。焼落ちた兵營が幾十棟となく並んでいるのも哀れ一入である。前の高地にはトーチカ陣地と鉄条網とならんでいる。友軍の砲兵が盛んに射撃をしている、此の世破れとばかりに南京城を震わしている。三十五の兵の一部も此の付近に多数来て砲火終りを待って突撃準備中である。噂の三十六聯隊二大隊全滅の報と知らせを受ける。毎日毎日道路上の猛追撃に全く哀れな程やられたとの報である。午前拾時支那兵營馬廐の中で。午後二時半大隊の突撃だ。我中隊から約四十拾名の決死南京城の聯隊の一

番乗り志望決死隊となり第一線に突撃だ。突撃又突撃して約六〇〇米前方の丘陵地帯を占領した。此の付近は敵の兵營地で建物が幾つとなく建並んでいる堂々たる建物であり、兵營地帯を通過して城壁を約六、七百米に眺められた。時は午後四時半であった。兵營のタックには日ノ丸国旗を懸えたのである。此処迄中隊の兵隊二名の重傷者を出した。重砲の射撃の一寸止み、城壁を眺め敵前で此の日記を書く、分隊長たる。林上等兵、又此処で見えなくなった。兵營の道路で支那兵が飯と菜葉とのおかずを残しざろの中に走り去ったので一寸つまみ喰ってお腹の工合を一寸ふくらます。兵營の高建築に迷走したる二十三名が盛んに狙撃をやっているのを見る。午後四時半過ぎの記である。

此の地は蔣介石經營の軍官学校である。コンクリ建の四階建の立派な兵營が幾十棟となく、城壁と並立して南京丘陵地の中空にそびえ立っているのである。此の上海戦の幹部は皆此の兵營を巣立った将校ばかりであろう、そして蔣介石の革命の手足となっているのであろう。此の地は我々が幾千名の尊き血で占領したのであり又感無量である。白亜の建物ではあるが、又赤化の権化堂であらう。

我々が此の兵營前端的の高地を占領したが、迷走れし兵が未だ残って頑強に抵抗していた。日も西に没し去り月星の光を増した。夜になりて逃げ出して我々の壕の近くに迷いぐる奴は幾十人となっている。それを先をあらそって突撃するのである。夜は深まれど、弾の音は相変ず盛んである、そして敗残兵が来る為壕の中で寝ることも出来ない、いよいよ明日城壁に入ることが出来るのか、明日の事を想い出して胸をわくつかす上海から南京城の間の一ヶ月の追撃戦だ。雨に寒さに肌足の痛いのも困苦欠乏、此の南京へ南京を目的に前進

したのである。太湖の風景、蘇州の水景色、全く美しい眺を見ることが出来たのだ。何もかも此の風景よって追撃のつかれを幾度となく取戻すことでありませう。

◇拾貳月拾貳日

南京城外の夜は霞の中はのりと浮城を見るかの様に城壁を見る事が出来る。後の軍官学校の高塔も見る。第二大隊の占領した高丘も見事な事が出来た。右下の兵營に三十五の兵が国旗ノ丸を打振る姿を見る事も得、南京城へ南京城へと幾万十の兵が押迫って来ている事であろう。昨夜右数千米の山岳地帯が炎々紅蓮の炎を上げ盛んに炎えていたは落城迫る南京城最後の線香花火なのか、炎える炎の煙は何処へなびくのか、退路を示すか、再び上り得ない蔣介石の末路か、幾度想うかべて想ひ困るのである。

朝香軍司令官から九師団長に軍の南京城一番乗りを祝す意の言葉があった。

天皇陛下からの勅語をお下しになったのも朝来たのである。想ひ新に南京城をにらみ、そして南京城に来る迄の戦死傷者の上を想へば涙を禁じ得ない。朝露にハラハラと名もなき草花が散つてさへ噫々感傷の叫びをあげる我大和撫子であるのである。寒さも草の中にくるまて、振へての感傷的なことを書きつらねるのである。午前九時城壁占領の拠点を作るべく朝日をうけ風なほ冷たき中を勇躍壕を飛び出す。勇躍二百五十米余前進して低地にある兵舎の一部占領して入る、右手の高地から盛んに弾が来る、山砲重砲の城壁一部破壊のあとを見、そして朝もやを破って城壁破壊中の集中火を見る、仲々あたらないのである。一発当たっても大きな西瓜に口一口嚙

んだ様な者である事を想ひ如何に此の城の強さを考えさせらる。城迄あと三百五十か四〇〇米余の地点に来たのである。時に午前九時半過であった。

朝迄いた高地に敵の迫撃砲の来るを見る。砲声殷々として響き、爆撃の音と銜す、銃声の中兵營の一角内で此の日記を記す。左手独立家屋には日ノ丸の旗がヒラヒラと輝きいている、つかれた兵は横、敵前でありながら、後数秒後の死生を考へず、無我の境に駢の進軍ラッパを吹きならして突撃をしている兵が居る。

兵營の一角にて一寸休養、食事の準備、給養ない食事だ、皆米不足を歎く、副食物又然りである。此の兵營は割合立派な兵營で、寝台から炊事用の所もある。中に講堂もあり、兵の中に一寸と講堂で講義をききながら、便所をしてやれと笑ひながら便所をやりに行く。

南京では此の水の不足は非常なものである。全く内地で不日想出す折があるだろうか、木田准尉が腹痛で大隊本部に下られ、西田伍長八日の戦死体収容から帰る。中隊二十四名負傷者、十九名の収容であるとの話、戦闘の激烈は全く今後にありと想はる。野砲の集中火は続く、城壁は白煙一杯である。飛行機の爆撃は続く、本夕から三十五聯隊と交替して第一線行だ。お腹は肥ええした食事の準備終る。チュッコのみが終日、全く頭の痛みを増すのみ。午後三時半過ぎ。

此の兵營は工兵学校である事が分った。敵の演習地で我々が戦闘したのである。敵は何時もの演習とは一寸相手が我なので一寸困った事であろう。三十五聯隊と七聯隊とが此の兵營で宿泊するの何かの因縁であったのか。寒さと共に火を取り暖を取る、昼から砲弾が来るので火をやかましく言って来るが、我々はどうせ死ぬる命な

ら暖かい内にと、我々は笑いながら暖をとるのである。夜に入りて相変らず盛んに小銃弾が来る。どうせ袋の中の風だ、打たせるだけは打たせてやれ、水道栓あれど水はなし、二十聯隊の将校斥候が来た。

◇拾貳月拾参日

午前四時行動を起して城壁に迫る。星夜ながらおぼろに城を見る事が出来る。昨日あれだけの弾が来たのに何たる静かな事、遠く敗残兵でも打ったのか歩哨演習の様、ボンボンと銃声を聞くのみ、噫さては昨日の砲撃によって退却したのであるうか。我々は城壁占領の拠点を作り壕を掘り陣地を作る、空は晴れて左手の方の東天も明けたので銃声は全くなし。その儘いると敗残兵が五・六名居るので呼ぶと走り来る。全く己の敗戦を知ってか銃を捨て、丸腰の支那人である。

昨日来の砲撃後のあとに歴々として突撃路が出来ているではないか、東天の空を拝み顔を洗って突撃前進だ。見れば、右に左に後に日ノ丸の旗を朝風になびかせて走り行くではないか、浅田部隊北白川宮殿下より賜りた国旗を捧げて来るのも見え城の前はクリークと蓮池の連なりである。一方前進して城壁は高さは八間余それにも拾間余はあるでありませうか。砲撃の中で出来た所を煉瓦崩れた中を登り登りて頂上に達した。南京を見る。想はず今迄攻撃した所を眺め日ノ丸を軽機に着け想はず叫ぶ万歳の声を天下にとどろけと叫ぶのであった。

右手に山の方に遠々とのびる南京城壁を見ゆ。眼下はるかに南京市街が見ゆる。そして霞の中に視界は妨げられる。後に後に万歳の

残しているのも哀れである。格納庫が爆撃せられていた。

飛行場横の池の中に首を突こんで未だ新しい機らしく彩色して美くしい。

中国の軍政部会計課の前が第一公園である。その付近は未だ爆撃の跡も生々しいものがある。中隊長から絶対に微発は出来ぬ、憲兵が入り込んでいるから。

午後六時

午後六時から八時よりいよいよ国際避難地区に向いて残敵掃蕩をやる。途中中山路及上海路方面立派な道路である。割合に爆撃のあとも割合なきである。国民大会堂は立派なる建物である。夜に二時にかえる。全くへとへととなりて。赤十字病院（外交部）負傷者多数居る如何に抗日のために努力しているか、そして負傷者も蔣介石の為に一身を犠牲にしているかは余りにはっきりと判るのである。

◇拾貳月拾四日

南京占領の第一公園近くの儒教の寺院にて一夜を過す。昨夜二時過ぎに床に入った為とてもねむたかった。然し軍隊の事朝七時起床だ、一寸体の具合の悪さを考へる。あの上海戦から南京入城迄の追撃戦のつかれか全く頭が痛い。午前八時半整列して昨夜の地点を今一度残敵掃除に行く。然し自分は行きたくなかった。昼の南京市街を見度又出る。昨夜の地点は国際避難地区を米国人が経営しているのである。中立地帯として日本に願ひに出ているが日本人は此を認めないのである。南京の避難民は此の地区に外人の建物の大建築にあふれて居る。朝日新聞記者の報にて現場にかけつける。約六〇〇名の敗残兵が外人の建物にあふれているのである。南京落城の為逃

声は幾度幾度と叫ばれ、城壁には幾本幾本となく日の丸の旗は立てられて行く。召集を受けて九十日余、上海戦線を生死の巷を幾度となく往来して上海戦を突破して南京へ城壁にと野戦の戦を進めたのは、拾貳月拾参日上海の近く七宝鎮より追撃の戦を進め、鉄路に陸に野に山に水に幾度生死の巷を出で、寒さに雨に風にそして糧秣はあたへられず、交通とて橋は落され鉄橋は破壊せられて糧秣は続かず支那家屋に侵入して微発する事幾十度あった。或る時は支那人の芋を炙き暖き蒸気の出ている奴を叩きつけて取り来る事幾十回、小羊・豚・鶏・牛・水牛、犬と野にいる家畜は一度は食って見た。割合お腹の中を悪くせず無事に一ヵ月、上海から行を起して参拾日に東天を見、はるか故郷を眺めて、天皇・親・兄弟の事を想ひ無事を想ひ万歳を言った時は全く涙を止める事は出来得なかつたのである。

数多の戦友の犠牲にして、内地出發佐分利隊一九八名の中に、現在南京入城に病氣せず戦傷一度無きで入城したのは井家・中谷・寺尾・林・守山・平本と僅か六名の一員となり無事入城は全く神様の御加護と深く信ずるのである。

中隊長代理的場少尉の声で着剣差棒（捧銃）後万歳三声は全く胸の中に無我の境の万歳であった。終りて何も言われず涙頬を傳をおぼゆる。

中隊に式本の恩賜の煙草を我々頂きて全員をすつてはなくなるから口だけをつけと言われ我は一つ戴く。正拾二時記である。未だ彼の砲声はとどろいている。

午後四時から追撃戦に移る。第一公園を目ざして前進する。途中飛行場に至れば、友軍に爆撃せられ六・七機の焼けて鉄骨のみを

場を失ったのである。此の処置を日本大使館に委任す。午後四時迄残敵掃蕩終りて帰る。市街にある自動車を微発しては日本兵が市内を乗廻している。南京の町は日本軍の完全な者になつてしまった。新聞記者があちこちとろろついているのを見る。朝日・毎日・読売と社旗をひるがえして走っている。中山路に朝日南京支局と看板もかがけられている。

道路の塀には至る所に白字で大書で「中国男児為抗敵抗而死は無上光荣」とか。

◇拾貳月拾五日

午前八時整列して宿营地を変更の為中山路を行く。日本領事館の横を通って外国人の居住地たる国際避難地区の一帯の残敵掃蕩である。先日の風邪で腹工合が悪くて歩くのに困る。道路では早くも店を張っている、食料品がおもであり、散髪を大道でやっているのやら、立って喰っているの、家屋やら大道には人の鈴成りであり、四拾余名の敗残兵を突殺してしまふ。

外国家屋避難民家屋には日ノ丸の旗をこしらえて戸毎にかがけられている。道路とか広場とか掩蓋壕を作りて何時の空襲に備えていたか、又公共掩蓋壕と立札を立てられている土囊を作り銃眼を作りて市街戦に備へていたかが分る。敗残兵の脱捨て衣服が至る所に捨てられていた。外人の家屋に九人の敗残兵が入つていて避難民九名居住宅と堂々と掲げてあるのも笑止の至りである。警察隊が黒服いかめしく警備をしている。日本軍布告文を辻々要所に巡警共がはり歩いているのを見る。

本日又居住家屋を変えて外人街の家に入って又寝る。付近は避難

民で一杯である。我々が入って行くと恐る恐る笑ふ。又上手もするのは哀れ敗残国民として全く同情に値するものと想う。

一杯の日本酒を呑んで陽気に歌う兵もある、全く停戦を想はしめる。我に一時あの陽気な時があらしめて来れたならばな。

酒、煙草を喫まぬ俺は馬鹿だなと思ふ。時には淋しさの折に煙草をのむ練習をしようかと想わしむる時もある。此の日記を書いていると人の部屋で盛んに歌う、手を叩く盛んにやっている。

◇拾貳月拾六日

拾貳月も中を過ぎ去ってしまった。金沢召集を受けて満三ヶ月に成ってしまった。只無の世界の様である。午前拾時から残敵掃蕩に出ける。高射砲一門を捕獲す。午後又出ける。若い奴を三百三十五名を捕えて来る。避難民の中から敗残兵らしき奴を皆連れ来るのである。全く此の中には家族も居るであろうに。全く此を連れ出すのに只々泣くので困る。手にする、体にするが全く困った。新聞記者が此を記事にせんとして自動車から下りて来るのに日本の大人と想つてから十重二重にまき来る支那人の為、流石の新聞記者もつひに逃げ去る。はしる自動車にすがり引づられて行く。本日新聞記者に自分は支那売店に立っている時、一葉を取って行く。

巡察に行くとき夕方拾四日の月が空高く渡っている。外人家屋の中を歩きながらしみじみと眺められるのである。

揚子江付近に此の敗残兵三百三十五名を連れて他の兵が射殺に行つた。

此の寒月拾四日皎々と光る中に永久の旅に出ずる者ぞ何かの縁なのであらう。皇道宣布の犠牲となりて行くのだ。日本軍司令部で二

度と腰の立て得ない様にする為に若人は皆殺すのである。

憲兵隊が独逸人家屋に侵入を禁ずと筆太く書かれている。市街の何処に行けど日ノ丸の旗は掲げられている。肩に荷いて歩く物でさえ旗を手に持って歩く奴も居るし、又腕に巻きつけている奴も多数あるのである。

◇拾貳月拾七日

一天曇なき空は一杯に晴れている。本日は南京入城式が挙行日だ。朝七時に整列して大隊の訓辭に、本日の入城式に参加出来る事は名誉であり戦死者の為に本日入城式に参加出来るのだと。大隊長殿が千名近くの部下を幾度の戦いにより戦死傷者出して僅かの兵しか南京入城出来得なかつた事を想えば涙が出ると流石の大隊長殿の声が曇つたのであった。一同黙くすのみ。

聯隊本部に集合して軍旗を先頭に、朝風寒き中を歩武堂々と南京街、外人街を出て中山路に出る。途中避難民が蒲団を荷いて歩く奴アンペラで丸太で柱でこしらえてその中に避難している奴、全く朝の国際避難民街も戦が止んだとは云え未だ復興の色は見る事は出来なかつた。上海路を経て中山路に出て入城式場に至る道路は清掃され、憲兵は立って物々しく警戒せられて、道路の電柱には新調の日ノ丸がハタハタとひらめき本日の盛儀を待つかの如きである。一一四師、三師、一六師、九師と広い道路は日本軍で一杯でありカーキ色に埋められたのである。自動車は微発車、日本軍用車色々とりどりに走り今迄の戦蹟を物語るかの様にラジエタ、フエンダーか処々傷だらけの奴が日ノ丸をかかげ南京城へ走る走る、本日を寿ぶかの様に。

午後一時、本門から中山路にかけて皇軍が並んで今や遅しと待ったのである。空には低く飛行機が旋回しているし、暖き事小春日和の様である。誘導将校の後に馬上豊に跨るはあから顔の松井大將であつて馬の足も軽やかに進んで行くのを見、我々の一人一人を見るやの様に想われた。参謀の縄がついている将校連を見る。折も折空には百台近くの飛行機の分列式である。爆音高く南京を呑むかの様に美しい空の分列式である。入場式の感激は僅か数分間であつて新聞紙の材料かの様に想われた。今迄の長い労苦が一時に報われたかの様に想えた。

午後一時、本門から中山路にかけて皇軍が並んで今や遅しと待ったのである。空には低く飛行機が旋回しているし、暖き事小春日和の様である。誘導将校の後に馬上豊に跨るはあから顔の松井大將であつて馬の足も軽やかに進んで行くのを見、我々の一人一人を見るやの様に想われた。参謀の縄がついている将校連を見る。折も折空には百台近くの飛行機の分列式である。爆音高く南京を呑むかの様に美しい空の分列式である。入場式の感激は僅か数分間であつて新聞紙の材料かの様に想われた。今迄の長い労苦が一時に報われたかの様に想えた。

◇拾貳月拾八日

小春日和の入場式の昨日の天気は暁から風さえ交えた曇りが降り前の竹藪が音を立て時にはうなりさえ交えた暴雨風雪となり、朝屋根や草木に雪の積って白くなつたのを見る。

南京占領初の初雪であり、支那に來て見る雪景色であつた。秋から冬が急に來て寒さ急に感じる。

本日は軍の戦没者の慰霊祭が城内の旅客飛行場で行われたのである。あの大きな場も行軍で行つて式場一杯カーキ色に埋めつくしたのである。場の中央に赤青黄の吹流の旗を遠くから眺める。吹く風は木枯風か山吹き下る事として一入身にしみる。

野戦郵便局に南京落城記念スタンプと書いて道に出してあつた。新聞社とか軍の部隊が中華民国の重要な建物を占領して本部をこしらへている。昨日迄居た避難民は何処に追われてか、大きな建物を出されて場末に動いて行き、此の寒天を何処で夜を過すのか、夕空鳥が何千となく風に逆ふ声を一入淋しく聞く。

遠く焼ける火事の赤空も眺められる。皆は警戒官兵に行つて分列に我一人となつて目覚時計の時のきざみ、そして火床に炭火の炎ゆる音、下で馬の嘶き、全く静かな南京の夜である。先日あたりが満月であつたのであらう。

◇拾貳月拾九日

静かな秋の夜の如く夢の如く明けた。昨日から小隊の兵が警戒衛兵に行き分隊で我一人で朝八時迄充分のねむりをとる。本日久方振りの落付きの事として早速個の家に散髪に出かける。戦終りて少し落着いた今日では、支那人は早速に我々の兵の散髪をやるとは良く頭の好い男である。ひげを想い想いに残して自慢仕合っているのである。

醬油と砂糖の微発に出かけ難民の家に引き箱から蓋を取った釜の中を見、引出の中を開き色々中をさがすのだ。難民のしている前でやるのだから彼等とて恐ろしい日本兵の事何もある事も出来ずするままである。黒いひげを伸した顔で彼等とて何と汚い人間が居るものと想い又恐るべきは知るべしだ。

畠の中で、葱、人蔘、菜葉を取つて、籠迄取つてきて難民に洗はし掃除迄皆やらすのだ。残飯は皆難民にあたえるので彼等は嬉々として我々の下に働くのである。手榴弾を取つて來て池の中に投げ又魚を取る。全く悪い事の出来得るかぎり働くのである。

◇拾貳月貳拾日

霜と氷の朝は明ける。然し寒さ一入感じる。本日は休養だ、此の付近の難民は一寸減つた様に想わる。午前兵器検査行わる。全く手

入せずに居たので全く恐るべきになっていた。午後は大隊長の巡視との事で家屋の付近の掃除をやる。

午後参時から対空監視歩哨に上番す然し飛行機を見ず。

本日来信あり、井家玖邇二通、妹朝日、明河浅次郎、水原重春、五通と新聞紙が来た。久方振りか。国を出て始めて便りに接するのは嬉しい事、一寸内地の皆様の想像のつかぬ事だ。寺尾君が来て手紙を見て行く。空も曇り今月に入ってマレの悪天候である。然し風はなし静か、

盛んに停戦の話が出、お互に私物命令に花を咲かす。此処に居て砲声を聞く、何処かの師団で追撃中なのかな、御苦労の話である、漢口迄追撃二個師団が出ているとの話あり。

◇拾貳月貳拾一日

うらの竹藪には鳥が集まりて朝の戦争でもやっているのか盛に集散をやって何事かわめきあっているのを見る。

その向は丘陵地帯を見、枯れた数本の雑木林を見る、此の地付近は外人の居住地帯の事として外国旗がひるがえるを見る、独・英・米・芬を見る。我々が此の避難地区は外人の家屋に見る中立地帯を勝手にこしらえていたのが、我々が此の付近の家屋に入りて住むにあたりて、外人の旗も生彩をはなつの消えるを見る。若人は此の付近に居るのを数千・数万の命を取ってしまったのも此の避難地区にいた奴だ。

右手の山の中腹に中山陵を、その左の側に王所を見る。此の後の山は延々とびて右から我々の前面の方に丘陵地帯となり、此の大道に戦車のうなり、友軍の自動車、馬匹が盛んに動き、時々忘れた

きめて、寒さと肌とに戦っている事を考へれば、此の近くの避難民は、暖いわが軍に保護されている事が幸福であるかも知れない。

政府なき国民に米なくば、死の世界が待っているのであらう。敗残民よ何処に行く。人の通り日毎に多くなる様である。然し、大路を自動車兵が兵を満載しては、幾十台となく通り行く通追撃急なのか、次から次へと異動は進められているのか、常熟行はいよいよ確実味を帯びているらしい。動くなら動け、然しな、正月だけは落着いて落着いて々々雑煮を喰って見たくなったな。

妹てる子から来信ある。拾二月八日の奴である、その中に岡本の息子の戦死を聞く、小川の兄も戦死との事、此れ攻撃戦に行く我々と、又凱旋する兵も居る、全く広い戦線の事だから。支那避難民の中に入って蜜柑と梨を徴発してお腹を驚かす。南京に入って給養もよくなった。本日の如きは参拾本の煙草、羊羹一本とをあたえられて全く嬉しい、お腹の工合をよろよろとして来た。

◇拾貳月貳拾貳日

満月の月は日々に近づくのかかけて行く、夜の寒さは一入身に沁みる。

メリケン粉を固めて団子にして葱の汁に入れて雑煮を祝った様な者である。全くお正月を迎えた様な者である。襦袢や袴下を衣替をやる。晴々した、精神的に小春日和の様になる。

畠に行き通行の支那人拾五名を徴発して葱の掃除をやる。

夕闇迫る午後五時大隊本部に集合して敗残兵を殺に行くのだと。見れば本部の庭に百六十一名の支那人が神明にひかえている。後に死が近くのも知らず我々の行動を眺めていた。百六十余名を連れて

様に重軽機がなる、避難民の間のぬけた顔が我下の道を日ノ丸の腕章をつけて籠を持って動いている。クリーク、池に誰か魚でも取りに行っているのか手榴弾の音がする。大隊長が朝九時から巡視があった。相変らず口のやかましい人である。

避難民からメリケン粉を取って来て、団子をこしらへ喰ふが、砂糖のないのが我は苦痛だ。甘い物好きの我に、せめて砂糖でも充分喰はして喰れて来ればなと思ふ。

対空監視哨となり、三階の屋上から見ゆる南京の街を色々と考へられる。後、僅か数日中に常熟に異動との事なれば、又々、六、七十里の行軍、そして寒い中の行軍、夜の事を考へて、一入、寒さが心配である。右の方で盛んに軽機の音がするが、敗残兵か、それ共避難民をやっている銃声かな。南京に入ってから八日、忘れていた戦の事が又々やるのか、停戦の話を経幾度となく聞かされ、そして幾度となくそれを我々が願っているのである。

蘇州、蓋山、無錫、常熟に行き、警備との話を聞き、我々わそれを希ふたのである。内地から生きて帰らずと、来せずして来て、戦ひ激烈になるに及んで、一時でもよい戦争は激烈なる者であり、如何に苦勞をしているかを故国に知って貰ひたく想ひ、それ迄生長えられた……。

隊の一員として……。中の一員として……。補充を受……。名の中隊長……。備についている……。徴発だし……。存数十万の南京市民……。

〔……はコピー不明〕

生活をしてたのが、此の生活を続けたのが、蒋介石の都落と共に避難して、何処に落付いているのか、山に野に何処にねぐらに

南京外人街を叱りつつ、古林寺付近の要地帯に掩蔽銃座が至る所に見る。日はすで西山に没してすでに人の変動が分るのみである。家屋も点々とあるのみ、池のふちにつれ来、一軒家にぶちこめた。家屋から五人連をつれてきては突くのである。うーと叫ぶ奴、ぶつぶつと言って歩く奴、泣く奴、全く最後を知るに及んでやはり落付を失っているを見る。戦にやぶれた兵の行先は日本人軍に殺されたのだ。針金で腕をしめる、首をつなぎ、棒でたたきたきつれ行くのである。中には勇敢な兵は歌を歌い歩調を取って歩く兵もいた。突かれた兵が死んだまねた、水の中に飛び込んであぶあぶしている奴、中に逃げる為に屋根裏にしがみついてかくれている奴もいる。いくら呼べど下りてこぬがガソリンで家屋を焼く。火達磨となって二・三人がとんで出て来たのを突殺す。

暗き中にエイエイと気合をかけ突く、逃げ行く奴を突く、銃殺しパンパンと打、一時此の付近を地獄の様にしてしまった。終りて並べた死体の中にガソリンをかけ火をかけて、火の中にまだ生きている奴が動くのを又殺すのだ。後の家屋は炎々として炎えすずに屋根瓦が落ちる、火の子は飛散しているのである。帰る道振返れば赤く焼けつつある。

向うの竹藪の上に星の灯を見る、割合に呑気な状態でかえる。そして勇敢な革命歌を歌い歩調を取って死の道を歩む敗残兵の話の花を咲かす。

午後八時記す。

酒を雀の小便程とドロップ六〇瓦を中隊からもらう。割合給養よくなる。腹が一寸痛むを感じるのだ。いよいよ数日中に移動確実となる。常熟か蘇州に行くのだらう。

机に向いローソクの下に暗い南京街を暗の中に見て犬の遠吠を聞き、何時になったら停戦か、それとも凱旋なのか、家庭の都合によって一部速く除隊との話がある。私物命令は至る所に花を咲す。

◇拾貳月式拾参日

朝から雨となる、全く久方振りである。南京の市街を全く雨もやの中に包んでしまった。夢の町にしてしまった。近くの外人家屋の屋上高くに僅か雨にぬれて星条旗とか、英国旗、卍の旗も出ている。今月初旬の血で血を洗ひ砲弾の洗礼、敗残兵の充満、そして負傷者が右往左往して全く敗れた首都になるまいと如何程あがき、蒋介石の都落、国民政府の流れ全く暗黒南京としていたのに、十六万我皇軍の前に一週間後に首都は落ち、そして日本軍のなす儘にまかされていたのである。今は全く軍政府の下に安寧は維持されているので此の敗れ血を洗うかの様に冬の雨が降るのである。絹糸の様に、竹藪に池にクリークに小紋を画きしている。全く雨によって何もかも洗い去る事が出来ない大きな傷手であることであろう。

遠く見る南京の要塞地帯の丘陵地帯も雨で見られない。近く走る戦車の響き、自動車のとび走るを見る。避難民が何か買いに行くのか雨の中を籠をかかえて何処かに行く。ロバが間がぬけた馬鹿面を出して泣いている。

する事なしの一日、全く二階の部屋でごろりと横になって歌う、笑う、世間話とか地方の話、上海戦の激戦ぶり、戦死者の奮戦ぶりとか、それから地方で若い女を引掛けた話とか、引掛る手段とか、女郎買いの話、全く若い兵の話は全く女の話で夜が明け、又女の話で日を過ぎ夜を過ぎるのである。人間の生活から女の話を取ったら人間

渥里の建物の連りで、あの下に支那人のむさ苦しい人どうしても住んでるように想われない。

四方が全部盆地の中の街で全く美しい者である。あまり大きくないがまだ蒋介石の目的で発展途上にあるらしい。

近くの租界で米英仏伊独の旗が夕風と風雨にさらされ色あせてひらめくを見る。夜は降る星を戴き、遠く揚子江城壁は暗の中丘陵地帯に……ラッパが我々が歩哨に立っている所に淋く響き、陸軍の歌が、何処の部隊が歌うのか聞えて来る。難民の子供の泣く声、犬の遠吠も聞ゆる。電灯もつかぬ町はランプの灯が遠く遠く見られ、後の山の黒さに何故か不思議な対照をなしている。

足元を黒犬が静かに通り過ぎてしまった。足音一つ立てずに、我むかつてシツと声を立てる。我の方を見ている。全く馬鹿にしている様である。ランプ、ローソクそして闇の生活がすでに三カ月になつてしまった。何時此の敗れた支那に何時電気の灯が訪れる、再び電灯がつく折があるのかな。

◇拾貳月式拾五日

南京で大正天皇祭を迎える。午前四時から五時迄の立哨となる。地はすでに凍結して歩みの音も軽やかである。空には満月もすでに欠けて半月の月が下界を照らしているのである。遠くは眺められず、只、近くの家を貧富の差なく照らしている。影の如きは全く大きく、何故か空恐ろしい感をあたへる。難民も深い眠りに落ちてか音一つ響かぬ。

竹材は黒くうき堀の様に丘陵地帯の上に高く黒々と連なっている。犬の吠えるのが幾百となく内地の田植時の蛙の泣声の如く泣き

の生活は無くなるのであろう。全く一日の雨の中からこんな色話がつび出したのである。

◇拾貳月式拾四日

昨日の雨は相変らず降る。竹藪から緑色を増し、向いの外人屋根の屋根瓦の赤、緑、黄、灰色所々美しくなっている。然し相変らず前方の丘陵地帯は見る事はなし。昨夜の昂奮した話のは今はだに朝さめはせぬ頭は未だに重い。昨日は麻雀とかトランプをして遊ぶ。いよいよ停戦になったのかなと想われる。新聞は来ぬし、手紙は来ぬし、二・三日移動の為何もかもその為にとぎれてしまったのにせめて通信だけでも第一線兵の便をしてくれたらならば。午後三時から大隊討伐区域を警戒し、歩哨として上番す。我々は十字路下士哨として勤務するのだ。支那兵南京の要塞地帯と市内と連絡地点として未だ西康路・漢口路・十字路下士哨だ。

此の付近の避難民に混り尚残敵多数あり。此の下士哨は現在地付近に位置して大隊掃蕩地区内に入出入する大隊に属する以外の者の取締に任ずるのである。要塞地帯は丘陵地帯である。掩蓋壕の如きは其の奥を知らず、綱を張った様に赤土の山に張り巡らされているのである。

高地に上りて西方を眺めると揚子江の流れ遠く帯の流の如く見ゆる。赤い船腹を見せた船を見る。近く城壁の連りその揚子江の流れの間は湿地らしく湖沼を多く見られる。向うの山は揚子江の島なのであろう。南京近くで揚子江二叉になっている為に城壁の連りの内は行っても山岳丘陵地帯の連りで又要塞地帯なのである。

後は南京市街を一望に見る事が出来、全く立派な建物で、煉瓦と

吠ゆるのである。何処を走るのがかエンジンの音遠く流の如く聞く、足元を追えど幾度となく猫が去来する。下番になって此の日記を書く時にランプの芯がボンボンとなり、油がじーと音がする。ランプのもえる音をこんなに深く眺めた事もなかった。火鉢の炭火も赤々ともえて俺の足元を明む。控兵が暇の軒の声を高らかに吹奏している。家屋の中には外の響き一つ聞えず破屋を衛兵所として全く世を離れているの感である。交替に使用している腕時計がランプの炎える音と共に音を競争しているが然しランプの炎える中にボンボンボン音のするだけがランプの勝である。たゆまず音を進めるセコンドの歩みも又見るべきものがある。一分一秒の歩は永久に再び訪れる時はないのであり、我が此の歩哨となつていても再び生あつて故国に帰った後の事を考えると空恐ろしい感がする。

全く出発時一九八名の兵が無事六名南京に入ったのも運の強かつたのかそれとも此後、何かの我に対して試験にするのであろうか。

外に出て冷たい空気にふれ流れる星を眺め又一入の淋しい感なきをあたわず。

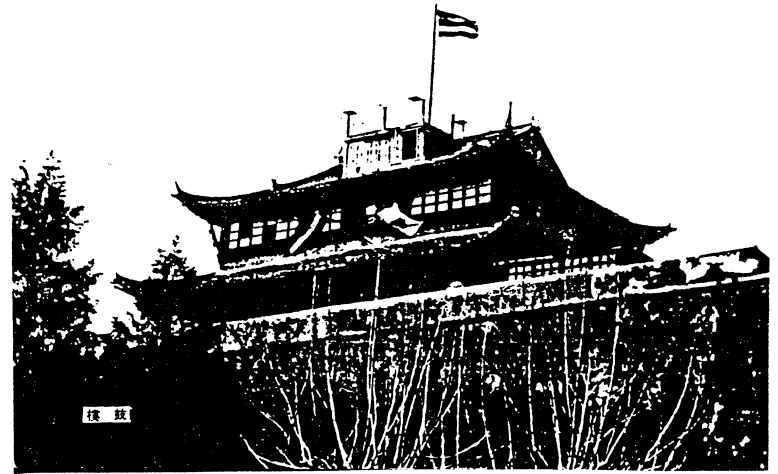
時に午前五時四十分の記

初年兵の手記

「硝煙の合間にて」

歩兵第七聯隊第一歩兵砲小隊 N・Y 一等兵

(誌上匿名)



鼓樓にひるがえる維新政府の旗（三月二十八日成立）

の一番乗りを誰も焦っているのだろう。

「一将功成り万骨枯る」と言う文句が頭に閃いたけれど自分達の脳裡にもやはりそんな功名を狙う気持があった事は否めなかった。何時しか広い道路になった。

夜も又次第に明けそめて空もはのかに明るく星かげも淡くなつて来たクリークには薄氷が張っている、白い道路が一筋の帯を敷き展べたやうに黎明の中に浮んで見え、果ては朝霧の中に吸い流れていた空が段々明るくなるにつれて道路や雑草や家々の屋根にしらじらとした霜が冴えているのが判ってくるのであった。

十二月九日

七時頃高橋鎮に着いた。屑石を敷き均した舗道をぐざりと半分位割りとして拒馬（丸太の杵に有刺鉄線を巻きつけたもの）出した、外に地雷を埋めたような掘り返した跡があった。三十分休憩、その間に朝食、装具をおろし、飯盒を提げクリークに走る。サクサク霜柱が折れて畑の中は歩き易かった。水は透き澄んで手を刺すやうに冷たかった。水底にゆらゆらしている藻を静かによけ乍ら、浮草を入れない様にして水を汲んだ。民家はすでに手当り次第のものを燻べて焚火が勢よく燃えていた。アンペラをめぐって来て燃やしている組もあった。めらめらとのびる焰を遠まきにしてあたっているというとうとうと睡気を催してくるのであった。朝食を終えてから又本道を前進する道路を横ぎった。クリークの岸には物々しい土囊を積み重ねたり、まだ未完成らしく赤土を堆積した無数の銃眼が、うつろなまなこを見ひらいて道路を睨んでいた。鉄筋コンクリートの橋はさすが落ちないらしく拒馬が幾つも並べてあった。三十六聯隊がもう城壁の一部へとりついたとか、いやまだ確保されてい

十二月十日

翌朝は未明又出発した。夜襲の時のような慎重さで靴音を忍ばせて歩いた。道路のかけを伝って土まじりの間を縫う様にして進む、空が白んできた頃道路の法に藁を掘って夜を明かした。小銃中隊の人たちに会った。橋を渡った頃、道が違ふことが判って又元へ引き返した。本道の上を四列になって歩き出しながら、先刻までの慎重さを思い出して滑稽な気持ちにさえた。

又畦道になって少し行くと鉄道線路に出た、すぐ向うに鉄筋コンクリートの建物が見えた、鉄道線路のすぐ横の部落についてから待機と言うので落つかぬまに憩んでいた。

昼食をすぎてもまだ出動する気配はなく、空はうすもりで風が非常に冷たい、天幕を被ったり刈り集めてあった枯草を敷いたりして寝ころんでいた。昼食を終えてもまだ動かず附近の畑から野菜を採ってきて合同炊爨を始めた、飯が炊き上り汁もほとんど出来上った頃不意に砲弾の炸裂する音とともに煉瓦を積んだ壁がぐずれ落ちた。続いて三発位もきた、しかしそれらは自分たちの家の回りへ落ちただけで幸に負傷者は出なかった。この部落が狙われているらしいので、早速装具引っかけ、飯釜を頭に冠るようについたり汁釜を下げたりして鉄道線路まで避難した。土手のかげには巧みに削りぬいた掩壕がいくつもあって風色の支那毛布がすててあったり、鉄帽や湯呑、魔法瓶等が取りちらかしてあった。鉄道線路は小高い丘陵を切り取って、つやを失ったレールが土手のかげに曲りかくれていた。曲り角のあたりにダイナモを据えた無線班がヒューヒューと把手を回して発電していた。土手の上の藁の中には重砲の観測陣が布かれる、砲隊鏡をずらりと並べ図板を胸にあてて砲兵の人たちが忙

たかと言ふことが何処からともなく伝えられてきた。もう携帯していた米を今朝の朝食に費ひ果した自分たちは、そうした行軍間にも米を探さねばならなかった。

先頭の方の者が見付けたらしい南京米の袋がちらかされていた。取り残して行った米を見つけて自分たちも鉄帽の中に詰めたり、靴下に入れたりして歩き乍らそれを頒けあった。南京迄はもう地図を見ても二里とはなかった。銃声も相当に間近く激しく聞えた。途中で命令がきたらしく二時間余り休憩があつて、自分達は早速民家に入って焚火をした。アンペラを敷いてみんなは泥の様にごろごろ寝した。敵の砲弾が民家の後のクリークを距てた畑に熾んに落ちた。しかしみんなは何事も知らぬげに睡っていた。午後になってようやく自分達の大隊の戦闘正面が定まって、又本道を引返し細い畦道伝いに行軍を続けた。

畑にはネギがあつたり、部落にはおどおどした土民が自分たちを見ていた。自分達はてんでにネギを取って夜食の汁に入れる事を考へていた。部落に入るときまづ二、三人の兵が竿をふり回して鶏を追いかけるのであった。名も知らぬ部落にクリークの水を汲んでネギや鶏を入れた汁を嚙りながら夕食をすませたのは十一時すぎであった。夕食を終えてから又出発をする。月がクリークに青いかげを写し出した、その部落を出発してから本道に出たり、クリークに沿ったり、畦を伝つたりして相当歩いた。途中他の部隊の歩哨が立っていたりした。何処の師団ですかと聞く。十六師団です……等と答えたり、もう諸所の部隊が此の辺に集っているらしかった。宿営すると言ふ部落についたのは一時を回っていた。敵が近いと言ふので藁を手送りしたりして床を作り寝た。

しげに動いていた。夕暮の空にぼかりと浮んだ気球が陵線上に見えたりした。

土手の上に上るとうねうねした丘陵が幾重にも重なって南京の城壁が鋸のように連つているのが見えた。レールに腰を下ろして暖かい夕食を摂った。小隊長殿と同期の砲兵将校が来てお互に奇遇を話しておられた。「遠い気球が大分近く迄出たな……支那軍の方には四十倍位の眼鏡があるそうじゃないか、ナニニ日本だって顕微鏡なら二千倍位があるじゃないか。それより百米でも五十米でも前へ出て見る方がよっぽどいいだろう」などの会話を興味ぶかく聞いていた。夕闇があたりを包んでしまつてから昼間のうちに見ておいた家に入つてやすんだ、その家は土手の上にあるので流弾が時折ヒューンとすぎて行つた。

十二月十一日

くらがりから起きて飯を炊き、朝食を終えてすぐ出発した。昨日の部落のかけからコンクリートの建物迄一気に出了、建物は陸軍教導総隊の兵舎で水道もまだタンクに残っているのか清冽な水が出て来た。兵舎は殆んど爆撃にでもやられたのらしく屋根はぬけて柱や梁も焼け落ちていた。ホーロ引きの厩舎とか、教官室とか、書いた札が打ちつけてあった。校庭のバスケットボールの柱の附近に砲を据えて、観測手丈が竹の矢来を組んだ塀にくっついて観測した。機関銃がすぐ横でダダダ、ダと火を吐きだした。銃眼がやはりくっついていて、敵兵の姿がねずみの走るのうに見えた。一線の小銃中隊が果敢な突撃に移ると、自分たちも砲隊鏡を撤収して躍進した。敵の間を走り、クリークの湿地を越えて堆土への躍進して行くのであった。クリークにせばめられた畑地には、きまつて拒馬や鉄条網

が張ってあった。弾丸がビュービュン頭上をかすめた、補充で来た年寄の人達は非常な慎重さで自分たちを追いぬいて行った、自分はナーニあたる時はあたるんだと言うような捨鉢な気持で追い越され乍らゆっくり走った。

工兵学校のすぐ後の土手にとりついた時、一諸にいた小隊長殿からあの白い三階建に敵がまだいる、狙撃しているから壕に入れと言われて匍うようにしてすぐ横の交通壕にずりこんだ。壕は思ったよりも深く、背丈迄あって底には濁った水が溜っていた。小竈にもバルコニーから半身を出して狙撃している敵兵の姿が目に入った。小銃を持たぬ自分たちには何ともする術はなかった。戦砲隊の人が到着すると少し休んでから工兵学校の校庭に入った。洗臉所と書いた小さな建物に腰を下ろして暮近い空を眺め乍ら今日の戦闘の事を話していた。三階建の敗残兵はやはり熾んに射っていたが、遮蔽物のおかげにこうしていると何かしら心安まる気になるのであった。バリバリと乾ききったチエッコ（軽機）の音が耳に痛い位近かった、屋根の瓦を何度かぶちぬいてそのかけらがバラバラ落ちてくるのであった。校庭の花壇には紅い花が枯れすがれて、赤大根や葉っぱが山の様に積まれて手榴弾がごろごろしていた。小さな教室みたいな室に坐りこみながら赤大根を噛った。ほろがらい大根の味はずしりと水気を含んで舌にしみた、装具を外して身軽になった。小銃中隊の人たちが慌しげに菜「藁」の束を抱えて往来していた。白い三階建の残敵を焼き打ちするのだそうだった。もとも建物鉄筋コンクリートなので、それは不成功に終り、少なからぬ損害があったらしい。夜は被服庫の様なガラシとした部屋となりを仕切って、屋根裏の明り窓に迄其座をあてたり灯火の洩れない様にして

泊った。炊爨はともて学校の出来ないので各分隊から当番が出て、三百米も後方の部落迄行った。十日位の月が中天にかかって銃声もまばらな物静かな夜であった。

十二月十二日

早朝出発、学校すぐ後の土手のかげに砲を据えた。自分達は又交通「壕」伝いに敵情偵察に出た、曲りくねった壕の中には、いくつも敵の死骸がたおれていた。霜が解けはじめる頃になると又生々しい血が流れ出すのであった。砲隊銃を据えらるとう目ざとく見つけ出したらしい狙撃の弾が飛んできた。危険があるので折よく敵が作ってあった掩蓋の中に入った。銃眼になっている所から眼鏡だけを覗けて観測する、残り少なくなった弾を射つ、平射砲もすぐ自分たちの横に土囊を積んで射撃し出した。この壕は割合高地にあるのと前がゆるい傾斜になっているので、南京は一陣「望」の裡に入った。頭上をかすめてとど重砲弾が小気味よく城壁の一点に命中して煉瓦がその一弾毎に崩れおちた。中山門もその横に書いてある「忠孝礼儀」の文字も鮮やかに見えた。

砲弾の破片や飛び散った煉瓦にきらりと水柱が立ったので、城壁の前に大きな水濺が横たわっている事を知った。眼の前の後庄の部落はもう友軍が入って日章旗を立てたりしていた。銃眼の後にへばりついて狙撃している敵兵の姿も見えた。自分達の曲射砲では射程が短かすぎて射てないので、平射の香林（同年兵）に言ってやる、照準をつけてぶっ放すともうすぐ逃げだした。そして一旦後方の凹地へかくれて又小さい木立の間を匍い出してくるのであった。それが一々手にとる様に見えるのである。「香林今の銃眼より左八十こんもりした木の根元だ」「よし」……とばかり拉縄を引くので

あった。轟然たる発射音が耳に残っている間にも眼鏡の中の立木ははつきりと倒れて行くのであった。二人共「やった命中だっ!!」と顔を見合す。遠く頭を回らせば紫金山の中腹に傲然と聳え立つ白亜の殿堂天文台にも巨弾を引っ張りなした落としていた。重砲にたたきのめされた城壁の上にチヨロチヨロと二、三名の敵兵が顔を出して土囊を積み修理し出した。砲撃の合間合間の仕事である。支那兵の執念ぶかさを今更の様に思った。殷々たる砲声は大地をしゃんかんさせて、颯々と山腹にまで連なる南京城の城壁も一弾に凋落の一路を辿ってゆくのであった。午後になって一線の方も相当進出し自分達は少し暇になって来たので、脱ぎすてあった敵の防寒衣を敷いて窮屈そうに壕の中にねころんだりしていた。だんだん陽が傾いて

きた頃、城壁に沿って右中山門の方へ移動してゆく夥しい敵兵の姿を見た。千名位もいたろうか、すぐ陣地をしいて射出機関銃に倒れたり躓いたりして走ってゆくのであった。友軍の飛行機は高射「砲」撃を巧みにかわし乍ら敢然たる爆撃をやってゆくのであった。今夜は又工兵学校に泊る事が判って今隊の人達が準備に行ってくれた。砲を掲げ砲隊銃を撤収して学校へ帰った、裏門附近にいい水があったと言う事をきいていたので、飯盒を下げて校庭の赤大根を拾って水を探しに出かけた。学校内ではやはり工兵らしく大きなミキサーやレール型板等が雑然と積まれて、壕等も大きなものがいくつも作られてあった。水はどこにあるのか仲々判り難かったが、折よく飯盒を下げてきた兵に会ってその在りかを知った。小さな水溜りで畑をよぎった杉木立の中であった、流れ弾がヒューヒューと近く、戦闘間に覚えた事のない恐怖を感じた。手早く米をかしぎ大根を洗って帰途につく、短い畑を横切って道路迄

出た途端に轟然たる炸裂の音を聞いた、すぐ後の今すぎたばかりの畑の中に砲弾が落ちたのである。

十二月十二日、南京攻撃

畑の中の黒土が二、三尺も掘られて煙硝の匂が立ちこめていた、走る様に校内に入った、裏門のすぐ傍の倉庫の中に、石油の空缶を並べて、あり合せのショベルの柄に飯盒を通しかける。醬油のエキスを忘れて来た事に気づいて校舎の方へとりに行った、ミキサーなど置いてあるバラックの横あたり迄来た時、頭をかすめる位の低さに砲弾の音がした。ヒューッと木枯しが身を切る様な音だ。思わず頭を下げると砲弾は校舎の屋根に命中してモウモウたる黒煙が吹き上って来た、駆足でみんなの所へかえる。途中にも三、四発爆音が地をゆりうごかしてきこえた。先刻の弾は大隊本部の屋根にあたったのだが、天井板が厚く負傷者は一名もなかった事を聞いた。裏門の方にもやはり砲弾の落ちる音がした。倉庫に一人炊爨をしているHさんの事を案じ乍ら醬油エキスを持って走った、砲弾は一しきり落ちて来たが建物には当らず、徒らに校庭に孔を穿つのみであった。夕食を食べ乍ら昨夜の三階建に籠っていた敗残兵を全部引き出して処分してしまった事をきいた。三階建の下に続く大きな掩壕にひそんでいたのをおびき出したそうだ。夜に入ってから砲弾は来なくなった。

十二月十三日

うつらうつらしながら夢のように万歳の声をきいたりした、又飯盒を下げて昨日の所まで水を汲みに行った、裏門を出た所に舗石をはじき飛ばして大きな弾痕があるのを見た。炊きさんしていた所から二〇米とは離れていなく、弾痕から推して十五榴かもっと大きな砲

だろうと思われた。池のふちに水を汲みながら昨夕に比して銃声も全く聞えず、物静けさに敵は昨夜中に退却したと直感した。炊爨を終えて小隊の所へくると、もうみんな装具をつけ、砲を下げて出発の態勢であった。口々にすぐ出発だと知らせた。部屋にとび込んで装具をつけ終って出て来た頃には、もう各中隊の方も自分たちの小隊も動き出していた。飯盒の汁を気にし乍ら走った。裏門に出ると、畑をよぎってジグザグに掘られた交通壕をとび越えたとび越え走り出した。昨日自分たちがいた丘陵の上までくると、ゆるい斜面を一行になって進んでゆく友軍の部隊が見えた。城壁はまだはれきらぬもやの中に淡く見えた。後庄の部落をすぎて、昨日敵がぞくぞく移動して行った小径に出た。

累々たる死骸が折重って倒れていた。畦道を伝って水濠のふちに
出た、その小径は幾箇所も壕を作るために切られて底に水が溜っていた。満々たる水を湛えて水濠には枯れすがれた芦がカサカサとあっていた。砲弾の炸裂にやられたらしく大きな魚が、いくつも白い腹を見せて浮いていた。水濠を横切って城壁の真下に出た、城壁は十四、五米の高さを持って厳然と屹える青々と苔むして、幾千〔年〕来外敵の侵入を拒んだ歴史を誇らしげに見せている。重砲が作ってくれた破壊孔は大きな煉瓦が崩落して急峻な足がかりを作った。半分程から上には、急造の梯子がかかって朝露に濡れた様子は、ともすれば足をふみ外しそうにだった。城壁に立てば、今しがた樹てた日章旗が朝風にハタハタと爽やかな音をたててはためいて、万歳を唱えるには余り他の隊の人たちがいて間が悪かったが、言ひ知れぬ感慨が湧然と湧いてくるのであった。

背囊の底からまだ折目新しい日章旗をとり出したり、風呂敷代り

た。爆弾を投下したのは敵機であったとか、種々な臆説があったけれど、それは今でもつまびらかではない。

昼食もそこで炊き込んだ、畑はねぎやなつばもふんだんにあった。午後になってから漸く掃討がてらに市内へ入った。橋梁の上には拒馬が又幾組も出してあって進路を阻害していた。地雷を埋めたとあると言う、掘り返した所も多かった。自分達は極めて慎重に先者の足跡を辿るようにして進んだ。飛行場に出た。飛行場の隅のコンクリートにはさかさまに突き立った敵の戦闘機もあった。格納庫も爆撃にやられたものか無惨な形骸をさらして、内部には一、二台の飛行機が骨組だけになったりしていた。狭い路次をいくつ曲がって復成橋と言う橋のたもとに出て又休憩であった。日本に十年ばかりいた術（支那人を謂う）（尔）がいる。そのまわりをとりまいていゝるんな話を交わしていた。自分は城内に入るも差当って米がないと言うので、川の岸に腰を却ろして凭れながら今しがた拾ってきたばかりの中華民国地図を拡げてみた。上海から南京の大きな都邑の名を拾いながら支那全般から見て地理的にはその余りの狭さに今更愕いたりしていた。

十三日、南京城内

此の附近に今夜は泊まる事になって自分達の小隊は第一公園のすぐ横監察院の一室を片づけて装具を下ろした。門の所にもすぐうしろの公園にも幾台かの自動車があり捨ててあった。動くのがあればと思つて物色に行つた、大抵の車はバッテリーが上つてしまつたり、その他自分には細かい所は判らなかつたけれどもいい車はなかつた。又新しい車にはもうすでに二、三人の運転手でもしていたらしい兵が、ボンネットをまくって点検したり修理していた。出の

に使っているのを解いたりして、竹ぎれを拾つてきて、めいめいに樹てたりした。城壁の上にはいつしか幾旗かの日章旗が樹られ、この記念すべき日を祝福するかのよう、空は次第に明け放たれて行つた。これ迄蘇州や常州のように城壁に接して市街があり、市街戦でも一苦勞ある事だろうとひそかに覚悟はしていたのであったが、城内はまだ四、五百米もの畑地を行かねばならなかつたのには、失望に似た気持であった。城壁を下りて畑の中に休憩しながら漸く朝食をたべた。大隊本部へ集合で行かれた小隊長殿が御下賜の煙草を二本貰つて帰つて来られた。二列に並んで順番に一口宛吸つて回した。ささやかな意義深い祝福をやつた。その頃になつてもまだ陸続と部隊が城壁を越えて上つて来た。日章旗を打ちふり乍ら万歳を叫んでいるのには何だか軽蔑に近いものを感じた。

茅屋の前に積まれた薪の山の裾がカサカサ動いて土民の一家族が這い出してきた。巧妙な偽装をこらした掩蓋なのであった。敗残兵かと一寸ぎくりとしたが土民なのが判ると、配給されたばかりのピスケットや乾パンなどを与えて、誰もが和やかな気持になつていた。飛行機も朝陽に銀翼をきらめかせ乍ら、一千米位の上空を飛来してきた。紫金山を眺め或は空を仰ぎながら、今日の榮譽ある日をまたで壮烈護國の鬼と化して戦友や傷つき斃れた人たちを語り合つて、一抹の感傷に浸つていた時、轟然たる炸裂の音が耳をつんざいた。飛行機が爆弾を投下したのである。

南京城内

みな持合せの日章旗を出しあつて早速地上に標識を布く、飛行機は漸次高度を下げ乍ら慎重に偵察を初めた。

そしてそれが友軍である事を確めるや、又何処かへ飛来し去つ

早い月はまだ中天に懸つて、木立を透かし蒼い月光の下にコンクリートのベンチが灰白く浮んで見えた。何かなしセンチメンタルな気持になつて淡い月光の中の木立を縫つて彷徨つた。

十二月十四日、南京城内

南京に入る迄は洗わないと変な所に意地張つて真黒になった顔を半日中かかつて洗つた。お湯を沸かして石鹸をつけるのだから何だかこすつても同じ様に手拭は汚れてくるのであった。垢まみれのシャツを洗つたりしていたが、午後は又移動であった。移動と言つても復成橋を渡つたすぐの所だった。軍官の官舎とかでコンクリートのきれいな洋館が同じような建て方でいくつか並んでいた。家具なども相当凝つたもので傷まさないようにとの達しであった。小銃中隊は市街の方へ掃討に出ている。砂糖や煙草がもうなくなつてしまつた。自分達には羨ましいものであった。自分達の入つた所は商業地帯に遠い関係で、南京に入つたらふんだんにあるだろうと思つていゝると砂糖煙草も一切のものは期待外れであった。夜、灯すべきろうそくやランプすらも見当らなかつた。

田舎の方のへんびな部落には大抵ランプやろうそくしかなかったのだけれど、電灯の普及している都市にはそれらのものは極めて不自由であった。又田園と違って藁などは殆んど使ひ程ないのであるが、その代り都会の家には大抵不足ながらも我慢し得る位のふとんがあった。栓をひねつても滴しか出ない水道なので、水もやはり不自由勝であった。

午後部屋を片付け終つてから水を探したり又今夜のお菜にするため材料を見つける為に堀田さんと二人で家を出た、南京には占領と同時に多くの憲兵が入つて軍紀風紀の取締についていると言われて

いたので、自分達は裏町づたいに家を覗いて行つた。ランプがあつても油がなかったりして何も目星しいものは見当らなかった。工場のような建物の裏を回ってクリークの野菜畑をよぎると鉄道線路に出た。ずっと向うから五、六人の兵がわいわい言い乍ら走ってくるのを見つけた。豚を追っているのであつた。真黒な子豚が五、六匹、一かたまりになって逃げて来るのを見ると、何だか急にその豚が欲しく、追いかけてくる兵たちも自分らの姿を見て「オーイッそれをとめてくれ」などとわめいた。早速枕木の間から手頃な石を拾って投げつけた。先頭の少し大きな豚がクルリと頭をめぐらすと他の小さな豚も又それに蹤いて回った。又追手の兵が竹や棒つきで追いまくると豚は段々間隔がせばまってくるものと猛然と自分たちの方へ走り出した。先頭の少しばかり大きな方が一頭棍棒でなぐりつけられて捕まると、あとの四匹はそのすきを狙って逃げ出した。その兵達はそれでもういらぬらしく、そこに止まって何かしていたが自分達は何だか意地になってその一かたまりの豚を追いつけた。豚といつても走り出すと非常に速くとても追いつけるものではなかった。線路が踏切にかかるとその一団は横へそれた。戸を締めきつた人影のない町をどこまでも追いかけた。路が曲り角になると豚はまるで自分の家へでも行くかのように、さつとどちらかへ曲ってしまったのであつた。又鉄道線路に出た、もう自分たちも疲れてしまったので横の通りを先まわりしてはさみうちすることにして、堀田さんが走つた。手頃の竹ぎれを握って、今度こそはと意気こんで頃あいを見はからつて家から飛出すと、豚はすでに反対側の路次へ逃げゆく所であつた。嘲弄されているような腹立たしそうな感じで、今度自分達が追つた。狭い露路をいくつか曲るとそこは袋小路であつた。

た、行き詰つた豚が右往左往し出した。もう大丈夫と自信をつけて、先ずは堀田さんを見に引返し銃剣を抜いて路「地」に二人並んでちりちり追いつめ出すと、逃げ場を失つた豚が窮鼠の勢で飛出した。一撃をくらわしてはったり斃れる。やつた!! すぐ突く。軟い感触が手に伝つてきた。生き物殺める気味悪さを感じ乍ら二人はホッ顔を見合せて笑つた。足を両方合せてぶら下げ乍ら帰つて来た。かえり道自分達の家のすぐ近くきれいな井戸のある事を見つけて、かえるとする炊爨の準備であつた。井戸は門構えのかげで一才判りにくいで誰も汲みに来なかった。米をかしぎ終えてからその家に入った、乾餅の空缶や、粉が一面に散乱して、家具なども相当あらしまくられてあつた。

窓際に一つの金魚鉢があつた、うす青くにごつた水の中に大きな尾を引き乍ら二、三匹の金魚が泳いでいた。暮近く仄暗い部屋の中にひそやかに泳いでいる。金魚は撒きちらされた室内の雑然さに対照されて、如何にも物静かであつた。窓際に一台のピアノが据えてあつた。蓋をまくって鍵をたいて見る。おぼつかない、谷間の灯ともる頃「や」野ばら」を弾いてみた。いくつかの想出がその一つの音階と共にふつと浮んではずく消えた。急にハツとして立上るともう夕暮があたりを包んでいた。夜になってから麻雀でもやるかと思つて隣の家に居る一、二分隊の方へ訪ねたが誰もするものはいなかった。月がくつきりと冴えて、コンクリートの玄関に門柱や藤棚の影をあざやかに落としていた。

工兵学校迄護衛兵器をとりに行く使役があつて四時半頃に出かけた。八時半頃から又移動するので、それ迄には帰つて来なければならなかった。月がかくれてしまつて一寸先も判らない闇であつた。

懐中電灯を時々明滅させ乍ら歩いた、道程は昨日行つて来た者に聞くと一里半はかんたんにあると言ふ事であつた。第一公園の横を西に曲つて大分行つた頃どこかの部隊の衛兵が焚火にあたりながらいた、起床起床とどなりあるいている部隊もいた。並木が夜空にかすかに透かして見える、その並木の下には幾十頭かの軍馬が繋がれてあつた。光華門に着く。復哨が立っていて自分達の行先をきいたりした、隧道の様な長い城内は積み閉してあつた土嚢を崩して均らしたらしく非常に歩き難かつた。行けども行けども工兵学校へは到達しない様なもどかしさであつた。ようやく学校に辿りついた。学校の前にも歩哨がいて誰何した。校庭の木立を縫うようにして校舎につくと、そこは兵士達が飯盒炊爨をやつていた。明けの遅い師走の朝はまだ焚火に照らし出さなければ顔が判らなかつた。

十二月十五日、南京城内

昨日運搬出来ず預けて行つた弾薬を持ち出してきた、大きな筈に小銃弾が盛り上つていて五人位かかつてもとてもそれは持上らなかつた。柄付手榴弾も百発近くあつた。被服庫から敵兵の穿いている軍袴(ズボン)や巻脚絆を持ってきて、ズボンの裾をくりその中にざらざらと小銃弾を詰めた。振り分けにしたり巻脚絆に背負ったりして小銃の後歩き出した。空は漸く白みかけて、校内の前に据えてある鹵獲飛行機なども判つた。濃緑色の機体は殆んど傷まず胴に書いた〇〇部隊鹵獲飛行機などの文字もそれを読めた。並木の道を急いで歩いた。霧が非常に深く並木の幹も舗道の敷石も一杯にしつくりと濡れて、少し間隔があくともう前行く人影はかすんでしまった。宿营地付近には殆んどないねぎがあるので、自分達は列を離れてねぎを取り「に」畑へ下りた。ごぼりごぼりと根元からぬいて泥

だらけのまま抱き乍ら列を追つた。三十六聯隊が不朽の戦果を収めた光華門も空が漸く開放たれて見る事が出来た。道の両方の傾斜には無数に塹壕が掘られ鉄条網が張りめぐらされ、城壁の上に立つては何処にも死角は与えられなく片方の水壕には水が満々と淀んで、静かに城壁の影をやどしているのであつた。三十六聯隊の人達の苦労が犇々と迫ってくるように感じられた。道端に落ちていた紐を拾つて、ねぎを束ね乍ら急いだ。列には仲々追いつけなかつた。捷徑らしい道を選んで歩いた。弾薬の届先聯隊本部に着いたら、外の者は荷物を卸ろして一休みした所であつた。聯隊本部を出て少しばかり来ると一頭の裸馬が逃げてきた。路地は狭いし二人程並んで大手を拡げると馬はすぐ引返して丁度横にあった学校の校庭に入ってしまった。追いかけて出てきた兵に「あの馬捕えるから俺達にくれよ」どうせ支那馬だからどこからか拾つて来たんだらうと思つて言うのと相手も「そんならやるよ」とばかり帰ってしまった。もう今から隊へ帰ればすぐ移動だと言ふし、馬の頭でも居れば助かるだろうと言ふので、手分して追いつめると馬は校舎の中に逃げこんでしまった。廊下は行き当りに小さなドアがあるだけだから逃げ場もない、蹴り上げるのを避けては漸く捕えた轡をかまそうとすると非常に強暴なのだが、唯索いて行く分にはとてもおとなしいので、早速ひいて帰つた。途中にも又一頭放馬した支那馬がいてその馬のあとからどこまでも蹤いてくるのであつた。小隊の宿舎迄持つてかえつてくるともう残つていたものは皆準備を整えていた。冷えきつてしまつた味噌汁をかきこんですぐ出発す。馬はわざわざひいてきたものの駄載しようとすると思つたより狂暴なのと馬糧もないと言ふ理由からすててしまつた。摘んで来たばかりのねぎをさげて、弾

薬やその他の重いものはどこからか拾って来た人俵に積んで行軍した。裏町を四、五百米も進んでゆく中山路に来た。アスファルトの舗道が坦々として道幅も非常に広く車道と人道との間は細長い並木が植えてあり、両側には大きな建物が櫛比していた。蘇州や常州のような田舎臭い所はみちんもない堂々たる一國の首都の貴族が感ぜられた。

十字路の中央には大きな円形の花壇のようなものが作られて、その中には爆弾の形をした塔が立っていた。防空の觀念を市民に植えつけるためなのであろう。建物の煉瓦壁には中山の教訓と思われる字句が筆太に書きつけてあった。商店街の中央大戲院の前で暫らく休憩した。軽装甲車が幾台もキャピラを、アスファルト舗道を叩きつけるように地響を立てて通りすぎた。〇〇部隊と貼紙したトラックや乗用車が引きりなしに往来した、又そこを出発して日本領事館に着いた、領事館にはすでに歩哨が立って警戒についていた。証明書のない方は誰であつても入れてはならない事になっていますと言っていたが、自分達は領事館に待ち合〔せ〕することになっているのでその旨を告げて門をくぐった、コンクリートの門柱には白黒で岡野部隊？十二月十三日午後〇時〇分占領と書きつけてあった。領事館は古風な支那建築で屋根の上には真新しい日章旗がほこらしげにひるがえっていた。建物の中にはもう執務しているとかで静粛にしてくれと言う事を守衛が来て伝えて行った。領事館は小高い所にあつて建物のまわりの木立を透して近隣の屋根が見下された。隣の西洋館風の建物には傾斜の急な赤い屋根に大きくアメリカの国旗が書きつけて対空標識にしてあった。構内は道路より相当奥まった所にあるので自分たちは又装具を持って坂を下り道路まで出た。連

まねで命ずると、坂まで押されて坂を走り下りる力でエンジンをかけた。エンジンがかかればこちらのものだ。すぐ運転台にすわりこんでハンドルを持った、サイドカーも一台くれた。鼓樓のまわりは循環道路になっていたので何度も交る交るに誰かを乗せては廻った。又本道の方へも何度も走った。久し振りにハンドルを握った嬉しさと道路がよいので、五〇や六〇Kのスピードはすぐ出せた。乗っているものは恐しそうな顔をして、幾度かスピードを落せと言ったが道路は広いので自信はあった。何遍めかのドライブウエーをして帰ってくると索野鎮以来別れていた弾薬分隊が到着していた。サイドカーも故障がなおってやはり同じ様に乗り廻していた。ガソリンが少いのでガソリンスタンドを探しに出た、本道への通りにスタンドを見つけて、ポンプを押したがどうしてもガソリンはとれなかった。誰かが裏の倉庫から半缶ばかり残っていたのを見つけて出してきてサイドカーのタンクに入れた。さて帰ろうとするとそれはガソリンではなくて水であつたので遂にエンコしてしまった。仕方がないのであり合せのロープで自動車に繋ぎ牽引して帰る事にした。漸く宿舎にする家が定まったので、領事館の前を出ると出発したのはもう夕暮近い頃であつた。背囊や嵩ばるものを自動車に積んでいると鼓樓寺院の先刻の運転手がガソリンを十缶ばかり持ってきてくれた。それらを全部を積んで宿舎へ走った。宿舎になる家は三階建の大きな家で難民が一杯入っていたのであつたが、自分たちが来ると聞いて続々又一式の家具を担って出ていった。夜具も釜も何にも残っていないと言うので、今朝居た家迄自動車とりに行く事になった。

大通りを往来する自動車と一緒に自分も走った、今朝の家まで行

絡がつく迄何処へ行けばよいのか判らぬので薄ら陽を仰いで休んでいた。道路は自余り通らなかつたが支那人や西洋人が時々通りすぎた。九師団は南京に駐屯して警備につくのだと言う事が何時からか相当な真実味を持って伝えられて来た。三師団が一番活躍し又苦戦した上海付近は三師団が警備についていてそのため南京は九師団と十六師団が攻撃したので九師団が南京一番乗りをしたのだから当然ここは自分達が警備につくと言うのであつた。警備それが唯一の念願であつた。毎日行軍や戦闘に精神的にも非常に疲労し困憊していた自分たちには、その抛り所のない風説すら信じて疑わなかつた。そして領事館の前の芝生に寝転んで今日迄後生大事に持っていた最後の缶詰を切つて食った。午後になつても連絡がとれぬままに動かずにいた、どこから持ってきたのか消防自動車を二台支那人の消防手に運転させ乍ら海軍の兵が乗って行った。自分達も自動車を探索うと思つた、丁度その時何処かへ行っていた堀田さんが自動車をやると言ふから一緒に来いと言つてきた。すぐについてゆくと領事館の前の小高い丘の上にある大きな寺院に上つて行った。寺院は「南京鼓樓市民教育図書館」と言つて境内には大きな大鼓を吊してあつた。その裏の車庫には消防車が五、六台もあつた、フォードのV8であつた。やるというのはV8であつた。ボンネットをまくつたり、ギヤーを入れたりしてみたが、新しいその車はどこも傷んではいないようだった。唯鍵がないのである。シートの下からドライブバーやベンチを出して、鍵を外してやろうとした。その中運転手なのであろう若い男があたふたと鍵を持ってきてくれたので、漸く外しかけたボルトを又締めなおして鍵を入れた。バッテリーがうすいのでセルはきかなかつたが、その運転手にエンジンをかけると手

くともう誰かが荒して行つたらしく自分達が丁寧に扱っていた家具類も壊されたり鍵のかかつていたドアなんかも打ち破つてあつたしかし夜具や釜のようなものは殆んど残っていた。三度ばかり往復して漸く夜具は配給できた、自動車は狭い門の中に入に入れて門を閉じた。

十二月十五日、南京城内

蘇州の想い出 今のうちに何時か書けぬままに残しておいた蘇州滞在記を書いておこう。宿舎は蘇州東方觀前大街の「光舟鳳」と言う料理店であつた。小部屋が八つ程、二階に並んで居る所へ五、六人宛分れて入つた。床に蓆を敷いて集めて来た布団を幾枚も敷き重ね、夜は丁度向いの家が炭屋なので火鉢には一夜中炭を絶やさなかつた。料理店のこととてかまども大きく合同炊爨をやり、物置の中に堆く積んであつた筍の缶詰をいくつも切つた。砂糖も多々あつた。どこから採ってきたのかサイダー二、三打もあつた、オレンジ水もあつた、大抵の者は新しい麻雀牌を持っていた。自分も二日目に皆と一緒に徴発に行つた。支那軍の将校がいたらしいアパート風の中には、モーゼルやブローニングの拳銃がいくつらでもあつた。お寺の様な建物の後の新屋には豪華な家具調度品が無残に踏みこじられて化粧品等のビンがまきちらされていた。とにかくどんな豪華な家でも大廈高樓でもすべて荒されてない家はなかつた。そり立つ城壁の銃眼の上には朝風に日章旗が幾度も翻っていた。砲弾に崩された煉瓦が堆く積まれて梯子を伝つて上つた部隊の日章旗を打振つて高らかに唱える万歳の声は遠く連山にこだまして、何かしら眼頭には熱いものがこみ上げて来るのであつた。昨日壕にいて書いていたように自分の予想は當つて今日はもう城壁を越えること

が出来、この日を祝福するように空には一点の曇りもない日本晴れであった。城内の畑に腰を下ろして朝食を終え、大隊長殿から下された御下賜の煙草を一口宛吸ってささやかなしき意義ある祝福をやった。家人がまた避難せずに居る所も、誰も居ない家もすべて一様に荒して行ったのである。外人の住宅らしいベランダももうめちやめちやに破壊され、大輪の菊鉢がいくつもいくつも叩きわられてあった。そして大抵の家には空襲の際に避難したのであるうか掩蓋が作られてあった。滞在していた僅か四日間の間にはもう無数の火災を見た。大隊本部のすぐ横、青年路のデパートもやけた。窓から紅蓮の炎を吐いて燃えてゆくのであった。しかし建物の構造上使っていた材料の関係から大抵の場合は一軒丈ですむのであった。それで類焼と言うものは殆んど少かった。昼間は兵士や土民の通行もあり大した感じもしないのであるが、宵近く月の出る頃はもう通る者は殆どなく灯のつかない所には、まだ消えやらない火災の音が、大きな梁がぶすぶす燃えくすぶっていた。

要所所に立つ歩哨の銃剣も物々しく戦乱の巷、廃墟と言った感じが深く、そしてくずれ残った窓からは微発したのであるうハーマニカやバイオリンの音色がかすかに洩れてくるのであった。さすがに空襲の洗礼を受けているこの街は灯火管制なども徹底したものであった。

大抵の家には窓口にもう真黒の布が張ってあり、空襲警報の種類を書いた紙が貼ってあった。着いた翌日早速牛一頭を殺して滞在間は毎日スキ焼でやった。貝柱や椎茸もあったので、出発する前日にはそれを煮つめて筍の空缶に詰めて携行することにした。出発する前日の夕方背囊や砲を舟に積みに行った時狭い露路には戸毎に日章

旗が貼り出されて一寸内地へ来た様な気がしたのだった。この街も矢張り昆山のように様々な文字が道路の壁に書きつけられてあった。国家存亡此一戦の国家興亡匹夫在責、大した抵抗もうけず入城した事とて城壁も何にも壊されていなかった。

まだ書きたい事もあるが想出はこの辺で筆を止めることにしよう。
十二月十六日午後三時

十二月十六日

明日の入城式を控えて兵器の入手や被服の入手、洗濯、身の廻りをする。馬も戦争中泥まみれになっていたのできれいに洗って幾月振りに馬体の入手する。上陸以来泥まみれ雨に打たれ只ひたすらに兵器や弾薬を駄載して黙々として兵隊の命ずるままに協力して呉れた馬が居たればこそである。

十二月十七日

今日は南京入城の日である。

自分達は参列せず昼頃から示威行軍に出る、紫金山麓中山陵である。中山路へ来ると野戦郵便局が開設されていて、自分も長い列に加わってスタンプの順を待った。酒保自動車が出来ていて兵隊が蟻のようにたかっていた。朝鮮鮎や乾ブドウを食べた。中山門外で小憩して時間も遅く疲れたままに帰途につく、手榴弾を拾って水壕に投擲し魚を捕うとしたが魚は浮いて来なかった。帰り道国民政府の見学をと思ったが、中へはもう入れず門頭高く掲げられた「国民政府」の金文字に日章旗がひるがえるのを仰いで帰る。

十二月十八日

昨日行軍しなかった組が昼食携行で出発した。自分等はサイドカーで街を廻っていたが中山陵迄行こうと言う事になりサイドカーの

た。

次の南京駐留の日記を纏める事を常態にて思い立ちぬ。消灯後或は休日、暇を偷みて書きぬ。十二月十五日迄は常熟駐屯内に書きしなり。第三期作戦行記に移るに及んで、このまま梱包するに忍びず暇あらば書きかえむとて持ち来ぬ。

四月下旬長〇〇街滞在間幾度かペンをとることを思い立てど心落つかず、ただ言訳のみ書くことを得たりき。十七日、十八日以後一度巡察の為自動車を駆りて長江河畔十六日の夜の現場に白昼行きたる事ありき。河水赤く濁りて幾多の生霊を呑みたる事未だ生々しきに何事も知らぬげに悠々たる流れをなし居たりき。其の他ねぎ畑のうちに点在するクリークに手榴弾を投じ魚を獲りたる事も屢々なりき。

十二月二十六日

新駐地常熟に向い再びは見る事ならめと信じて南京の地を後にしぬ。されど第三期作戦に移りてかの埠頭より乗船して江北に渡れり。後日又機を得ば再びペンを取り直さむ事を希う。

昭和十三年五月十日江北王家林にて

中山陵を下りて更に溪谷の彼方森の上に抜んで聳ゆる五重塔迄行く事にする。アスファルトもすんで砂利を敷きつめた道路である、道路が交錯した所では暫し迷って漸く到着する。幽遠な木立の中に鉄筋コンクリートの巨大な塔が屹えているのであった、朱の文字で愛国烈士とかもう今は忘れてしまったが、とにかくそれは忠霊塔であった。革命軍の将兵をまつたものであろう。それを見てからかえった。中山陵をすぎて少しき頃、漸く徒步部隊が来るのになあ



水谷莊日記「戦塵」

歩兵第七聯隊第一中隊・一等兵

日記原本により本人が清書したもの。一部は『歩七の友』昭和六十一年十一月一日号に掲載

昭和十二年

十二月十三日

午前三時三十分、南京総攻撃に備え、第一中隊は前方六〇〇米の部落、後庄を目標に工兵学校練兵場の中程まで前進。

木越中隊長、小村小隊長、川崎軍曹等が地上に拡げた地図を囲んで空を背景に透かすようにして、周囲の地形を偵察して後庄の位置を探しているが、なかなか決定しそうにない。

俺達指揮班は傍に掘り下げられた土の階段を見つけて下りて見た。降りきった処には、上空から遮蔽して三米四方もある大きな井戸が掘られていた。四方に地下壕が通じ、各散兵壕からも、容易に水を運んだらしいこの井戸は、流石に工兵学校だけの事はあると、

工事の出来映えに感心しながら、冷たい夜風を避けていた。

俺達が寒風を除けているにも拘らず、幹部が身を切る寒風に、吹き晒しである事は、心に咎めるものがあって、階段を上がった。何も言わなかったのに、多々見もついて来た。

幹部はまだ決し兼ねている様子。程なく議決された。

「あれが後庄だ。行こう。」

小村小隊長の声だ。その方向には藪か林か、そんな影で部落らしいものが微かに認められた。

「中隊後庄到着と、大隊本部に報告しましょうか。」

俺が言った。此所から報告に出た方が、現地に到着してからよりは、遥かに早いのだ。

「そうだな。よし」

そう返事を受けたが、此処に居るのは俺と多々見の二人だけだ。

二人は直に大隊本部に至り、命令受領者のM班長に報告して引き返